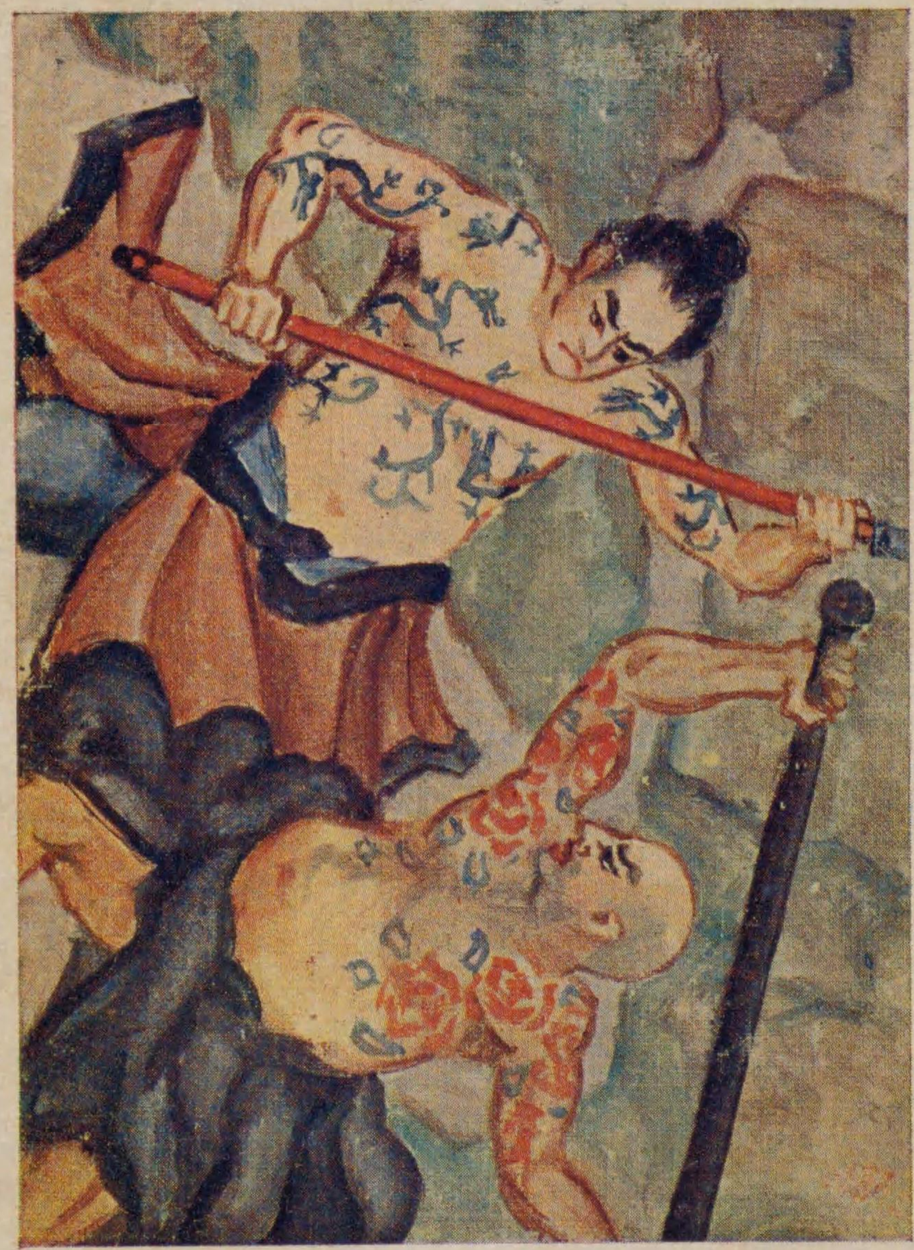
569-61
1200501419551

世界大衆文學全集

水滸傳

笹川臨風譯

改造社



（源義経六二）……弁慶を踏と杖禮てつ振打刀杖、てし腰立に禮無の個怪は男の旅……

569
61

I 種
W

1200501419551

譯者

はしがき

水滸傳は三國志、西遊記・金瓶梅と竝び稱せられて支那に於ける四大奇書の一と言はれ紅樓夢をも加へて、巨篇大作として知られてゐるが、西遊記とともに、益々その尤なるものであらう。宋江等三十六人が盜をして河湖の間を横行したことは宋史に見え、之を敷衍して宣和遺事、癸未雜識に詳にしてゐる。更に之を脚色したものに水滸傳があるが、其作者に就いては異說が多い。或は施耐庵と言ひ、或は羅貫中と言ひ、定說がないが、施耐庵集撰、羅貫中纂修と言ふ折中說が最も有力になつてゐる。

回數に有りても、諸本同じくなく、百二十回本、百回本、七十回本の他にも、百十回本百十五回本などがあると言ふことが、百二十回本がよし底本でなくても、底本に近いものと言はれてゐる。百二十回本は卽ち忠義水滸傳と稱するもので、我邦で古く飜譯せられたものも此書である。

然し原本として最も流布してゐるものは、流布本の金聖嘆評七十回本で、聖嘆が縱横巨細に評言を加へてゐるので名高い。如何にも梁山泊の英雄どもが惡刺事に驚かされたところで打切つたところは、聖嘆の手品に相違なく、水滸傳作者の關與する所ではないが、最も流通が廣い本であるから、こゝでは此書に依りて、新に譯述してみたのである。

從來の譯本を見るに隨分い〻加減で、誤譯も少くないから、斷然流布本に依りて、忠實に逐字譯を試みたのである。然し水滸傳は頗る長篇であるから、此書一冊には到底收むべくもない。僅に三分の一强を載錄してゐるに止まる。然しこれを以て水滸傳の何ものかは略々知ることが出來るであらうし、舊譯に比して、水滸文脈の正を傳へてゐる點に於て相違があるだらうと信ずる。

水滸傳の特色は痛快淋漓なるところにある。登場人物の多種多樣なるとともに、場面の變化に富んでゐるところにある。雲烟開闔して、峯巒出沒の妙を極むるところにある。忽ちにして雨、忽ちにして月、風起り、浪立ち、巖峙ち水激するところにある。絕えて女々しいところがなく、總てが男性的なところにある。脂紛の氣がなく、兒女の態がなく、英雄の氣象が充滿するところにある。八年の溜飲が一度に下るところにある。骨鳴り肉動き壯士髮冠を衝くところにある。凡庸卑俗の惰氣を一掃して、潑剌たる元氣橫溢するところにあるきぴ〳〵した氣味のい〻ところが此小說の本領である。古來千古の奇文なりと稱されてゐるのは決して、誇言でない。

流石に水滸傳はあの茫漠たる支那の產物であるだけに、規模が大きく、舞臺が廣く、それで讀んでゐると、今の支那も亦水滸傳の支那であると言ふ氣がしてならない。

笹川臨風識

目次

發端……六
一、史家村の九紋龍……二一
二、史家莊の夜襲……四九
三、花和尙……五七
四、五臺山の怪僧……七九
五、桃花山の山賊……一〇七
六、瓦官寺の惡魔……一二八
七、白虎堂の難……一四六
八、滄州路の危難……一六九
九、野猪林……一八二
一〇、山神廟の風雪……二〇二
一一、水亭の響矢……二二七

一二、梁山泊の投名狀……二三四
一三、青　面　獸……二四八
一四、黃泥岡の毒酒……二七四
一五、二龍山の奇襲……三一一
一六、晁家莊の夜襲……三三一
一七、梁山泊の占領……三四九
一八、慘劇の夜の前……三七〇
一九、毒婦落命……三九〇
二〇、祕密の地下室……四一五
二一、景陽岡の虎……四二七
二二、三寸釘の妻……四四七
二三、落花流水……四七六
二四、骨と十兩……五〇五

水滸傳

水滸傳

發端

紛々たる五代亂離の間、一旦雲開けてまた天を見る。草木百年雨露新に、車書萬里江山舊りたり。尋常の巷陌は羅綺を陳ね、幾處の樓臺は管絃を奏す。天下太平無事の日、鶯花限なく日は高うして眠る。

此詩は、過ぎし宋の神宗皇帝時代の名儒と云はれた康節先生邵堯夫の作るところで、五代の間續いての戰亂を嘆いたものである。まことや朝には梁に屬したものが、暮には晉に附くと云ふ體たらくで、朱氏だの、李氏だの、石氏だの、劉氏だの、郭氏だのが梁、唐、晉、漢、周の五代を代る〴〵立て、其間十五帝、五十年の戰亂、世は茹蔦の亂れに亂れたのであつた。然るに天道此に循環して、軍陣の間に一個の英雄兒宋の太祖皇帝を現出した。斯人の生れたときには、天に赫灼たる光滿ちて、暫しの間は異香四方に薫じたと云ふことである。取りも直さず、上界の霹靂大仙が偶々人間に天降つたもので、其勇氣と智略とは、古來の帝王が誰しも及ぶ所でなかつた。天下を一統し、中原を鎮定して、國を大宋と號し、都を汴梁に定めて、十五代四百年の基を開いた。邵堯夫が讃して、「一旦雲開いて、また天を見る」と云つた如く、人々は天日の面を仰いだのである。當時西嶽華山に陳摶處士と

云へる道德高き人があつて、豫言の妙を得てゐたが、或日驢馬に騎つて山を下り、華陰道中に向ふ、道すがら、途行く旅人の物語るを聞けば、周の世宗が位を趙匡胤（宋の太祖）に讓つたとのことで、處士は心中歡びに堪へず、額の上に手を擧げて、驢馬の上で大笑ひした拍子に、大地へどつかとばかり投げ出された。「これはどうなすつた。」と尋ねた人に、「いや結構々々、世の中は之から定まるでござらう、天の心にも地の理にも人の和にも合してゐる、いや結構々々。」と云つたさうな。

太祖は在位十七年、天下太平で、位を弟の太宗に讓らせられ、太宗皇帝在位二十二年で、位を眞宗に讓り、眞宗は又仁宗に讓られた。此仁宗皇帝上界の赤脚大仙が降下したもので、降誕されると、どうしたものか晝も夜も啼いて、止まなかつたのである。朝廷には高札を出して、誰にてもあれ、之を療治し奉るべきものはなきかと名醫を召募なされた。すると天界にては太白金星を下界に差遣はされ、一人の老翁と姿をかへて、高札を取下し、「太子のお啼きをお止め申さう。」と申上げた。高札を守る番人は之を宮中に召連れて眞宗皇帝に拜謁し奉らせると、大奥に參つて太子を拜診致せとの聖旨。老翁は大奥に進み入つて、太子をひしと抱きかゝへ、御耳もとに、八字をひそ〳〵申上げると太子の啼泣はぴたりと止んだ。すると、老翁は己が姓名をも名乘らず、一陣の清風と化して、行方も知れず消えてしまつた。其八字とは他ならず、「文有文曲、武有武曲（文に文曲星あり、武に武曲星あり）」とありて、まことはこれ玉帝より紫微宮中兩座の星を下して、當代の天子を輔佐し奉るとの義である。文曲星とは南衙開封府主龍圖閣大學士包拯、武曲星とは征西夏國大元帥狄青で、二人の

賢臣が現れて、仁宗皇帝を輔佐し奉つたのである。在位二十九年の間、年號を改むること九回、天聖元年卽位してより天聖九年に至るまで天下泰平にして、五穀豐かに、萬民業を樂み、路に遺ちたるを拾はず、夜戸を閉さなかつたと云ふほどに無事であつた。此九年を第一の豐年と稱する。明道元年から皇祐三年に至る九年間も之亦豐作で、之を第二の豐年と云ひ、皇祐四年より嘉祐二年に至る九年間は殊更五穀豐熟したれば、之を第三の豐年と謂ひ、總じて三九二十七年間を三豐年の世と稱した。然し樂極りて悲生じやうとは、神ならぬ身の知る由もなく、嘉祐三年の春には諸國に惡疫流行して、猖獗を極め、江南より兩京に至るまで、處として此病に冒されざるはなく、各州各府よりの報告は吹雪の如く紛々として飛來したのであつた。東京の城內も城外も、此病に襲はれて、軍民の大半は死亡すると云ふ體たらくであつたから、開封府主包待制は惠民濟和局の處方に依り、俸給を割いて藥劑を調合して萬民を救濟したが、病勢はいよ〳〵盛にして、其甲斐はなかつた。文武百官は待漏院中に集り、額を鳩めての大許定、早朝天子に拜謁して此事を奏聞申さんと待ち受けてゐた。

嘉祐三年三月三日、昧爽、皇帝は、紫宸殿に出御ありて、百官の朝賀を受けさせられた。拜賀の式が畢ると、座上の主殿官は竝居る百官に向ひて、

「奏聞申さるることがござらば列を出て速かに申されよ、事なくば簾を捲いて退出されよ。」

と、云ひ渡すと、列中の宰相趙哲、參政の文彥博は列を出て、

「唯今京師に惡疫流行致して軍民を傷ふこと甚しうござります。仰ぎ願はくば陛下罪を釋し、寬大

の御恩を加へさせられ、刑罰を省き、租稅を輕くし、天災を禳ひ、萬民をお救ひ下されたう存じ上げます。」

と、申上げた。天子は此奏聞を御聽許遊ばされて、急に林翰院に勅あり、親書を起草して、一方には天下の罪囚を赦し、人民の祖稅を免ずるとともに、一面には東京の社寺に惡疫撲滅の祈禱を命ぜられた。然し惡疫の流行はます〳〵熾であつたから、皇帝は宸襟安からず、再び百官を會して御前會議を開かせられた。此時、群臣中より進み出て奏聞申上ぐるものを、皇帝誰かと見そなはせば、これなん參知政事の味仲淹であつた。天機を奉伺して後、

「目下天災盛に流行仕り、軍民塗炭の苦みにて、日夜生を聊ずること叶ひませぬ。臣が愚意を以て考へますれば、此災を禳ひまするには嗣漢天師をば急に朝廷に招きまして、京の勅願所にて三千六百分羅天の修法を執行はせ、上帝に奏聞して、災を禳ひ、惡疫を除くより外はござりませぬ。」

と、奏聞した。天子は之を嘉納して、俄に翰林學士に勅書の起草を命ぜられ、御筆にて御親書あらせられ、御香一炷を添へて內外提點殿前太尉洪信を勅使となし、江西信州の龍虎山に赴いて、嗣漢天師張眞人に至急來廷して惡疫撲滅の祈禱を致すべきやう仰せられた。此日、天子は御殿にて玉香を焚き、親しく詔書を洪太尉に授け給ひ、洪信は聖旨を領し、拜辭して、詔書を背に、御香を盛り、數十人の從者を從へて、早馬に跨り、東京を跡にして、信州の貴溪縣を經、江西の信州に到着した。州の官吏は城外にて一行を迎へ、直に人を遣りて此旨を龍虎山上淸宮の住持等に報じて、勅使を迎ふるの

用意をさせ、翌日、太尉を送りて龍虎山下に至つた。上清宮にある多くの道衆は鐘、太鼓を鳴らし、香花、灯燭、幢幡、寶蓋美々しく、山を下りて勅使を迎へた。洪太尉は上清宮の門前にて馬を下り進み入れば、住持、眞人より道童侍從に至るまで前後に供奉して三清殿に請じ、詔書を受けて之を殿中に安置した。太尉は宮守の眞人に打向ひ、

「天師は何處においでなさる。」

と、尋ねた。住持の眞人は進み出で、

「さらばお話し申しませう。當代の祖師は虛靖天師と申されまして、至極德の高い恬淡の御性質でござりますれば、世間のことをとんと胡蠅がれて、此山の上に草庵を結ばれ、此にて修行なされて居りますから、當所には不在でございます。」

と云ふ。

太「陛下よりの御詔勅であるが、如何して天師に逢はれやうかなう。」

住「御詔勅は假りに殿上に安置し奉りましたが、無論私どもは拜讀致しません。まあ〳〵暫く方丈へおいで下されませ。お茶を差上げまして、ゆる〳〵御相談を申しませう。」

詔勅は三清殿に奉安して、太尉は一同と方丈に通ると、此にて茶を進め、齋の款待があつた。太尉は住持の眞人に打向ひ、

「天師が山上の庵室に居らるゝなら、誰か迎ひのものを出して、此でお目にかゝつて、詔勅を傳へよ

うではござらぬか。」

と、催促すると、住持は、

「祖師は山上においでなされますが、尋常一樣ならぬお方で、或時は霧に駕り、或時は雲を興し、其行方は定かでござりませぬ。私どもですら、お目にかゝることは難うございますから、どうして迎へなどが出されませう。」

と、無下に退けた。

太「さうすりやどうして逢はれやう。唯今都に惡疫流行致すに依り、陛下は特に某に仰せあつて宸翰の御詔勅と龍香とを捧げて天師を請じ、三千六百分羅天の修法を執行して、天災を禳ひ、下萬民を救はんとの御意でござるに、こりやどうしたらよからうなう。」

住「陛下が萬民をお救ひなさらうとの御思召でござれば、太尉殿にも誠の心が無うては叶ひませぬ。齋戒沐浴なされて、布の衣にお着換へなされ、伴人をも連れず、唯一人、御自身に詔書を背負ひ、御香を焚き、步行にて御登山なされ、禮拜して天師にお請ひなさらば、お逢ひが出來ませう。然し萬一御志に誠がないと、御登山なされたとて無益でお逢ひなされることは難うございます。」

太尉は聽き畢りて、

「某都を發足してからは精進して參つたのに、何で誠の志が無からう。よし〳〵とにかく其方の云ふ通り、明日は早くから登山致さう。」

と、決心の旨を申述べて、其夜は此でゆるりと休息した。翌日夜が明けると、衆道士は起きて香湯の支度を調へ、太尉に沐浴させる。太尉は新しい布の衣に着更へて、麻の草鞋を穿き、素齋を喫し、詔書を黄色の羅に包んで之を背にし、銀の香爐を手にして、御香を焚きながら登山の途に就いた。数多の道人等は後の山まで見送り、路や小路を懇に指し示し、住持は別れに臨んで、

「太尉殿、萬民を救はうとのことならば、途中で厭氣など起しなすつてはいけません。ひたすら誠の心でおいでなさいまし。」

と、云ふ。太尉は一行に別れて、口に尊號を唱へながら、足に任せて山を上り、九十九折なす山路を獨りとぼ〳〵と或は葛にすがり、或は藤の蔓を攀ぢ、二つ三つの嶺を超え、二三里がほども歩いたが、足は疲れる、腿は痛くなる。もう歩かうにも歩かれず、喋舌らうにも喋舌られず、心中に、我身は朝廷にて地位も貴く、都に在らば裀を重ねて寢ね、數多の珍味を並べて食うても、猶倦怠するのに、馴れもせぬ草鞋を穿いて、不知案内の山路を徘徊ふとは、こりや何たる因果だ、一體其天師はいづくにありて、某を斯くも苦めるぞと、思はず、不平不滿の愚癡を並べた。すると、やつと五十歩も歩くか、歩かないに、もう息づかひが苦しくなつた。と見る、山の隈から、一陣の風が颯と起りて、吹き過ぎると思ふ間もなく松の大木の後から一聲雷のやうに吼えて、跳り出たのは、一匹の睛の吊し上つた白額錦毛の虎、洪太尉はあつとばかりに仰天して、其儘後にどつかと倒れる。虎は太尉の周圍を左より右より旋りて、一たび物凄く唸つて、急に後の山の蔭を目蒐けて跳り入つた。太尉は樹

の根本で、齒はがた〳〵震へて合はず、動氣はどき〳〵して、總身は痲痺れ、足はぶる〳〵動きもならず、口の中では頻りに苦痛を叫んでゐたが、虎の姿が見えなくなつて暫くして、やうゝ〳〵に起きあがり、地上に投げ捨てた香爐を拾ひ取り、再び龍香を焚きながら山に登つて天師を尋ね求めようとした。三五十歩も行くと、又嘆聲を漏らして、怨めし氣に、陛下もどうして某をこんな處にお遣しになつて、斯る酷い目に逢はせて下さるのだらうと、云ひも畢らず、一陣の風腥く吹いて來る。太尉はぢつと見ると、こはそも如何に、竹藪の裏がざわ〳〵と鳴り響いて、一條の桶のやうな純白の大蛇が此方を目蒐けて進み來る。太尉は氣も魂も身に添はず、あなやとばかり香爐をそこへ投げ出し、

「もう今度は死んでしまふ。」

と、一聲叫ぶと、背の大磐石のあたりへべつたり平伏る。大蛇は直に、巖のほとりに這ひ寄り、太尉を見て、とぐろを卷き、兩眼は金色の光を放ち、大口開いて、舌を吐き、太尉の瞼に向つて毒氣を吹きかけた。太尉はもう死んでしまつたと同樣だ。すると大蛇は悠々と太尉を睨んだ儘、山下に向つてするゝと下りた。太尉はやつと這ひ上り、

「まアよかつた。ほんとに驚いてしまつた。」

と、身振ひしたが、肌は饂飩玉のやうな毛穴が立つて鳥肌となつてゐた。

「えい、惡いはあの道士ばら。無禮にも某を翻弄致して、こんなに吃驚させやアがつた。よし〳〵山上で天師に逢へねば、下山して彼奴等を取つちめてやらう。」

と、又もや銀香爐を取り上げ身づくろひして、再び、山上を目がけて、歩き出さんとする時、松のあなたから、微かに笛の音が嘹喨と聞えて、次第々々に近くなつた。太尉は其方を向くと、一人の童子が後向に飴色の牛に乗り、一管の鐵笛を吹きすさんで、にこやかに山を過ぐるのであつた。

太「おい〳〵小さいの、どこから來たのだい、此私を知つてゐるかい。」

と、云つたが、童子は知らぬ顔で、笛を吹くことを止めない。太尉は二度三度聲をかけると、童子はから〳〵と笑つて笛で太尉を指し、

童「貴方は天師に逢はうとして、此へおいでなさつたのでせう。」

太「おやどうしてお前はそんなことを知つてゐるのかい。」

童「私は朝早く庵室で天師のお側にゐて、天師が、陛下から洪太尉を使として、勅書と御香をもたせて、此山中によこし、東京へ來て三千六百分羅天の修法を行ひ、天下の惡疫を禳はせられようとの御意だから、私は鶴に乘り雲に駕つて往つて來るぞとお話なされたのを聞きました。だから天師はもうお出かけなされて、庵室にはおいでなさいますまい。貴方は早く下山をなさい。この山中には毒蟲や猛獸が大へん多いのですから、うつかりすると、貴方の命が危うございますよ。」

太「そんないゝ加減を云つちやいけない。」

童子は笑つて返事もせずに、又笛を吹きながら、山の彼方へと去つた。

「あの小わつぱがどうして此己のことを知つてゐるのかな。こりやてつきり天師が云ひつけたのだ。

もつと山奥へ行かうと思つたが、すんでのことで、命を棄てるとこだつたから、こりやもう下山する方が善い。」

と、太尉は心中に定めて、香爐を手にしながら舊路を辿り、急いで下山した。衆道士は太尉の歸るを見るより方丈に請じ入れ、座定まつた後、住持は、

「如何でした、天師にお逢ひなさいましたか。」

と、問へば、太尉の不平は一時に爆發した。

「某は朝廷の貴官だのに、お前達はひどい目に逢はせよつて、すんでのことで一命を棄てるとこだつた。先づ最初は山の途中で一匹の恐しい眼をした白い額の虎が飛び出して、某めはあつたら膽を冷やした。又一寸山の端を廻ると、藪の中から一條の眞白な大蛇が這ひ出て、とぐろを卷いて行手を塞ぎをつた。運が好いからこそ、命も棄てずに都へ歸ることが出來るのだ。こりやみんなお前達が、某を愚弄しくさつたのだ。憎つくい奴め。」

と、太尉は威丈高になる。

住「いや〳〵どう致しまして私どもが閣下を輕蔑致しませう。これは皆祖師が閣下の御心をお試めしなさるのでございます。此山には大蛇や虎が居りましても、決して人を害しは致しません。」

太「某が再び登山せんと致したるに、松のほとりから一人の童子が一匹の飴色の牛に騎り、笛を吹いてやつて參つた。某、彼にいづくより參つた、某を知るかと尋ねると、彼は善く心得よつて、

天師は早朝鶴に乗り雲に駕して東京に出發したと申しをつた。そこで某は歸つて來たのだ。」

住「太尉殿、そりや殘念なことをなさいました。其牧童こそは天師で。」

太「何だ天師だ。どうしてあのやうな賤しい姿で。」

住「天師は並の方ではございません。年は幼く見えても、そりや非凡非常の道德高いお方で、四方に不思議な靈驗をお示しになりますので、世人は道通祖師と申上げて居ります。」

太「さうか、某眼があつても大師を識らなかつたのだ、こりやしくじつた。」

「いや太尉殿、御安心なさいまし、祖師が都においでなされたと仰せなさりや、閣下が御歸京の頃には修法の執行も濟んで居りませう。」

斯う云はれて、太尉もやつと安心した。住持は宴席を設けて、太尉の慰勞をする。詔書は箱の内にしまつて、上清宮中に留め置き、龍香は三清殿を焚いてしまふ。此日は方丈内で宴を張り、酒を進めて夕に至り、一泊して其夜を過した。翌日朝飯がすむと、住持道衆、執事等は太尉に山内の一見を勸める。太尉は大の機嫌で、數多の人々を伴ひて方丈を出た。童子二人案内して、宮前、宮後に至り、さま〴〵の風致を賞觀した。三清殿上の美觀は云ふべくもない。左の廊下には九天殿、紫微殿、北極殿、右の廊下には太乙殿、三官殿、驅邪殿がいづれも並んでゐる。此等の宮殿を見物して右の廊下のうしろに出ると、こゝに又一宇の殿堂がある。總て椒を塗りこめた紅い壁で、正面には二枚の紅い格子がはまつてゐる。其格子戸には丈夫の大きな鎖が懸つて、其上には十餘枚の封皮をつけ、封皮の

上にはべた〳〵と無數の朱印が捺してある。簷には丹塗の額に金字で伏魔之殿と四字が寫し出されてゐるのである。太尉は之を指して、

「こりやどう云ふ處だ。」

と、尋ねると、住持は、

「前代の老祖天師が魔を封じこめた處でございます。」

と、云ふ。

太「あの澤山の封皮は。」

住「老祖大唐の洞玄國師が魔王を封じこめたのですから、代々の天師は一枚づつの封皮をつけまして子子孫孫が無暗に開けて魔君を走らせ、非常の危險を生ぜないやうにとのためでございます。もう八九代も祖師が替りますが、誓つて開けません。此鎖は鍵を入れて開けないやうに銅の汁を注いで鑄つたのでございます。中には何がございますやら私は此山内に三十餘年も住んで居りますが、唯話にだけ聞いて居ります。」

聽いてゐた太尉は心中に驚いたが、其魔王なるものが見たくなつた。

「お前は此門を開けなさい。某は其魔王がどのやうなものか一見致さう。」

住「滅相もないこと。先祖天師が嚴重に戒められて、誰にても濫に開くなと禁じ置かれました處なのです。」

太尉は笑つて、
「馬鹿を云ふな。お前達はい、加減な不思議なお話を作つて良民を惑はし、殊更にこんな處をこしらへて、魔王を封じこめたと云つて、自分の有難味を附け加へてゐるのだ。某いろいろの書を讀んだが魔王を封ずる法はない。一體鬼神と云ふものは幽冥を隔てゝゐるのだから、こんな處にゐる筈はない。ちつとも早く打開けろ、某其魔王の正體を見屆けてくれよう。」
住持は繰返し〳〵、
「此殿は明けることは出來ませぬ、どのやうな難儀なことが起らうも知れませぬ。」
と、云つたが、太尉は大いに怒り、居並ぶ道衆を指して、
「お前方はどうしても開けぬと申すか。よし〳〵某朝廷に歸りて、お前方は勅命を妨害し、聖旨に違背し、某を天師に逢はせない、又私に此殿を作りて魔王を封じ込めたと云つて、人民百姓を惑はしてゐると奏聞申し、道士の免狀を取上げて、遠方の邊鄙な處へ流して、十分苦しませてやらう。」
と、猛り立つので、住持ども、其威勢に怖れ、是非なく寺内の人夫どもを呼び集ひ、封皮を取り棄て、鐵槌にて、はつしとばかり大鎖を打碎き、門をさつと開いて一同殿内に雪崩れ入つた。
殿内は黑暗々として一物も見えない。太尉は從者に十數本の松明を燃させて、あたりを照らし見るに、中央に唯一つの石碑があるばかりだ。其高さは五六尺ばかり、下には龜の臺石があるが、大半は土の中に埋もれてゐる。石の前面に彫られた文子は何れも字體が難澁で、讀むことが出來ぬ。裏面を

照らして見ると、楷書で、『逢洪而開』（洪に逢ひて開かる）と大書してある。太尉は之を見るより、
「どうだ、お前方はやかましく止めたが、數百年前から、ちやんと某の姓が此に彫られてゐるわい。洪に逢ひて開かる。明かに某に開かせようとするのだから、些とも遠慮はいらない。魔王は此碑の下にゐると見えるな。さあもつと人夫を連れて來て、鋤だの鍬だので、此を掘り下げい。」
と、大喜び。住持は慌てゝ、
「閣下此を掘つちやいけません。どんな事が起らうも知れませぬ。」
と、止める。太尉は怒つて、
「某に逢つて開かると明に書いてあるのが分らないか。妨げ致すな。早く人夫を呼んで來て、四の五の云はずに開けろ。」
と、大喝一聲叱りつける。住持はひたすら哀願して、
「きつと好いことが出來ますまい。」
と、いつたが、太尉は何でう聽き入れやう。多數の人夫を聚めて、石碑を倒し、一同にて龜の臺石を掘ること半日、やつと掘り出すと、又其下を掘り下げること三四尺に及ぶと、一丈四方の青い石板が現はれた。太尉は、
「それ掘り出せ。」
と、怒鳴るを住持は、

「これを掘つては成りませぬ。」
と、もう一生懸命。
「えい、邪魔するな。」と太尉の命令は激しく、衆人も是非なく、其石板を一同にて持上げると、其下は底知らずの深い穴であつた。
途端に穴の中に突然と物凄い響が起つた。すはや一道の黒氣は滾々と渦巻の如く、潮の如く、むくむくと湧き上つて、忽ち殿角を刎ね飛ばして、大空に舞ひ揚り、百十道の金光は、燦爛と虚空を照らして、四方八方に向つて飛び散つた。
驚いたのは大衆一同、わつとばかりに鋤を投げる、鍬をはふり出す、一目散に殿内から遁れ出ようとして、推し合ひ、へし合ひ、こけつ、轉びつ、命からゞゝであつた。太尉も目を見張つたまゝ、口あんぐりと、顔の色は土の如く、廊下を指して逃げ出す。困じ果てゝゐる住持に向ひ、
「あの飛び出したのは、どう云ふ魔物だ。」
と、尋ねる。
住「御存知ありませぬか、其昔し老祖天師洞玄眞人が法符を下し、此殿内に三十六員の天罡星と七十二座の地煞星と併せて一百八の魔君を封じ込め、石碑を立てゝ、其上にあの難解な文字で其姓名を記して置かれたのです、彼等を世間に出したらば、どのやうなことを仕出かして人民に難儀をかけるかも知れませぬ。ところが閣下は今彼等を世にお出しなされた。どうせいゝことはございますまい。」

と、云はれて、太尉は全身冷汗でびつしよりとなり、がた〳〵震へて急にとまらぬ。急ぎ行李を集めて伴人引連れ東京へと下山の途に就いた。道人どもは之を見送つてから宮に回りて、殿内を修繕し、石碑をまたもとの通りに立て直した。
洪太尉は途中で、伴人どもに妖魔を走らせた一件は堅く口外することを禁じた。此一條が知れると、天子の譴責を受けるは必定であるから、それを恐れたのである。斯くて夜に日についで急いで都に歸り、汴梁城に入つて、人の噂を聞くと、天師は都の勅願所にて七晝夜の修法を行ひ、御符を頒かち、災病を禳つたので、さしもの惡疫も退散し、人民は安堵の思をしたが、天師は鶴に乘り雲に駕して又龍虎山に歸つたとのことである。太尉は翌日早く、天子に謁見し、天師は鶴に乘り雲に駕して早くも都に到着されたが、某等は宿場々々で傳馬を乘り繼いで、やつと歸京致しましてございますと奏聞した。天子は太尉の勞をお賞めなされ賜ふ所がありて、またもとの官職に復された。
仁宗皇帝は在位四十二年にして崩御ありたるも太子なく、位を漢安懿王允讓の子にして太宗皇帝の孫なる方にお傳へなされた。卽ち眞宗皇帝である。在位四年にして位を太子神宗にお傳へなされ、神宗は在位十八年にして位を太子哲宗にお傳へなされた。此時、天下太平にして四方は無事であつた。

一、史家村の九紋龍

此に哲宗皇帝の御世に、東京開封府汴梁宣武軍に一人の浮浪破落の若人高二なるものがあつた。少

年の頃よりして家業は棄て置いて、やれ鎗、やれ棒と、武藝のみ習つてゐたがその最も得意とするところは蹴毬だつたので、都の人は彼を高毬と呼んでゐた。當人も之よりして毬の字を俵に代へて、高俵と稱へること、なつた。吹彈歌舞より刺鎗、使棒、相撲もとれば、曲藝もやつてのける。詩書詞賦までも生物識に嚙ると言ふ多藝さであつたが、德義だの操行だのは、固より全くの門外漢。つね平生の職業はと言へば、幇間。鐵物商人の富豪王員外の倅を誑して遊蕩三昧に身を持ち崩させたので、親爺の王員外は以ての外に立腹し、開封府に告訴狀を提出して其處分を仰いだ。府知事は高俵を引捕へて背に二十杖を食はせ、追放して、東京城お構ひとした。高俵は已むなく、淮西臨淮州に赴き、此に賭場を開いてゐる遊人の柳太郎、世權を便つて身を寄せた。柳世權は固より遊人を世話し、日蔭者を匿まふ親分であるから、高俵は此で三年を過した。さるほどに、皇帝は南郊に天を祭り、風雨順なるを得たればとて、天下に大赦の令を布かれたので、高俵は計らずも恩赦を得て、今は東京に歸らんと思案を廻らした。柳世權は東京城内金橋梁下に藥舗を開いてゐる已が身内の董將士に手紙をつけ些ばかりの旅費を與へて出立させた。高俵は柳世權に暇乞し、荷物を背負ひて、東京に歸り、董の藥店を尋ねて紹介狀を差出した。董將士は高俵に逢つて、手紙を一見したが、心中に思ふやう、

「かう云ふ男は、とても私が家には置けぬわい。誠實のある人間なら家で世話して、子供達に學問の稽古でもして貰はうが、此奴、根が破落漢の幇間、取得のない人間で、おまけに前科者と來てゐる。三子の心百まで、根性の改まつてゐないことは知れたことだ。なまじ家に留め置いたら子供のために

も善うない。と云つて柳太郎の手前棄て置くわけにもゆかぬ。こりや一工夫が肝腎だ。」

と、表面は好意を表し、家に留めて置いて、日に下にも置かず、酒食のもてなしで、十餘日を過したが、董將士はやがて工夫して、一着の衣物を調へ、一封の手紙を作りて、

「折角賴つておいでなすつたが、御覽の通りの無力な私、お世話申したところで、お前さんの行末に大した爲にもなりませぬ。ですから小蘇學士へ推薦しませう。さうすりやお前さんの立身出世にもならうと思ひますが、どうです、お考へは。」

と、高俵に話すと、高俵は大喜びで、いたく禮を述べる。將董士は手紙を持たせ、案内して學士の邸へと赴かせた。小蘇學士は高俵を引見して、來書を一見したが、高俵が幇間的浮浪人たるを知つてゐるので、心中に此やうな男はとても邸に留め置くことは出來ぬ。それよりか、世話をして、天子の聟君なる王晉卿の邸に遣はし、其附人にしてやらう、一體王晉卿と云ふ人は、世間で小王都太尉と呼んでゐるが、かう言ふ男が好きだから、ちやうどよからうと。そこで、董將士へは返事をして、高俵を邸内に一泊させ、翌日一封の書面を認めて、從者に案内させて、小王都太尉の許へ送つた。元來此太尉は哲宗皇帝の妹聟で、神宗皇帝の駙馬がねである。風流の人物が好きで、かう言ふ男を採用する人であつた。小蘇學士から、使者が來て、添書を持たせて高俵をよこしたのだ、直さま返事を認め高俵は其儘留めて近侍とした。

斯くて高俵には一陽來復し、王都尉の邸で、親しく立ち働いてゐたが、一日太尉の誕生日に當り妻

の兄弟端王を招待して宴を張ると言ふ機會に逢つた。此端王は神宗皇帝の第十一皇子で、哲宗皇帝の皇弟に當らせられ、現に皇太弟格であらせられた。御兄弟の順序は九番目であるから、人は九大王と呼びなしてゐるが、聰明で、風流の御人柄、下情に通じて、浮浪人の風も、幇間の事も御存知で、何事にも趣味が深かつた。琴棋書畫にも明るければ、蹴毬も、彈弓も、絲竹の音曲も、吹彈歌舞も言ふを徨たなかつた。此日、王都尉の邸では殘る所なき準備で、盛宴を張つたのであつたが、端王は設けの席に就いて、太尉は之と對座する。酒は廻りさまざまの馳走は竝べられる。やがて端王は小用に起ちて、書院で暫し休息してゐたが、机の上に珍瓏たる、巧みな細工した一對の羊脂玉を彫んだ文鎭の獅子があるのを見て、手に取つてとみかう見、

「こりや好い。」

と、賞めそやした。王都尉は、端王が之を愛でたのを見て、

「まだ玉龍の筆架がありますが、同じ細工人の作つたものです。手許に出してはございませんが、明日、一緒に差上げませう。」

と、云ふ。端王は大喜び、

「そりや辱けない。その筆架は更に一段と善いものであらう。」

「明日は取出して御覽に入れませう。」

端王は禮を述べて、またもとの席に戻り、夕暮まで飲み食ひし、十分醉うて、宮中へとお歸りなさ

れた。

翌日、小王都尉は玉龍の筆架を取出し、二つの玉獅子の文鎭と一つに、之を金梨地の蓋物に入れ、黄色の羅に包んで、一封の書と高俅にもたせて端王の宮中へと送つた。高俅は主命を領して、端王の宮中へ到着すると、門衛から此ことを執事に通ずる。程なく執事は出で來り、

「どこの邸からおいでなすつた。」

と、尋ねる。高俅は恭しく禮し。

「王駙馬殿の邸から玉器を獻上致すために參りました。」

「殿下にはお庭で小姓達と蹴毬を遊ばしておいでなされるから、そちらへお廻りなさい。」

「どうか御案内を願ひます。」

執事は高俅を引連れて庭の門まで往つた。端王は、頭に紗の唐巾を戴き、身に紫繡の袍を着け、腰には文武の雙腰紐を結び、繡袍の裾を引きからげて、腰紐に挿み、足には金線を縫つた靴をば穿ち、數人の小姓を相手に蹴毬に興じて居られた。高俅は門を入つたが、わざと遠慮して、人々の背に佇んで待つてゐた。方にこれ彼が出世の絲口、好運の到來である。驀直に蹴飛げた毬は、端王美事に受け損じて、見物の人中へ向つて、高俅の間近く、轉び落ちんとする。驚破やと思ふ間もあらせず、高俅はさそくの分別、腰を屈めて、鴛鴦拐の一手で、はつたとばかり端王の方へと蹴返す。斯くと見たる端王は喜びに堪へず、

「お前は誰だ。」
高俅は進み寄つて恭しく跪き、
「はい私は王都尉殿の近習にございます。主人の命令を受けまして、お約束の玉器を持參仕りました。お手紙はこゝにございます。」
端王は莞爾と笑ひ、
「おう姉聟はそんなに氣にかけよつたか。」
高俅は書面を差出す。端王は蓋物を開いて、玉器を一見し、之をお側の衆に渡してしまはせ、その方のことはさて置いて、
「お前は如何にも蹴毬が上手だが、名は何と申す。」
高俅は手を組み合せて、跪き、
「私は高俅と申しますが、ほんの眞似ごとばかり致します。」
「さあ、一度蹴つて見い。」
「どう致しまして、私風情が殿下の御相手仕るやうなことは出來兼ねます。」
「私の蹴毬の結社は天下圓と申すのぢや。遠慮はいらぬ。」
「どう仕りまして。」
と、高俅は二度三度辭退したが、端王が達つての所望に、恐縮しながら、入場して幾番か蹴つて御覽に入れた。端王は喝采しばしやまぬ。高俅、平生の手なみを見せるは此時とばかり、毬は高俅の身體にぴたりと粘着したるが如く、合つては離れ、離れては合ふ。端王の喜びは一方でない、高俅を其儘留め置いて、一夜を宮中に過させた。

翌日、端王には宴を張りて、王都尉を招待する。王都尉は前夜高俅の歸り來らぬので如何せしかと不審に思つてゐるところへ、翌日、門衛から、九大王招待の旨を傳へて來た。王都尉は使者に逢つて招待の旨を領承し、直に馬を驅つて九大王の宮に到り、端王と會見した。端王からは厚く玉器の禮を述べて、設けの席上に入り、さまゞの饗應をする。座間に端王より高俅を貰ひ受けたいとの話、王都尉何でう辭み申すべき、どうかお側でお使ひ下されたいとのことで、端王は杯を執りて謝禮を述べる。それよりいろ〳〵の物語あつて、夕暮宴を撤して、王都尉は己が邸へ戻つた。

端王は高俅を宮中に留め、高俅はお側去らずの二なきものとなつた。斯くて二ケ月も經たぬうちに哲宗皇帝は崩御なされたが、皇太子がましまさぬので、文武百官は、評議を開き、端王を册立して、皇帝となし、徽宗皇帝と申し上げる。卽ち玉清教主微妙道君皇帝である。卽位後天下は太平無事であつたが、一日、高俅に宣はすやう。

「朕は其方を引擧げたいが、武功がなうては登すわけにはゆかぬ。先づ樞密院に言ひつけて、其方の名を書き入れさせよう。」

高俅は車駕のお伴をしてゐるものであつたが、半歲も立たぬうちに、一躍して殿帥府の太尉に出世

した。

吉日良辰を選んで、高俅は意氣揚々として、殿帥府に着任した。所屬の公吏、衙將、都軍禁軍の騎兵歩兵の將校は親任の太尉の許に伺候し、我もく〳〵と名刺を呈し、其名が報告される。高俅は一々人人を點檢したが、其中に唯一人、八十萬禁軍の教頭（近衞師範）王進が見えぬ。彼は半月以前に病氣を屆け出で、今も猶快癒に至らないのであるが、成上りものの高俅は、はつたと怒り、

「けしからぬ。名刺はあるに本人はゐない。此奴め官府に反抗して、拙者を邪魔いたすと見えるな。假病を遣つて、家に寢そべつてゐるのであらう。急ぎ引捕へて參れ。」

と、吐鳴つて、人を王進の許へ遣し、引捕へることを命じた。

王進には妻子なく、唯一人の老母があつて、もう六十路の坂を越えてゐる。使の軍卒は王進の家に到り、王進に打向ひ、

「高殿帥閣下が新任せられまして、點檢があると、教頭殿が居られません。軍目附が御病氣でお引籠りです。此通り病氣屆がありますと申します、と、高殿帥閣下にはひどくじれて中々信用なさいません。王教頭は假病で家にゐるのだ、すぐ連れて來いとのことです。教頭殿にはすぐさま御いでなさいまし、おいでにならぬと私までが連累になります。」

と、云ふので、王進は已むなく、病を推して、殿帥府に出頭し、高太尉に拜禮し、挨拶畢つて後、一隅に起立する。高俅は威丈高になり、

「お前は都軍教頭王昇の小倅か。」

と、云ふ。

「如何にも其通りです」

「ふゝん、お前の親爺は、町の中で棒を使つて藥を賣つてゐた奴だから、お前だつて、武藝なんか碌に出來まい。前任者が眼がないので、お前を教頭なんかにしたのが、てんきり間違だ。それを本官を輕蔑して出頭に及ばぬとは、一體何のことだ、お前は誣の威を假りて病氣だなんて謊ついて家で安閑としてゐるのか。」

と、云ふ、其聲は激しい。

「どうしまして。全く病氣が本復しませんので。」

「此懲役人め、貴樣が病氣なら、どうして此へ來たのか。」

「閣下がお呼びになつたのですから、來ないわけには參りません。」

「力まかせに彼奴を打ち懲らせ。」

と、高俅は左右のものに吐鳴りつける。然し、其場に居合はせた武人どもはいづれも王進と親しいものだから、軍目附ともぐ〳〵なだめて、

「今日は閣下が御新任の芽出たい日です、まあ〳〵今度のことはお許し下さい。」

「此懲役人め、將校どもの顏にめんじて、今日は許してくれよう。ぢやが明日はきつと處分をつけて

くれるぞ。」

と、高俅は喚いた。王進は詫言を云ひながら、ふと頭を上げて、初めて太尉の高俅なるを認めた。軍衙の門を出ると、思はず溜息つき、

「俺の命ももう今度はむづかしい。高殿帥と云ふのは誰かと思や、ありや、幣間の毬蹋、高二だつたのか。先年彼奴が棒を使ふ稽古をしてゐた時、父上の一棒に痛く打ちすゑられて、三四ケ月も起てなかつたんだ。彼奴、之を遺恨と思つてゐたから、出世して、殿帥府太尉となると、其仇討をしようとするのだ。俺が其部下にならうなんかとは夢にも思はなかつたことだ。古語にお上は恐くないが、上役が恐いと云つてあるが、正に其通りだ。とても彼奴と爭ふことは出來ないが、さて、これからどうしたらよからう。」

自宅に戻つても思案投首、吐息をついて、母親に一伍一什を物語つて、親子二人が頭を抱へて泣き伏した。

「こりや倅、三十六計逃げるが上策だが、困つたことには行く處がないね——」

と、母は其子を顧みると、王進は、

「お母さんの仰しやる通りです。私もさう思つてゐるのです。い、處があります。延安府の种經略老公のところが善うございます。國境の守備をなすつておいでなされます。老公の部下にゐる將校達は大抵都にゐたもので私の鎗棒を稽古したものですから、あすこへ參りませう。あすこなら使つてくれ

ます。十分安心してやつてゆけませう。」

と、自分の考を述べて、親子で相談を定めた。

「ぢやがなう、逃げるにしても、あの門前にゐる二人の從卒は、殿帥府からお前につけて、用を辯ずる人達ぢや。あのものどもに知られると、逃げる事がむづかしからうがな。」

「いや、其御心配には及びません。私が旨くやつてのけます。」

日は暮れたが、まだ明るい、王進は從卒の一人なる張を呼んで、

「夕食を食つたがよい。お前に往つて貰ふ使があるから。」

と、云ふと、張は、

「どこへ參ります。」

と、尋ねる。

「此間中の病氣で、酸棗門外の嶽廟にお香を上げる願をかけてゐる。明朝は早う往つて香を炷かうと思つてゐるのだから、今晩お前はあすこへ往つて、神官に明日の朝早く門を開けて置いて、私が往つたら、三つの犧牲を神に上げてもらうやうに話をして置いてくれ。お前は廟内に泊つて待つてゐてくれるが善い」

と、命ずれば、張は領承して、夕食をすませ、御機嫌善うと挨拶して出て往つた。

母子は行李や衣服を片づけ、手輕な金目の物を一包に引括り、二つの馬草袋を作つて馬上につける

やうに用意をして置いたが、明方になつて、夜はまだ暗かつた。そこで今一人の從卒李を叩き起し、

「おい、少し金を持つて、嶽廟に往つて、張と一緒に三匹の牲を買つて、煮て待つてゐてくれ。私はあとから、紙錢と蠟燭とを買つてゆくから。」

と、云ひつけると、李は金子を受け取つて嶽廟さして出てゆく。

王進は馬の支度を整へてから、厩より引き出し、馬草袋を鞍につけて、索にてしつかと結び、裏門口で、母を馬背に扶け乘せ、家の内にある手重な金目でないものは、其儘うつちやつて、表と裏門に鎖を下し、さて荷物を擔いで、馬のうしろに引き添つて、夜の明けぬうちに西華門を出て、延安府への路へと急いだ。

二人の從卒は、供物を購ひ、煮て、廟内で待つて、朝も餘程過ぎたが、王進の姿は見えぬ。李はもどかしがつて、家に戻つて見ると、こは如何に、前後の門はぴたりと閉つて、入るところもない。半日も探し求めたが、人氣は更にない。日はもう暮れさうになる。嶽廟に待ちあぐんだ張も不思議に思つて、一散に家に戻り、李と夕方中探してゐるうちに、みる〳〵日は暮れて眞の闇となつた。夜になつても王教頭も母親も見えないので、翌日、兩人の從卒は、王の親戚を尋ね歩いたが、いづくも無益であつた。兩人は卷添を食つては大變と、殿帥府に王教頭母子の出奔を訴へると、高太尉は之を聞くと、ひとしく、

「懲役人めが逃げ出しをつたと。彼奴どこへ失せうとするのだ。」

と、非常の見幕で、諸州各府に見つけ次第捕縛の命令を下した。從卒兩人は告訴した廉で、幸ひ處分は免れたのであつた。

王教頭親子は東京を離れて、饑ゑては食ひ、渴しては飲み、夜は宿し、曉は旅して、行くこと一月餘り、或日、日ももう夕暮に近づいた時、王進は荷物を擔いで母の馬後についてゐたが、

「あゝ天も憐み下すつて、有難いことには、我々親子も危い虎口を遁れて、もう延安府も程近くなりました。高太尉が如何に捕へようとしても、もう捕へることは出來ません。」

と、聲を揚げて、親子ともに〳〵喜びながら急ぐほどに、つい宿を取り損つて、どこの村里にも出逢はない。さあ斯うなると、今夜はどこへ宿つたら善からうか、それと適當のところがない。ふと前方を見ると、遙か彼方のこんもり茂つた一叢の森の中から、燈の火がちらり〳〵と見える。

「あゝ、これは善かつた。あすこへ往つて、丁寧に賴んで一晩厄介になつて、明日の朝早く出立するとしよう。」

と、王進は路を變へて、森へ入つて尋ね往くと、そこは一構の堂々たる大莊家であつた。周圍には土塀を環らし、その外には二三百株の柳の大木が竝んでゐる。王進は門の戸を敲くことしばらくすると、一人の百姓が出て來た。王進は荷を下して、挨拶すると、

「何の用で來なすつたかい。」

「私ども親子は路を慾張り過ぎたので、つい宿を取り損つて、此へ參つたのです。戻らうにも往かうにも、どうすることもなりません。どうかお宅へ一晩御厄介になつて、明朝早くお暇申したいのですが、何とかしてお泊め下さいませんか。部屋代は無論差上げますが。」

「さう云ふことですかい。お待ちなせえ。私ちよつくら旦那どんに聞いて來ますべいに。旦那どんがうんと云ひなすつたら、泊りなすつて構ひません。」

程經て百姓は出て來て、

「旦那どんが二人さんにお入りなさいとのこつてす。」

と、云ふ。王進は母を馬より下し、擔いだ荷物を取り下し、手綱を引いて百姓の後につきながら、麥打場に荷物を置き、柳の木に馬を繫いで、座敷に上つて、此家の主人に面會した。此家の主人とは年の頃、六十に餘り、鬚も髪も一樣に白く、頭には緣のついた、帽子を戴き、身には飾のない、ゆつたりした衣服を纏ひ、腰には黑絲の組帶を締め、足には韃革の靴を穿いてゐる。王進は恭しく禮拜すると、主人は、慌しく、

「まア〳〵、其やうな堅くるしいことをなさるな。お前さん方は、旅をなすつて、定めしお疲れであらう。まアお掛けなさい。」

親子は挨拶して、座に直ると、主人は、

「どこからおいでなすつて、こんなに遲くおなんなすつた。」

「私は張と申すもので、都に住居するものでございますが、此度資本を失くしましたので、延安府の親戚を便つて參らうとする其途中で、計らず道を貪り過ぎまして、宿を取り損ねました。どうか今晩は、お邸に御厄介になつて、明朝早く立たせて戴きませう。部屋代は規定通りに差出します。」

「其御心配は無用です、部屋の持逃げはありませぬわい。ところでお前さん方はまだ夕飯前でせう。」

と、主人は、百姓男に夕飯の支度を命ずると、間もなく、座敷の上に食卓を据ゑて、四品の野菜と一盆の牛肉が竝べられる。酒の燗が出來て、盃に浪々と注がれる。

「田舍のことで、何もおもてなしをするものがありません。」

「親子のものが突然御厄介になりまして、何とも御禮の申しやうがございません。」

「まアそんな、お禮には及びません。さア〳〵一杯お喫んなさい。」

と、數杯の酒盃を重ねると、飯になる。親子が食べ畢ると、あと片附けして、主人は親子を部屋へと案内した。

「母の騎つて參りました馬にも、どうか飼草をおやり下さいませんか。飼草の代は一緒に差上げますから。」

「よろしい。その御心配は無用です。宅にも騾馬がゐますから、男どもに言ひつけて、一緒にやりませう。」

と、殘るところなき親切に、王進は、禮を述べて荷物を提げて部屋へと入る。百姓男は燈をつけて

來て、湯を汲んで、足を洗はせる。主人は自分の部屋へと戻つてしまふ。王進親子は百姓男に禮を述べて、部屋の戸を閉め、一夜をゆつくり眠に就かうとした。

翌日夜が明けたが、どうしたことか、王進親子は起きて來ない、主人は部屋の戸口へ來て、樣子を伺ふと、中から呻く聲が聞える。

「客人、遲くなりますよ。もうお起きなさいませんか。」

と、主人の呼ぶ聲に、王進は慌てゝ部屋から飛び出て、一禮し、

「もう早くから起きて居ります。昨夜來、いろ〳〵と御迷惑を相かけました。」

「あの唸つてゐなさるのは、どなたです。」

「實は母が旅中の疲勞が一時に出ましたものと見えまして、昨夜胸痛を起しました。」

「それは〳〵。然し御心配なさいますな。幾日でも御逗留なさい。宅には胸痛に好い藥方がありますから、使のものに町へ藥を取りにやつて差上げませう。お母さんに安心させて、ゆつくりと安ませたらいゝでせう。」

これから、王進母子はこの邸内に滯在して、母は服藥すること數日に及んで全く本復した。長らく世話になつたから、もう發足しようと、王進は厩へ馬を見にゆくと、廣場に年の頃十八九歲にもなる一人の壯者が、大肌抜ぎで棒を使つてゐる。全身には一面に龍の刺青、顏の色は銀盤のやうに白い。王進は暫く、之を眺めてゐたが、思はず、

「中々上手に使ふが、まだ〳〵いけない。ほんとの強い奴に出逢つちやかなはない。」

と、つぶやいた、之がふいと耳に入ると、壯者は非常な立腹、

「誰だ、貴樣は、なぜ笑つてゐるんだ。私は七八人の有名な先生に就いて、稽古したのだから、貴樣なんかに負けるものかい。さあ來い、一本勝負しよう。」

と、わめくところへ出て來たのは、老主人、

「こりや、無禮なことを申すな。」

「此奴が人の棒を使つてゐるのを笑つてゐるんです。不埒な奴です。」

主人は王進に打向ひ、

「客人、お前さんも、鎗棒をお使ひになるんでせう。」

「はい、少しばかりはやります。御老人、一體この若いお方は、お宅のどなたです。」

「これは私の倅です。」

「さうでございますか。お宅の若旦那が棒をお稽古なさいますなら、私が手直しを致しませう。」

「結構です。さあ倅、先生にお辭儀しろ。」

さう聞いては、若者の怒はます〳〵烈しい。

「父上、こいつが云ふいゝ加減のことをお聞きなさいますな。私が負けたら先生と仰ぎませう。」

王進が、

「若旦那、無禮をお許し下さらば、一本お相手を致してもようございますが。」
と、云ふを待たず、壯者は廣場の眞中に躍り出て、風車の如く一條の棒をりうくと振廻して、
「さあ來いく、怕がる奴は碌でなしだぞ。」
王進は莞爾と笑つて、まだ相手にせぬ。老主人は、それと見て、
「客人、小倅奴をお敎へ下さるなら、一本お使ひ下さいな。」
「ですが若旦那を突倒しますと、惡うございますからな。」
「なアに、構ひませんとも、手足を折つたつて、そりや自業自得です。」
「さらば無禮をお許し下さい。」
王進は鎗架の上から取り下した一條の棒、押取り掴んで、其儘廣場に歩み寄つて、先づ靑眼に身構へた。
斯くと見たる壯者は、棒を振つて素早く一氣に王進に向つて突進する。王進は早速に棒を引いて退却するを、得たりや應と壯者は棒を振り廻しながら追ひかける。王進くるりと身を轉じ、棒を取つて上段より下段へと眞つ向に振り下す。壯者はがつしと、それを受けとめようとするを、王進はさるもの、打下さずに、さつと引いて、下からつけ入り、壯者の胸元目蒐けて、ひねつて突き出し、相手の棒を刎ね飛ばすと同時に、えいと突いたる手練の一棒、壯者は受け損じて苦もなく頭顱倒。王進は慌てゝ棒投げ出して、壯者を扶け起し、

「御免なさいく。」
と、云ふ。やつと起上つた壯者は、側にあつた腰掛を持ち出して、王進にそれとすゝめて、さて、一禮し、
「僕は今まで多くの先生に稽古して貰ひましたが、先生の半分にも敵ひませんや。どうすることも出來ませんでした。どうかこれからお敎へして戴きたいもんです。」
と、恭しく賴んだ。
「我々親子兩人は、長らくお世話になりまして、御恩の返しやうがないのですから、せめて十分にお稽古を致しませう。」
と、王進が快く承知したのを聞いた主人は大喜び、倅には衣物を着させて、一同、裏座敷に入つて寛いだ。羊を殺させ、酒肴いろくと取揃へて、王進の母親をも請じ、一同席に就くと、老主人は起ち上つて、一杯の酒をすゝめ、さて、
「先生は斯ほどまでの腕前がおありなさるのですから、定めし武藝の師範でおいでなさいませう。倅は眼があつても、泰山が見えなかつたのです。」
と、云ふと、王進は打笑ひ、
「化の皮が現はれてしまひました。私は張と申すものではなく、まことは東京八十萬禁軍の敎頭王進と云ふ、毎日鎗棒を使つてゐたものです。私の父に打たれた、高太尉と申すものが、殿帥府太尉とな

つて、古い恨を私に復さうと、致しますのです。不幸にも私は其部下なのですから、仕様がありません。親子兩人で、延安府まで落ち延び、種經略老公に身を寄せて、働かうと致しますのです。ところが計らずも、お宅に參り、御二方にお目にかゝり、斯くの如き待遇を受けるのみならず、老母の病氣はお蔭で本復致し、永い間お世話になりました。御令息がお稽古なされたくば、私は一生懸命に御教授致しませう。御令息のお習ひになつたのは形式の棒で、見る目には善うございますが、實際の戰陣の役には立ちません。之から私が御教授申しませう。」

此話を聞いた老主人は、

「どうだ倅、お前が敵はない筈ぢやないか。さあもう一度先生にお辭儀しなさい。」

壯者は言はるゝ儘に王進に拜禮した。

「教頭、お聞き下さい。私は先祖代々華陰縣界に居りますが、前方の山は少華山、此村は史家村と申しまして、三四百軒の戸數がございますが、皆史と云ふ名字なんです。私の倅は少年の頃から百姓仕事が嫌ひで鎗や棒ばかり使つてゐて、母親の意見もうはの空で、其ために、彼の母親は心配して沒しました。私は是非なく、彼の好きなことをやらせまして、金を費つて先生を取らせました。又上手の刺青師に頼んで、文身をさせましたが、肩、肘、胸へかけて、九筋の龍を彫りましたので、縣中の人は皆彼を九紋龍史進と呼んで居ります。先生が今日此で、彼をお仕上げ下さるのは、まことに辱けなうございます。私から厚く御禮を申しまするぞ。」

と、老主人の物語に、王進は、

「御主人、御安心なさい、十分御教授致しませう。」

と、語合ひて、之より日日、十八般の武藝を一々初めより教へることゝなつた。此間、主人は華陰縣に往つて、莊屋の役をつとめる。

斯くて月日に關守なく、半年以上も過ぎたが、史進は十八般の矛、鎧、弓、弩、銃、鞭、簡、劒、鏈、槌、斧、鉞、戈、戟、牌、棒、鎗、杈を一々學んで熟達する。王進も心を盡して之を教へて、其奥妙の域に到らしめる。王進は之を見て、もうこれならば善からうと、此で暇乞して延安府への路に上らうとする。史進は引留めて、

「先生、どうか此處にゆつくりおいで下さい。私が先生方御兩人の御一生を安樂にお暮しなさるやうに致しますが、如何でございます。」

と、切に乞ふ所があつた。

「いや、いろ〳〵お世話になつて辱けない。此にゐるのは結構だが、若し高太尉から捕へに來たら、貴郎までも卷添にするやうでは相すまぬ。私は延安府へ往つて、種經略老公の許に身を寄せるのが、一番安全です。」

史進も老主人も言を盡したが王進が聽き入れぬので、是非なく送別の宴を張り、二疋の緞子と百兩の銀貨とを餞別とした。

翌日、王進は荷物を纏め、馬の支度を調へ、親子は史進父子に別を告げて、母を馬に騎せて延安府へと出立した。史進は百姓男に王進の荷物を擔がせて、十里ばかりも見送りしたが、心中には惜別の思深く、涙を灑いで暇乞ひし、後髪引かるゝ心地で百姓男と我家へと歸る。王進は相も變らず、我と我が荷物を背負ひ、馬のあとべに附き添ひて、關西の道を一路遙に望んで去つた。

史進は邸内で、日日心身の鍛練をつとめたのみならず、老人にもあらず、少年にもあらぬ、血氣盛んな壯者のことゝて、夜中に臥床を蹴つて起きて、武藝を演じ、白晝には邸後に弓を射、馬を走らせて、ひたすら、修行してゐた。然るに半年も立たぬうちに、父親の老主人は假そめの病に打臥し、どつと床についたので、史進は遠近の醫師を招き、百方殘る所なく治療に手を盡したが、天壽盡きたるか、遂に他界の人となつた。史進は僧を集めて佛事を修め、又道士を請ひて祭祀を行ひ、吉日良時を選みて、手厚く葬儀を營みたるに、村中のものは爭つて會葬し、村の西方に當る山上の祖先以來の塋域に懇ねんごろに葬つた。

老主人を失つた史進の家では、家業を繼ぐものもない。新主人の史進は固より農事が嫌ひであるから、代理人を探してゐて、自身は相も變らず鎗棒の一點張であつたが、老主人失せてから、早くも三四ヶ月を經過した。

時はもう六月半、焼きつけるばかりの暑さに、史進は日を送るすべもなく、胡床を持ち出して、麥

打場の柳の木蔭に腰うちかけ、僅に涼を納れてゐた。折から前面の松林から吹き來る風に、史進は思はず、

「あゝいゝ風だ、こりや涼しい。」と賞めそやす。

ふと見ると、頻りに此方のやうすを窺ふ怪しの漢子がある。

「こりや怪しからぬ、誰だ、そこからのぞいてゐるのは。」

と、史進は一喝するなり、身を躍らして、柳の背に廻つて見ると、そこに佇む男は別人ならず、獵師の兎取李吉であつた。

「何で他人の邸をのぞいてゐるんだ。こりやてつきり偵察をし居るのだな。」

李吉は、挨拶しながら、

「旦那、私はお邸の、ちびつこの丘乙郎を呼び出して一杯やらうと思つたんですが、旦那が涼んでいらつしやるんで、入られないんです。」

「手前はよく野獸の肉を賣りにやつて來て、己等いつもちやんと買うてやつてゐたんだが、此頃は手前ちつとも持つて來ないぢやないか。錢が無いとでも思つてゐるのかい。」

「どうしまして。旦那、此頃はからつきし野獸がねえんで、それで來ねえんでさア。」

「いゝ加減なことを云ふな。少華山はあんなに廣いや。鹿や兎のゐない筈はないぜ。」

「旦那まだ知らねえと見えますな。此頃山の中には山賊の一團が山寨を作つて、五七百人も手下を集

め、百匹からも馬を持つてゐますぜ、其頭神機軍師朱武、其次のが跳漢虎陳達、第三番目が白花蛇楊春と云つて、此奴等がそこいら中を荒し廻つてゐるんでさア。華陰縣では三千貫の懸賞附きで誰か召取るものはねえかつて、探してゐるんですが、誰だつて山へ上つて引捕へる奴アありやしませんや。私ども山へ入つて、獣を捕へるこたア出來ねえです。どうして賣りに來ることが出來ますもんかね。」

「山賊がゐるとは聞いてゐたが、そんなに大仕掛けとは知らなかつた。こりや人騒がせだ。おい李吉又何かあつたら持つて來なさいよ。」

「善うがす。」と李吉はそこを立去つたので、史進は家へ歸つて座敷の前で思案した。

「山賊どもが大業にやつてゐるとなりや、こりやてつきり史家村をも襲ふだらう。よし來た、此方にも工夫がある。」

思ひ立つた史進は百姓男に二匹の大きな水牛を殺させ、邸で釀した酒を用意させ、一百枚の紙錢を燒いて顯をかけ、史家村三四百戸の人々を邸内へと請じ入れ、年齢順に居並ばせて、酒を振舞つた。

史進は集つた人々に打向ひ、

「此頃少華山に三人の山賊が住んで、五七百人の手下を集め、盛んに惡事を働いてゐるさうだ。今に彼奴等も我々の村を騒がすでせうから、お前さん達を呼んで其相談をしようと思ふのだが、彼奴らが來たならめい〳〵用意して貰ひたいね。私の邸で拍子木を打つたら、みんなで鎗棒持參で集つて來ておくんなさい。お前さん達の家に事があつたら、又さうしよう。各々互に扶け合つて、此村の無事を

計らうではないか。其山賊は私が手を下して成敗致さう。」

と、說き示すと、集つた大勢は、

「私どもは村の百姓で、旦那を御主人と戴いてゐるんですから、拍子木が鳴つたら無論參りやす。」

と、一同は口を揃へて答へた。此夜はみな〳〵酒をよばれて家に歸ると、支度にかゝつた。史進も垣や土塀や、門戸を修繕し、邸内殘る所なく準備して、幾個所に拍子木を設け、武器物の具を揃へて賊の來る備をした。

話變つて、少華山の山寨では、三人の頭領が額を鳩めての相談。第一の首領神機軍師朱武は定遠の人で、二振の刀を使ふを得手としてゐる。十分な技倆はないが、陣法に通じて、謀に長じてゐた。第二の頭領陳達は鄭城の人で、一筋の出白の點鋼鎗を使ふの妙があり、第三の好漢楊春は一振の大長刀を使ふに巧みであつた。

朱武は兩人に打向ひ、

「どうだい、近頃、華陰縣では、三千貫の懸賞で、己達を捕へようとしてゐるさうだ。いづれ其うちにはあいつらと、ちやん〳〵ばら〳〵だが、困つたことには、山寨には錢が少いし、兵粮も乏しいと云ふわけだ。どうだい、どこかで稼いで來て、官軍が來た時の要害をしようぢやないか。」

「合點だ。華陰縣へ往つて兵粮の分捕をやらかさう。」

と、直ちに應じたのは、陳達であつた。

「華陰縣へ往かなくつても、浦城縣でいゝぢやないか。これなら萬全だ。」
と、それに反對したのは、楊春であつた。
陳「蒲城縣は、人家が少くて、金や兵粮も澤山ないが、華陰縣はさうぢやないぜ。」
楊「大哥、そいつはいけない。華陰縣へ往くには史家村を通らなけりやならないが、あすこの九紋龍史進、あいつは虎だ、あいつを騒がしたら、とても無事には通られないぜ。」
陳「兄弟、臆病だぜ。一つの村ぐらゐ通れなくつちや、官軍と勝負は出來ねえや。」
楊「大哥、あいつを輕蔑しちやいけない。あいつは大へんに出來るのだ。」
朱武も傍から口を出して、
「己もさう聞いてゐる。あの男はほんとにえらいと云ふことだ。兄弟、往くことはやめにした方がいいぜ。」
陳達はむきになつて大聲揚げ、
「お前方二人は、くだらないことを云ひなさるな。そんなこと言や、向うをえらがらせて、此方が滅入つてしまふぜ、あいつも人間だ、三頭六臂の怪物ぢやあるまい。己らそんなこたア信用しない。」
と、手下を呼びつけて、
「おい、己らの馬を早く持つて來い。これから史家莊を攻め取つて、華陰縣で分捕するのだ。」
朱武、楊春の諫めを聽かばこそ、甲冑つけて馬に跨り、百四十五人の手下を引連れ、銅鑼太鼓勇ま

しく山を下つて、史家村に向つて繰出した。
史進は邸内で、軍備を調へてゐる所へ、村民から此報知を得た。直に拍子木が叩かれると、莊前莊後、莊東莊西の三四百軒の史家の人々は一齊に鎗を把り棒を握つて、史家邸に集つた。史進其日の扮裝は頭に一字巾を戴き、身には唐紅の甲、上には青錦の陣羽織をつけ、足には綠色の靴を穿き、腰には皮の帶を結び、鐵の胸當を當てゝ、一張の弓、一壺の箭、手には一口の劍を把つた武者振りは凜凜しく見えた。ひらりと跨つたは、栗毛の逸物、手綱かいくり、前には三四十人の逞ましい農村の健兒を先立せ、後には八九十人の薄のろな村民を從へ、其他に村々の人々を引連れて、どつとばかりに村北の入口に到着した。
少華山の陳達は人馬を引率して、飛ぶが如くに山下に殺到して、持場々々に手下の山賊を配置した。史進看る時、陳達の扮裝は、頭に緋紅色の凹面巾を戴き、身に黃金で裝つた鐵の甲を着け、上には猩猩緋の陣羽織を着け、瓜先上りの靴を穿き、腰には七尺の組紬帶を結び、太く逞ましき白馬に跨り、手には一丈八尺の點鋼矛を横たへてゐた。手下の山賊は、わつとばかりに聲を揚げる。
二人の大將は馬上で相逢つたが、陳達は史進を見るより、身を反らして禮を施した。史進は、
「汝達は人殺しをする。火つけをする、人家を襲ひ、劫掠する、天にはびこる大罪を犯して、死罪に當る惡黨どもだ。耳があつたら聞いてゐるだらうが、大膽にも自ら飛んで火に入る夏の蟲。よくも我村へは來よつたな。」

と、聲荒らげて罵れば、陳達は、

「私の山寨では兵粮が缺乏致したので、之から華陰縣に參つて糧を借らうと存じ、此方の村を通るのです。どうか行く手をお開け下さらば、決して一株の草も動かすことは致しませぬ。何卒通させていたゞきたい。いづれ戻りましたら御禮を申しませう。」

と、云ふ。

「いゝ加減のことを申すな。我家は現に莊家の職をつとめてゐるもの、汝等山賊を捕へようとするのであるのに、今日は汝等が此村を通過しようとする。引捕へずに、通過させたら、此方まで卷添を食ふわい。」

「四海の内は兄弟なりと云ひますぜ。どうか路をお貸し下さい。」

「下らぬことを吐かし居るな。己が承知をしたつて承知をしないものがあるわい。汝、それに聞いて見い、それが承知すりや、さつさと往つたがよい。」

「大將、そりや誰殿にお尋ねするのですかい。」

「手の内にある刀に聞いてくれ、此奴が承知すりや汝を通させよう。」

陳達は眞紅になつて怒り、

「云はして置けばつけ上りやがる、いゝ加減にしろ。」

史進も怒つて手にある刀を振舞はし、馬を乘廻して兩人互に合ひつ離れつする。陳達は馬を拍ち、

鎗を繰出し、暫しの間結び合つたが、史進に隙やありけん、陳達の鎗は胸元目蒐けて突つかけたが、之は固より史進の術策であつた。史進は腰を捻つて、身をかはすと、陳達は鎗もろともよろめき來るを、猿臂を延ばし、腰をねぢつて、一抱へに、さも輕々と陳達を鞍から引離して、ゆるゝ腰の組帶をしつかと捉へ、地上をめがけて、はつとばかり投げつける。主なき馬は疾風の如くに駈けて行く。

史進は村人に陳達を縛めさせる。山賊の手下どもは追ひ卷くられて、しどろもどろに逃げ去つた。史進は邸に凱旋して、陳達を柱に縛りつけ、他の二頭領をも捕縛した上にて、官に引渡し、賞を受けようとするのであつた。先づ褒美の酒を村人にすゝめたが、一同は史太郎の手並を賞めそやして、やんやとばかり、喜びの祝盃を擧げた。

二、史家莊の夜襲

話變つて、朱武、楊春の兩人は山塞の中にゐて、陳達の吉左右如何にと心配しながら待つてゐたが、どうなつたか、更に推量がつかぬ。手下の子泥坊を使ひにやつて樣子を探らせてゐるところへ、空馬率ゐて慌しく驅け戻つた手下のものども、

「駄目です〳〵、陳親分は兩親分の言ふことを聽かねえで、たうとう命を棄てちやつた。」

と、云ふ、火急の注進。そりやどうしてと、朱武の尋ねに、小泥坊は、一部始終に合戰の模樣を報告し、

「とても史進のやうなえら物相手ぢや敵やしませんや。」
と、云ふ。
「云ふことをか聽かないから、こんなことになつてしまつた。」
と、朱武は嘆息すると、楊春は、
「俺たちがみんな出かけて、彼奴と命がけの勝負をしちやどうだらう。」
と、意氣込む。
朱「そりやいけない。陳達でさへ負けたのだから、お前が往つたつて、どうすることも出來やしない。ところで、俺に一つの反間苦肉の計と云ふ奴がある。これでいけなけりや、お前も俺もおしまひだ。」
楊「そりやどう云ふ計略だ。」
朱武は楊春の耳許に囁くことしばし、
「まア斯うするより外にはあるまいて。」
楊「そいつは妙だ。兄哥一緒に往かう。遲くなつちや一大事だ。」
此方では、史進は邸内にゐたが、憤然たる怒氣はまだ已まない。忽ち一人の下男が慌てゝ山塞の朱武、楊春の來たのを報じて來た。
「ふう、彼奴らは命を棄てに參つたな。よし來た、其奴兩人を一度に役所へ引渡してくれよう。馬も

て來い。」
と、直に拍子木は鳴り渡つて、村中の人は一齊に殺到する。史進は馬にひらりと跨り、あはや門を躍り出でんとする時、こは如何に、山塞の頭領朱武、楊春の兩人歩行にて門前に跪いて、はらはらと涙を流してゐる。史進は見るより馬を下り、
「お前達アどうしてそこに跪いてゐるのか。」
と、一喝すると、朱武はわつとばかりに哭きの聲を揚げ、
「私ども三人は役人どもに追ひまくられ、餘儀なく山に登つて此稼業を致してゐるのでございます。最初に私どもは誓を立てまして、同日に死なうと約束致しました。無論關羽、張飛、劉備の義心には及びませんが、其心は同じでございます。今日は弟の陳達めが私どもの言ふことを聽かずに、あなた樣の虎威を犯しまして、強い貴方樣の捕虜となつて、お邸にゐるさうでございます。もうお願ひ申す儀もございませんから、一緒に死なうと推參致しました。どうぞ三人を一つに、縛つて役所にお引渡しになつて、賞金をお受け下さいませ。決して彼是申しは致しません、御存分に御處分下さいませ、さらさらお怨みは申しません。」
と、云ふ。聽き畢つた史進は腹の中で、
「此奴等このやうな義氣があるのに、某が引捕へて役所に引渡し、褒賞を乞ふとならば、天下の男を賣る人達にきつと笑はれるであらう。昔から虎は死肉を食まずと云ふ諺がある。」

と、思案して、
「おい、お前達兩人とも、俺のあとにづいて來い。」
と、奥へ進むと、兩人は恐れ氣もなく、奥座敷の前まで來て、又もやそこに跪いて、縛つてくれと云ふ。史進は二度三度起てと命じたが、兩人は起上りさうにもしない。史進はすつかり其意氣に感じて、
「お前達の男氣は如何にも立派だ。そいつを、俺が役所へ突出しや、男がすたらア。どうだ陳達を返してくれようか。」
朱「そいつアいけません、貴方樣を卷添にします。それよりか役所へお引渡しなすつて、褒美におありつき下さい。」
史「そんなことが出來るかい。どうだお前達と一杯やるかな。」
朱「殺されたつて御辭退しませんのに、御酒なら猶結構です。」
史進は勇み立つて、陳達の縛を解き、奥座敷で三人と對座しての酒盛。三人は大恩を感謝し、數杯の酒盃を重ねるうちに、少しは心も春めいて來たが、やがて三人は史進に厚く禮を述べて、山寨へと立ち歸り、史進は門まで送つて邸内へと戻つた。
山寨に戻り着いた三人、
朱「どうだ俺らの苦計でなくつちや命はとうになくなつた筈だ。いや一人を助けたさへ有難いこと

だ。史進の男氣で助けて貰つた上は、其内に何か贈物をして禮をしよう。」
十數日を經て後、三人は出來立てのほやゝくの三十兩の金子を用意し、二人の手下に月黑き夜を幸ひに、史家莊へと持たせてやつた。初更の時分、手下の小泥坊が莊門を叩くので、下男は此旨を史進に報せる。史進は急に衣を着換へて、門前に出て來て、
「何の用事があるのか。」
と、尋ねる。
「へい、三頭領がまことに輕少ですが、これを持つて往つて、善く此間の御禮を申して參れとのことで、參りやした。どうか取つて置いて下さいまし、お返しなすつちや困ります。」
と、金子を差出した。史進も初めは辭退したが、折角の贈物、突き戻しては好意を無にすると、受取つて、手下に酒を振舞ひ、些許りの褒美を取らせて歸させた。半月餘り過ぎると、朱武等三人は山寨の中で相談し、一連の珠を分捕して、之を史進に贈つた。斯くて半月經つ頃、史進心に思ふやう、
「いや、あいつら三人はひどく俺を尊敬してゐる。こつちも些ばかり返禮致さう。」
と、翌日下男に裁縫師を探させ、自分で町へ出かけて、三疋の紅錦を購ひて、三枚の小袖を裁てさせ、三匹の丸々と太つた羊を調理し、大皿に盛つて、二人の下男に山寨へと持たせてやる事とした。
史家莊の下男頭に王四と云ふものがあつたが、平生役所への應對などには馴れ切つた、辯舌勝れたものであつた。邸の中では饒伯當（伯當とは唐初のお喋舌家）と呼びなしてゐた。史進は此ものと力

持ちの下男とに大皿を擔はせて山寨へ立たせてやる。山寨の手下は案内して三人の頭領に引合はせる。朱武等三人は大喜びで子袖と羊肉とを受け取り、十兩の金子を下男に與へ、酒を飲ませて歸させる。二人の下男は下山して邸に戻り、史進に三人から厚く禮を云つたことを傳言する。史進は之から時々山寨の三人と交際して、王四は度々山寨へ使する。山寨よりも折々使に金銀を持たせて、史進へと送り越した。

月日ははやくも過ぎて、はや八月仲秋も近づいた。史進は十五夜に邸上で明月の宴を張らうと、王四に一封の書を携へさせ、少華山上に赴いて、三人を招待にやつた。王四は急いで三人に會つて手紙を手渡しする。朱武は開封して、いたく喜んで、三人承知の返書を認め、王四に五兩の銀を與へて、酒を振舞つた。王四は山を下ると、途中で山寨から時々贈物の使に來る手下とはたと出逢つた。これは善いところで逢つた、まア〳〵そこいらで一杯〳〵と、山端の煮賣屋で十數盃を重ね合つて、東と西とに別れ、王四は史家莊を指してひた走り。さつと吹き來る山風に煽られて酒氣愈々發し、足許はよろ〳〵定まらず、一歩は高く一歩は低く、蹌々踉々として、森の中へよろめきながら、綠なす草原の上へはッたと倒れた。

兎打ちの李吉は丁度崖下で兎を見張つてゐたが、史家莊の王四が轉げこんだのを見るより、森の中へ驅け入つて、起さうとしたが、醉つぱらひは、ぐでん〳〵で生體もない。ふと見ると王四の腹卷から金が覗いてゐる。

「はゝあ、此奴ひどく醉ひくさつてゐる。どうしてこんなに金を持つてゐるのかな。ちよつぴり頂戴致すとしよう。」

と、李吉は獨語を云ひながら、腹卷を解いて、地の上へ振ふと、轉げ出たものは、返事の手紙と銀子とであつた。李吉は幾分か文子を知つてゐたから、手紙を開けて見ると、表には少華山朱武。陳達、楊春とあつて、中には小むづかしい字が竝べてあるが、これは李吉には讀めない。

李「己ア獵人となつてゐるが、いつまで經つたつて、出世は出來アしねえや。卜者の奴め、今年は當り年だと云ひくさつたが、成程こいつア當り年だ。華陰縣では、三千貫の褒美を出して、三人の大泥坊を捕まへさせようとしてゐる。史進の野郎、此間、己が駝背の丘乙郎を探しに往つた時、手前、樣子を見に來たのだなと、吐かし居つたが、へん、手前こそ大泥坊と交際てゐやアがる。太い野郎だ。」

と、銀子も手紙も懷に入れて、華陰縣へと告訴に及んだ。

一眠りぐつすり寢込んだ王四は夜中にふいと我に返つて目を覺した。月の光が淡く身の上を照らしてゐる。吃驚仰天して、跳り上つて、四方を見廻はすと、そこは一面の松林。腰のあたりを探つて見ると、腹卷も手紙もない。これはしたりと、其邊を尋ね探すと、空の腹卷が草原の上に落ちてゐる。

「あゝこりやしまつた。金はさほど惜くもないが、困つたのは返事の手紙を失くしたこつちや。誰に取られたのか知らん。」

と、しばし顏をしかめてゐたが、

「邸へ歸つて、手紙を失くしたと云つたら最後、旦那は怒つて追出すに極つてゐる。初めつから無いと云や、探しやうがあるまい。」

と、思案を定めて、飛ぶが如く邸へ戻り着くと、夜はもうほの〳〵と明けそめた。史進はその遲いのを怪んで、

「どうして今頃歸つて來たのか。」

と、尋ねると、王四は、

「旦那樣のお蔭で、三人の頭領達が中々返してくれません。遲くまでお酒の御馳走になりましたので、へい〳〵、つい斯やうに遲うなりました。」

史「返事の手紙があるか。」

王「頭領達が御返事を書かうと云はれますから、私が何、おいでになるならそれには及びますまい。私も大分お酒を頂戴致しましたから、途中で不調法致すといけませんからとお斷り申しました。」

史「はゝゝゝ、みんなが贋伯當と云ふ筈ぢやわい、よくやつた。」

王「私は決して路草も食やしません。遲れも致しません、一息に戻つて參りました。」

史「そんなら早く町へ使をやつて、酒の肴を買はせてくれ。」

仲秋明月の日は到來して、一天晴朗であつた。史進は下男どもに云ひつけて、大羊を調理し、多くの鷄、鶩鳥を調理して、酒宴の用意、萬端殘る所なく整つた。程なく日が暮れると、少華山の三頭

領は手下に山寨の留守居をさせて、三四人の手下を伴に、手には朴刀（杖のやうな拔身）腰には刀をたばさみ、馬にも乘らず、步行にて山を下り、直に史家莊を音づれた。史進は案內して裏庭に入ると、邸內には既に宴會の席が出來てゐる。史進は三頭領を座に請じて、對座し、前後の門を鎖して、酒宴を開いた。邸內の下男は盃を進める、料理は持出される。數杯を重ねるうちに、早くも東の方には一輪の明月が晃々と上つた。

斯くて明月を賞しながら、さま〴〵の物語してゐるうちに、こは如何に、門外に鬨の聲が揚つて、火把の炎がそこゝにぱッと閃めいて見える。史進は大いに驚いて、跳り上り、

「三人の方々、しばらく此儘に。俺が樣子を見て來よう。」

と、下男に門を開くなと命じ、一條の梯子を墻にかけて外の方を打見れば、華陰縣の縣尉は馬上にあり、兩人の隊長と、三四百人の民兵を引連れて、稻麻竹葦と此邸を圍むのであつた。火把の光の中には十字槍、朴刀、刺叉、袖がらみが竝列して麻の林の如く映えてゐる。兩人の隊長は口々に、

「大泥坊を逃がすな。」

と、呼ばはつてゐる。

三、花和尙

史進は思案投首、

「さあどうしたら善からう。」
「大哥、貴方は潔白のお身體、卷添を食つちやいけません。さあ繩で俺達三人を縛つて突き出して、褒美におありつきなさい。」
と、朱武等三人は跪きながらに云ふ。
「どうしてそんなことが出來やう。さうすりや、俺が君達を欺し討ちにしたのと同樣だ。君達を捕へて褒美にありつきやア天下の笑物さ。死ぬ時は一緒に死なうや、助かるときは一所に助からうぜ。安心しておくんなさい。何かいゝ穩便な方法を構じよう。まア〳〵お待ちなさい、譯をとつくり聞いて見よう。」
と、史進は梯子の上から、
「御兩所は、何故あつて、理不盡にも夜中に某の邸を騷がせなさるのか。」
隊「旦那、胡麻化しちやいけませんぜ、此に告訴人の李吉がゐます。」
史進は李吉をはつたと睨めつけ、
「こりや李吉、なぜ罪のないものを誣告致したか。」
と、叱りつけると、李吉は、
「そりや俺が知つたことぢやありましねえ。森の中で王四の手紙を拾つたので、それから足がついたのです。」

聞く史進は王四を呼び寄せて、
「貴樣は返事の手紙がないと云つたのに　どうして其手紙を持つてゐたのか。」
王「へい〳〵、俺めがつい醉つた紛れに、手紙のこたア忘れました。」
史「えい、此畜生め、どうしてくれよう。」
隊長初め、史進の手練はかねて知つてゐるから、さうはしなくは亂人しない。三人の頭領は手で、外へ返事をするやうにと指圖する。史進は心得たりと、梯子の上から、
「御兩所、お騷ぎめさるな。暫くあとへお引き下さい。某、三人の首領をからめ取つて、お渡し申し、褒美を頂戴致さう。」
と、呼びかけると、兩人の隊長は固より史進を恐れるもの、
「我々どもゝ事を荒立つことを好み申さぬ。捕縛してお渡し下さるのを待つて、御一所に褒美にありつきませう。」
と、返事をした。史進は梯子を下り、座敷の前に來ると、王四を裏庭に引摺り出して、一刀に切つて棄て、下男に命じて邸内のありとあらゆるものを集めて、引き括らせ、壁に三四十把の松明を點火し、史進と三人の頭領とは一樣に鎧を取つて、肩に投げ懸け、鎗棚の上より取下したる腰刀を佩き、手に〳〵朴刀を携へ、裾引きからげて凜々しく武者振ひする。莊後の草屋葺に火をかけて、下男一同は荷物を引き擔ぐ。表の方では邸裏に火の手の揚るを見て、皆一同に裏の方へと廻はつて、あれよあ

れよと見物する。史進は又もや中座敷に火を放けると、其儘大門さつと一文子に推し開き、わッとばかり一齊に鬨の聲を揚げて、勢猛く突進した。先頭は史進、朱武、楊春を中堅に、殿は陳達之をつとめ、手下の盜賊、史家莊の下男は、いづれも此を先途と、東に當り、西を擊つ。史進は固より一個の猛虎、誰人が彼に當るものがあらうか。背面には火炎焰々と燃え上り、一條の血路は、左右に草の靡くが如く、をめき叫んで突貫する一隊は、恰も兩隊長、李吉の一列にはたと出逢つた。史進は斯くと見るより大いに怒り、己れ述がしてなるものか。兩隊長は形勢惡しゝと見るより、身をかはして逃げ出す。李吉もつゞいて逃げんとするを、史進跳りかゝつて、手にする朴刀きらりと電の如く、李吉を斬つて兩段とする。陳達、楊春は走り懸つて、兩人の隊長を斬つて棄てる。縣尉は敗亡して、ひたすら馬を急がせて、雲を霞と逃げ歸る。民兵どもはいかで敵することが出來やうぞ、命からゞく逃げ出すを、史進は一行の人々と打取り〳〵走りゆくほどに、官兵は追ひかけもせず、みなちりぢりに逃げ戻つた。

史進等は少華山の山寨に到着し、休息する。朱武等は手下のものどもを急がせて、牛を屠り馬を殺して祝宴を開き、史進は此に數日滯在することゝなつた。一日、史進は思案するやう、三人を助けんために史家莊は丸燒け、手輕な家財は持ち運んだものゝ、手重のものは皆亡くした。此にいつまでゐても初まらないと、朱武等に打向ひて、

「俺の先生王教頭が關西の經略府に勤めてござれば、俺はそこへ尋ね往かうと思ふ。此前にも先生を

尋ねる心組であつたのに老父が沒したので、それも出來なかつたが、邸宅は燒け失せた今日だから、直に尋ねて往かう。」

と、云へば、朱武等三人は、

「大哥、旅に出るのはやめて、此山寨に暫くおいでなさい、又御相談もあります。大哥が此稼業がお厭なら、世間の靜まるのを待つて、俺どもが邸をこしらへて進ぜませう。」

と、言を盡して引き止める。

史「其厚意は辱けないが、留まるわけには參らぬ。俺が先生を尋ねようとするのも、そこで出世の傳手を求めて樂をしようとするのだ。」

朱「大哥、こゝにゐて山寨の主となるのも、愉快ですぜ。唯如何にも小さくて、大哥の馬を休ませるには不足ですがね。」

史「俺は清淨潔白の男だ。父母から受けたこの身體を、汚すことは出來ない。盜賊の仲間なんざア御免だ。」

史進はいよ〳〵發足しようとする。朱武等が如何に引止めても斷じて聽かぬ。引連れて來た下男共は山寨に留め置き、些ばかりの路用を懷にして、一個の荷物を用意し、其他多分の物は山寨に殘して、頭には白い范陽の氈帽を戴き、上には一つまみの紅の房をかけ、帽子の下には、紺青の角頭巾を被り、首には黃色の襟卷を卷きつけ、身には白麻の重ね陣羽織を着し、腰には一筋の梅紅色の組紐

帶を結び、青白の縞脚絆を穿き、足には山河を跋渉する麻鞋をしつかと結び着け、一振の鐃鉢磬口の薄葉刀を佩き、背には包、手には朴刀を提げて、朱武等三人に別れを告げる。手下の小泥坊は一同山の麓まで見送る。朱武等は涙を濺いで離別の情は綿々として盡くる由もなかつた。

九紋龍史進は少華山を離れ、關西の大道をひたすら延安府へと急いだ。饑ゑては食ひ、渴しては飲み、夜は泊り、曉には行き、行くこと半月餘りで渭州に到着した。此にも經略府があれば、若しや師匠の王教頭は居らぬかと、城中に入りて、そこ〳〵と見廻はすと、六街三市、町々が縱横に並んである。路のほとりに小さい茶店のあるのに、つと入つて、腰をかけると、主人は、

「いらつしやい、どのやうなお茶を上げませう。」

史「泡茶が善い。」

茶店の主人は泡茶を史進の前に持つて來る。

史「こゝの經略府はどこかね。」

主「あの向うにあるのが、さうでございます。」

史「あの役所に都から來た師範の王進と云ふ人はゐないかね。」

主「さあこゝには師範が澤山おいでで、王と云ふ名字の方も三四人いらつしやいますから、どれが王進と云ふ方か分りませんな。」

まだ云ひ畢らぬうちに、一人の大男が大跨にのそり〳〵と茶店に入つて來た。史進はふと目を擧げて見ると、一個の軍人らしい。頭は胡麻色の羅で作つた疊頭巾にて包み、金環つけた太原府製の紐にて、後できりゝと引締め、綠鸚哥色の麻の陣羽織を着け、腰には二股の黑色帶を結び、足には鷹の爪のやうな恰好した皮で、四ヶ處を縫つた卵黃色の靴を穿つてゐる。まん丸な顏で、大きな耳の、鼻筋が通つた、口の四角な、腮には一面に蒙々たる鬚を生やした、身の長八尺、腰は十圍ほどの大男である。

茶店の裡に入ると、どつかと腰をかける。主人は斯くと見て、史進に打向ひ、

「旦那、王教頭をお尋ねになりたけりや、あの軍人さんにお尋ねなさい、知つて居りませう。」

と、云ふに、史進は忙しく起ち上り、恭しく彼大男に一禮し、

「さあおかけ下さい、御挨拶申しませう。」

と、云ふと、大男は、史進の魁梧偉大な風采を見て、こりやてつきり立派な男だらうと、そばへ來て一禮して、兩人は腰を下した。

史「甚だ失禮ですが、貴殿の御姓名は。」

と、尋ねると、大男は、

「私はこゝの經略府の將校で、魯達と云ふもんだが、大將の名字は何と云はつしやる。」

と、云ふ。

史「某は華州華陰縣の住民で、史進と申します。貴殿にお尋ねしたいのは、某の師匠に東京八十萬禁軍の教頭王進と云ふ人がござるが、もしや此經略府には居りますまいかな。」

「大將、君は史家村の九紋龍史太郎とやら云ふ人ぢやごわせんか。」

「如何にも某でございます。」

聞く魯達は連りに禮し、

「評判で聞くより逢つた方が善い。逢ふのは評判よりかよつぽど善い。君は王教頭を尋ねなさるが、そりや東京で高太尉に憎まれた王進のことぢやごわせんか。」

史「其人でございます。」

「私も其名は聞いてゐるが、あの大將は此處にやゐませんぜ。私の聞いてゐるところぢや大將は延安府老种經略閣下のところで奉職してゐるさうな。此渭州は小种經略閣下のおいでなされるところなので、あの大將は此にゐないんでさア。君が史太郎なら、私は其噂はかねゞ聞いて知つてゐる。さあ一所に町へ往つて、一杯飲らうぢやないか。」

と、魯達は史進の手を引張つて、茶店を出かけながら、振向いて、

「おい、茶代はあとで俺が拂つてやるぜ。」

茶「へい〳〵お構ひなくお發ち下さいまし。」

兩人は肩に手をかけ合ひながら、茶店を出て、四十歩も行くと、空地に一團の群集が何やら取卷いてゐる。

史「兄哥、一寸見て來ますぜ。」

と、人を押分けて一見すると、中央に一人の男あり、十數本の棒を携へ、地上に十數個の膏藥を擴げて、一皿に盛り入れてゐる。上には紙幟がひら〳〵してゐる。是はそれ世間を鎗棒使つて藥を賣るものである。見ると、おや、これは史進に手ほどきした打虎將李忠であつた。史進は群集の中から、

「先生、お久振りですな。」

と、聲をかける。それと見た李忠は、

「おや、どうして此里へおいでなすつた。」

魯「史太郎の師匠なら、さア一所に俺と一杯飲みに行かうぜ。」

李「一寸お待ち下さい、膏藥を賣つて、其代金を取つたら御一所に參りませう。」

魯「待てなんて、そんな悠長なこたア眞ッ平だ。行くなら一所に出かけよう。」

李「これで生計を立てゝゐるんですから、仕樣がございません。まアお先へおいで下さい。あとからお尋ねします。史太郎さん、此將校さんと一足先へお出かけ下さい。」

ぢれ切つた魯達は、見物人を推しのけ〳〵、

「貴樣達ア分らずやだ、はやく退かないと、ぶん擲るぞ。」

暴れもの、魯達と見るなり、見物人はわッとばかりに逃げ出す。李忠は餘りの亂暴さに腹立しく、

物をも云はず、是非なく苦笑して、

「ひどい性急な人だ。」

と、云ひながら、すぐさま商賣道具を片づけ、鎗棒をあづけて、三人は縱横に幾多の町々を過ぎて橋の袂の潘家と呼べる名うての酒樓に到着した。門前には看板の竿を樹てゝ、酒旗がひら〳〵と空中に飜つてゐる。如何にもよささうな茶屋だ。三人は瀟洒な座敷に打通りて、此に腰を据ゑる。魯達は上座に、李忠は之に對し、史進は下手に坐る。魯將校入來と見て、

「おいでなさいまし、お酒はどれほど持つて參りませう。」

と、茶屋男が尋ねる。

魯「二升ほど持つて來い。肴も一所だ。」

茶「御飯のお支度は。」

魯「そんなこたア聞くに及ばない、何でも持つて來い、勘定は一所にしてやる。胡蠅い奴だ。」

やがて、茶屋男は、酒を燗して持つて來る。料理を卓上に並べる。三人は盃の數を重ね、鎗法の話や、くさ〳〵の物語りで、次第に耳も熱して來る。

どうしたことか、壁一つの隣座敷で、おい〳〵泣いてゐる聲がする。癪に觸つた魯達は卓子の上にある皿や、盃を床へ投げ出す。驚いたのは茶屋男、慌てゝ上つて來ると、魯將校がぷん〳〵怒つてゐる。手をもみながら、

「旦那、御註文の品は何でも持つて參りますが。」

と、恐る〳〵云ふ。

魯「何にもいらない。貴樣は此俺を知つてるだらうに、どうして隣であんなに泣かして興を覺まさせるのだ。俺はいつだつて拂は綺麗にしてゐるぜ。」

茶「旦那、まア機嫌を直して下さい。どうして隣で泣かさせて御愉快をお妨げするやうなことを致しませう。あの泣いてゐるのは、お座敷を取持つ唄うたひの親子でございます。旦那方がこゝにいらつしやるのを存じませんで、自分達が苦しいので泣いてゐるのでございませう。」

魯「そりや怪しからん、こゝへ呼んで來い。」

茶屋男は云ふが儘に、親子を呼ぶと、直に兩人は座敷へ入つて來た。十八九の女と、其背には五六十歳の老人、手には拍板（調子を取るに鳴らす板）を持つてゐる。女は非常な器量好しではないが、滿更でもない。眼に持つ涙を押拭つて、進み來て、三人に挨拶する。老人も一禮に及ぶ。

魯「お前達二人はどこのもので、どうして泣いてゐるのか。」

女「旦那樣、どうかお聽き下さいませ。私は都のもので、兩親と此地に參つて親戚のものゝとこに身を寄せようと致しましたのに、其親戚は南京に引越して居りません。母は客舍で病氣になつて沒しましたので、父と兩人で落魄れて、此で生計を致して居ります。ところが私に金主がございます。鎭關西鄭大官人と申しますが、私を無理やりに自由にして妾にしようと、いゝ加減に三千貫の身賣

りの僞證文を作つて私を身動きも出來ないやうにしてしまひましたのです。すると三月にもならぬうちに奥さんが恐ろしい見幕で、私を追出しましたので、私は親方の家に居りますが、三千貫を返せ返せと、きつい請求なんです。父は弱いもんですから、爭ふことも出來ません。あの方はお金もありますし、勢力もございますから、どうすることも出來ません。初めつから一文も貰はないのに、どうして返すことが出來ませう。仕様がございませんから、父が幼いうちから、小歌を敎へてくれましたのを、せめての生計とこゝのお茶屋に參つて、お座敷で、それを歌ひましては、少しばかり持つて歸りますが、其中の大半はあの方に取られてしまひます。殘りの僅ばかりで親子が暮して居ります。ところが此二日はお客さんが少いので、還すお金もございません。催促に來られる時は、辱めを受けるのが心配です、其時の苦みを考へますと、訴へるところがございませんから、つい泣いて、お耳觸のことを致しました。どうか御免下さいまし、よろしく願ひます。」

魯「お前達は何と云ふ名字か。どこに泊つてゐる。又其鎭關西鄭大官人はどこに住んでゐるのだ。」

父「私の名字は金と申します。娘の名は翠蓮と呼びます。鄭大官人は狀元橋のほとりで肉を賣る鄭屠、綽號を鎭關西と申します。私兩人は此向うの東門內の魯家旅館に滯在致して居ります。」

聽き畢つた魯達は、

「へん、鄭大官人とは誰かと思や、あの豚殺しの鄭屠か。こん畜生、小种經略相公閣下のお膝元へ來て、肉屋を開きくさつてゐるのに、そんなに人を騙し居るのか。」

と、云ふより李忠、史進を振向いて、

「君達二人は此處にゐて待つてゐておくんなさい。私は往つて彼奴を打殺して來るから。」

と、非常の見幕。李忠はしつかと抱き止めて、

「大哥、まアさう怒らずに、明日ゆつくり話の分るやうにしたらどうだ。」

と、三四度言を盡して、推し止めた。

魯「老爺來なさい、私が路用をやるから、明日東京へ歸つたらどうだ。」

父子「幸ひ故郷へ歸ることが出來ましたなら、再生の大恩人、有難うございますが店の親方が歸しません。鄭大官人は親方に金の返濟を請求致しませう。」

魯「そんなこたア構はない、ちやんと工夫があらア。」

と、云ひながら懷かい探つて、五兩程の銀子を取り出し、食卓の上へ投げ出し、史進を見て、

「私は今日は澤山持つて來なかつたから、君が持つてゐるのなら、少しばかり貸しておくんなさい。明日返濟しますから。」

と、云ふ。

史「返濟には及びませんや。」

と、包の中から十兩取り出して卓上に置く。魯達は又李忠を見て、

「おい君も些と貸してくれ。」

李忠は二兩ばかりの銀子を取り出すと、魯達はこんな少しばかりと、
「氣前の悪い男だな。」
と、云ひながら、十五兩を金老爺さんにやり、
「これを路用として、支度をしな。明朝早く私が往つて出立させてやる。店の亭主が引止めるのを見物してくれるわ。」
親子は厚く禮を述べて歸る。魯達は二兩を李忠に戻し、三人又一升の酒を飲んで表へと出る。
「おい亭主、勘定は私が明日するぜ。」
亭「どう致しまして、いつでもよろしうございます。どうか相變らず御贔屓に。」
と、云ふお世辭を後に、三人は此處を立出で、町中にて別を告げ、史進と李忠とはめい〳〵己が宿屋を指して行く。魯達は經略府前の下宿へと立戻り、夕飯も食べず、ぷん〳〵怒りながら寢てしまつたが、此家のものも、どうしたとも尋ねなかつた。

金老爺は思ひがけなく十五兩の銀子を得て、宿に歸り、娘を休ませて、自分は城外の遠方に往つて一臺の車を求めて戻つて來ると、行李の支度をする、部屋代を拂ふ、米代を勘定する。ひたすらに夜の明けるのを待つてゐた。其夜は事なくすんで、夜の明けぬうちから臥床を離れ、親子兩人は火を起し、朝飯をこしらへて食べ畢る。東天微に一抹の紅が棚曳く頃には、魯達が大跨で、店にづか〳〵

と入つて來た。
「これ若いの、金爺さんのゐるところはどこだ。」
と、大聲を揚げる。
若「おい金さん、將校さんが尋ねにおいでになつたぜ。」
金老爺は部屋の戸を開けて、
「これは〳〵旦那樣、どうぞお入り下さい。」
魯「何だ、入るこたアない。早く出立せい、何をぐづ〳〵してゐるんだ。」
さう云はれると金老爺は娘を引連れ、荷物を擔ぎ、魯達に禮を述べて門口を出ようとする。どつこい、やらぬと若者はそれを押止める。
「金さん、どこへ往くんだい。」
魯「おい、部屋代がまだ濟んでないのか。」
若「否、昨夕みんな貰ひましたが、鄭大官人への身代金がまだ其まんまです。責任は此方にありますから、見張つてゐるのです。」
魯「鄭屠への金なら、俺が返してやるから、老爺さん達は歸してやれ。」
と、云つたが、若者は一かな放さうとはせぬ。見る〳〵うちに魯達は滿面の怒氣、掌開けて、若者の頰べたをぴしやり。あつとばかりに若者は口中からくわッと血を吐く。つゞいて拳固を一つぐわ

んと食はせると、前齒が二本ぴしりと折れる。若者は這々の體で、一散に店の中へ飛んで逃げ込む。亭主も此體たらくを見ると、手の出しやうもない。金の親子は此間に慌しく城内を脱れ出て昨日求めた車を尋ねて旅立する。

あの若者、跡から追ひかけるであらうと、魯達は腰かけを探し出して店先へどつかと腰をかけて、悠然たること、凡そ二時ばかり。もう親子が遠く去つたと見ると、やをら身を起して、狀元橋へと一つ飛。

鄭屠の店では門口を開けて二つの肉切臺を据ゑ、數塊の豚肉を吊るす。鄭屠は帳場の内に坐つて、十人ばかりの肉切人が肉を切賣するのを眺めてゐた。そこへ店先へ飛込んで來たのは、魯達、

「おい鄭屠。」

と、大聲で呼ぶ。誰かと鄭屠がそなたを見ると、之は魯將校。慌てゝ帳場から躍り出て、

「お早うございます。お出迎へもしませんで飛んだ失禮を致しました。おい、椅子を持つて來な。」

と、助手に云ひつけて、

「さあどうかお腰をおかけ下さい。」

魯達は、どつかと腰を下して、

「經略相公閣下の御命令だから、よい肉を十斤、賽の目に切つてくれ。脂味は些とでも入つちやいけないぜ。」

鄭「おい、取締、早くいゝところを十斤切んな。」

魯「あんな野郎にやらしちやいけない。お前が切んな。」

鄭「へい〳〵、御尤さま、私が切つた方がようげせう。」

と、十斤の精肉を選んで、鄭屠自ら肉切臺でこまぐゝと切つて賽の目とする。

ところへ宿屋の若者は、手拭で頭を包み、鄭屠の店へ金親子出立のことを知らせに來たが、見ると、魯達が肉切臺の前に威張つてゐるので、近寄ることも出來ない。唯遠くの方に立つて、簷下から覗いてゐる。鄭屠は丁寧に蓮の葉で切つた肉を包み、

「將校殿、お屆け申しませうか。」

魯「屆けるに及ばない。まア待ちな、まだ十斤入用だ。今度は脂味、肉があつちやいけないぜ。そいつを賽の目にするんだ。」

鄭「精肉はお役所で肉饅頭にお入用でせうが、脂味の賽の目は何になさいます。」

魯達は眼を据ゑて、

「相公閣下の御命令だ。俺の知つたことぢやない。」

魯「何か又御入用なんでせう。私が切りませう。」

と、又もや十斤の最上等の脂味をこまぐゝと切つて、蓮の葉に包む。彼是時間は推移つて朝飯の時ももう過ぎた。宿屋の若者は近寄りも出來ず、肉を買ひに來る客足も途絶えた。

鄭「お役所へ使に持たせてお屆け致しませう。」
魯「おいもう十斤い、骨を賽の目に切つてくれ。肉が些とでもあつちやいけないぜ。」
さう聞くと、鄭屠は笑つて、
「ふざけなさんな。人をからかひに來たんですかい。」
魯達は身を躍らせると、賽の目の兩包を手に取るや否や、はッたと睨んで、
「貴樣をわざとからかひに來たのさ。」
と、面上望んでえいと投げつける。似たりや似たり、紛々として降り來る一陣の肉の雨。
鄭屠は怒つたも怒つたも、忿怒の氣は、兩脚の下から兩筋となつて眞直に頭の頂邊まで逆流した。心中無明の業火は炎々たる焰を吐いて收まり切ることが出來ぬ。肉切庖丁を握つたまゝ魯達を目蒐けて、躍りかゝつた。早くも魯達の身は街路の上に立つてゐる。向三軒兩隣の人々も、數十人の奉公人も手の出しやうがない。路行く人は足を止め、旅宿の若者と唯々あれよあれよと呆氣に取られてゐる。鄭屠は右手に庖丁しつかと摑んで、左手に魯達を引捕へんとする。魯達、其左手を握ると、飛込みざまに、素早く脚を揚げて、鄭屠の横腹を蹴る。頭顱倒と地響きして倒れた鄭屠の胸先ぐいと踏みつけ、丼鉢大の拳骨固めて、
「俺が初めて老种經略相公閣下の關西五路の廉訪使となつた時分は、鎭關西と云つても差支はなかつたが、貴樣のやうな肉切の、狗ころ同樣の畜生奴が、鎭關西なんて名乘るは怪しからんことだ。又貴

樣はどうして金翠蓮を騙しをつた。」
と、鼻づら目蒐けて、ごつんと撲る。さつと迸る一面の鮮血、鼻柱は曲つてくの字なり。まるで醬油屋の店をひつくり返したやうで、酸いも鹹いも、辣いも、一度にどつと流れ出す。
もがきにもがいたが、起上がれぬ鄭屠、庖丁は遠く彼方へ投げ出された儘で、
「こいつアひどいや。」
と、呻吟いてゐる。
「この肥桶野郎の糞泥坊。まだぐづ〳〵吐し居るか。」
と、又もや振上げた拳骨は、眉間に向つて電の如くに飛ぶ。あつと云ふ間もあらせず、瞼は破れて、眼球は噴出す。帛屋の店をひつくり返したと同樣、紅いも黑いも、紫も一つになつてぶち撒かれた。兩側に見てゐた人々、いづれも魯達を恐れて、止めることも出來ぬ。鄭屠はたゞ、
「お助け〳〵。」
と、泣叫んだが、魯達は大喝一聲、
「この破落戸め、剛情張りや許してもやらうが、助けてくれなんて弱い音を出しちや、決して勘辨ならないぞ。」
と、又拳を固めて腦天をぽかん。恰もお寺の本堂で水陸亡者の大施餓鬼をつとめるやうに、磬が鳴る、鈸が叩かれる、鐃が響く。頭の中はひつくり返るやうな音響。鄭屠はうんと、しやつちこ張つ

て、出る息はあつても入る氣はなく、身動きもしない。

魯達はいゝ加減に、

「死んだ眞似するない。又ぶん撲るぞ。」

と、云つて見たが、次第に鄭屠の面色が變つて來るので、

「擲つて懲らしてやらうと思つたが、拳骨三つで、こりやほんとに死んでしまつた。こいつアいけない。こつちもお仕置になる、さうすりや差入れをしてくれ人もない。早く逃げ出すに限る。」

と、急ぎ足で、鄭屠の死骸を指し、

「空死してゐやアがる。まアあとでゆつくり貴樣と談判するぞ。」

と、云ひ捨てゝ、大股に立去つたが、誰あつて引き止めるものもない。

魯達は下宿に戻つて、少しばかりの衣類と金錢とを携へ、其他の荷物は棄て置いて、唯一本の肩ほど長のある棒を提げて、南門から煙の如く掻き消えた。

鄭屠の家の人々は宿屋の若者と一緒に倒れた主人をさまゞゝと半日も介抱して見たが、一息も吹き返へさず、あの世の人となつて、もう術の施すべきやうがない。近隣老若の人々からは之を州廳に訴へる。州の知事は恰度出勤したが、告訴狀を見て、

「魯達は經略府の將校であるから、小官が勝手に捕縛することは出來ぬ。」

と、たゞちに轎に乘つて、經略府に出頭し、經略に謁見して、魯達兇暴の旨を告げた。聞く經略は

驚いて、

「魯達は武藝は出來るが、短氣な男だから、こんなことを仕出かしたのだ。斯うなりや、私も彼を保護することは出來ぬ。知事に任せて置かう。」

と、思案し、

經「魯達は私の父親老經略のとこの軍人ぢやつたが、こゝには私を護衛するものがないので、あれを連れて來て將校として置いたのぢや。然し人命を害したとなりや、君が捕縛して訊問してくれ。若し白狀して罪が明白となり、愈々裁判が確定したなら、父親に知らせて處分をしよう。さうしなければや、後日父親が地方鎭撫上、彼のやうなものが入用の時に惡いからな。」

府「よろしうございます。私が裁判致しまして、老公に申上げ、それから御處分を願ひませう。」

と、知事は此府を暇乞して、府廳に立ち歸り、捕手の役人に拘引狀をわたし、犯人魯達の捕縛を命じた。

王觀察は命を稟けて拘引狀を携へ、二十人餘りの捕手を引具して、魯達の下宿へやつて來て見ると、下宿の亭主は、

「魯達さんは荷物を持つて、棒を提げながら、お出かけになりました。何かお上の御用でお出かけと存じまして、お尋ねも致しませんで。」

との返事。居間を開けて見ると、古臭い衣裳や夜具が殘つてゐるばかりである。

王觀察は亭主を引連れて、そこ〻と尋ねて歩いたが、皆目見當らない。そこで兩隣の主人と下宿の亭主とを召捕つて、州廳に歸參し、魯達出奔の由を報告する。府知事は下宿の亭主と兩隣の主人とを拘留し、鄭屠の隣家のものどもをも拘引した。檢屍の下役人に命じて、町役人、庄屋とともゝ鄭屠の死骸を檢分させる。鄭屠の家では死骸を棺桶に入れて、厚く之を寺院に送る。文書を構成して、日を限つて魯達捕縛の命を下す。原告人は其儘あづけて家に引取らせ、鄭屠の隣家のものどもは救助しない罪で杖罪を課する。魯達下宿の亭主、隣家の主人達はきッと叱り置くことゝした。各地各處に文書を發送し、賞金一千貫を懸け、魯達の年齢、戸籍、容貌を書き記して、到る處に之を貼り、關係者一同は其儘にして一件の終るまで、待たせることにした。

魯達は渭州を出奔して東に奔り、西に逃げ、忙しく幾處の州府を通過したが、さてどこへ往つて善いか、見當がつかない。半月ばかりさ迷ひ歩いて、到着したのは、代州の雁門縣。城内に踏入ると、市中の賑ひは大方ならず、人家は密集し、車馬は縱横にかけ廻つてゐる。百二十種の商業、ありとあらゆる貨物は整然として、名は縣でも、州府よりも優つてゐる。魯達は行くほどに、町の四辻に出たが、黑山のやうに人だかりして、高札を見てゐる。魯達は何事だらうと、群集の中に押分けて入つたが、元來目に一丁字なき、文字の讀めぬ情なさ、唯人々の讀むのを、ぢつと聽いてゐた。

代州雁門縣は太原府指揮使役所よりの命を受けて此處に之を告示す。

渭州に於ける沙汰と同じく、鄭屠を打ち殺したる犯人魯達、卽ち經略府將校を捕縛すべ

し。若し之を隱匿して家に置き、宿泊飲食せしめたるものあらば罪は犯人と同じ。之を捕縛するもの、又告訴するものには賞金一千貫を與ふべきものなり。

魯達は此處まで讀むのを聽いてゐると、不意に背後から、

「張大哥、どうして此處にゐるのかえ。」

と、云ひさま腰をしつかと抱いて、其儘そこから引張り出したものがあつた。

四、五臺山の怪僧

魯達は體をねぢつて誰かと振向くと、引止めたものは別人ならず、渭州の茶屋で助けてやつた金老爺であつた。老爺は委細構はず、魯達を引張つて人なき處に到り、

「旦那樣、あんまり大膽すぎやしませんか。制札が出て一千貫文の懸賞で、貴方樣を捕へようとするのに、旦那樣はどうして平氣でそれを御覽になつてゐるんです。此老爺がお目にかゝらなかつたら、其筋のものに捉へられるかも知れませんぜ。あの制札には、旦那樣の御年齢、御樣子、御鄕里がちやんと書いてあります。」

と、云ふに、魯達は、

「俺は眞正のことを云ふがね、お前のことで、あの日、狀元橋へ出かけて往つて、鄭屠に逢つたが、彼奴、俺の拳固三つで、くたばりをつたわい。そこで俺は逃出して、四十五日目についぃ此處へ來たん

だ。そりやさうと、お前は東京へ歸らずに、どうして此里へ來たんだ。」
と、不思議がる。
金「旦那樣がお助け下すつてから、一臺の車を探しまして、東京へ歸らうと思ひましたが、若しあの人でなしめが、あとから追ひかけて參りますと、旦那樣はいらつしやいませんし、どうすることも出來ません。そこで東京へは歸らずに、北に向いて參りますと、丁度都の古馴染で、此處で商賣をしてゐるものに出逢ひましたので、其厄介になりました。すると其ものゝ世話で、娘が此邊での財産家趙員外の圍者となりまして、何不自由なく暮して居ります。之もみんな旦那樣のお蔭でございます。娘は始終あなた樣のお噂を自分の旦那に致して居りますが、其員外殿も鎗や棒が好きなんですから、どうか一度あなた樣にお逢ひ申したい、どうしたらお目にかゝれるだらうなんて申して居られます。とにかくまア旦那樣、家においでなさいまし、又御相談を致しませう。」
と、云はれて、魯達は金老爺とともに半里も往かぬうちに一軒の門前に到着した。老人は簾を揭げながら、
「おい娘や、大恩人がいらつしやつた。」
と、呼ぶと、娘はこつてり粧りで出て來て、さアどうぞと、魯達を請じ入れて、慇懃に禮をする。
「旦那樣があの時にお助け下さらなかつたら、どうしてこのやうに暮して居られませう。」
魯達が娘を見ると、前の金翠蓮とは似ても似つかぬ別人の美人となつてゐる。

「さあどうか二階へお上り下さいまし。」
魯「もうかまつておくれでない。俺はもうお暇するよ。」
老「旦那樣がおいで下すつたんですもの、どうして、お歸し申しませう。」
と、老人は魯達の荷物を受取つて、樓上へと案内する。
「おい娘や、お側にゐな、私が御膳の支度をしてくるから。」
「おい老爺さん、かまつてくれちやいけない。あり合せで結構だ。」
老「旦那樣の御恩は、命を差出してもお返しが出來ません。ちつとばかりの料理なんか、決して御懸念下さいますな。」
娘は魯達を引止めて樓上に座を設け、老人は下におりて、小者を呼び、小間使に云ひつけて、火を起させ、自分は小者を引連れて町へと買物に出かける。新鮮な魚と、雛鳥、粕漬の鵞鳥と鮓、時の果物などを購つて、樓上に安排して酒宴を開いた。餉臺の上には、三つの盞と三組の箸とを置いて、程よく野菜果物、料理のくさ〴〵を竝べる。小間使は銀の徳利で酒を燗する、娘と老父とはかはるがはる酒をすゝめる。金老爺は床の上に坐つてうや〳〵しく拜する。
魯「おい、お老人さん、どうしてそんなに丁寧に挨拶するのかい。俺ア困つてしまふぜ。」
老「お聞き下さい。私が此處へ參りまとす、紅唐紙へお名前を書き記しまして、朝晩お香を上げて親子二人でそれへお辭儀をして居ります。それに今日は生身の旦那樣がおいで下すつたのですもの、お

辭儀をしないで、何と致しませう。」

魯「いや、どうもこれは辱けない。」

三人はゆる〳〵酒を酌みかはして、はや日暮に及んだ。

すると、突然樓下に唯ならぬ物音が聞える。魯達は窓を開けて、見渡すと、これはしたり、樓下には二三十人、手に〳〵木切、棍棒を携へ、口々に、

「とつちめろ。」

と、呼ばはつてゐる。此一群の中に馬に跨つた一人がゐる。大喝して、

「賊を逃がすな。」

と、叫ぶ。形勢不穩と見た魯達は腰掛取つて、樓下を目蒐けて投げつけようとするを、金老人は慌てゝ手を掉つて。

「お騒ぎなさいますな。」

と、云ふなり、急いで樓下に走り出で、騎馬の紳士のほとり近くに進み寄つて、何やら話をする。聞く紳士は「あはゝゝゝ」と、笑つて、

「退散せい。」

と、呼ばはると、二三十人の人々は退却する。紳士は馬を下りて、しづ〳〵門内に進み入る。金老人は魯達を階下に案内する。紳士は腰をかゞめて丁寧に禮をする。

「お名前は兼々承つて居りましたが、お目通りをするのは今が初めて。さあ高義の將校殿、禮をお受け下さい。」

魯達は不審の面色で、金老人に打向ひ、

「この方は一體どなただね。俺は一向懇意ぢやないのに、どうして禮をなされるんだな。」

金「この方が、娘のお世話になつて居ります趙員外さんでございます。私がどこかの若い男を連れ込んで二階で一杯飲んでゐるとお思ひなすつて、家來衆を連れて、ぶちのめさうとおいでなすつたのです。そこで私がお話し申して、一同退散したのでございます。」

魯「さうであつたか、不審は晴れたわい。」

趙員外は、魯達を又もや樓上へと案内する。金老人は再び杯盤を改めて、馳走をする。趙員外は魯達を上座にと据ゑる。

魯「正座はいけませんや。」

趙「どうかさう仰しやらずに。貴方の豪傑でおいでなされるのは、夙うに承知して居ります。計らず今日お目にかゝつてこんな仕合せはございません。」

魯「俺は此通りのいけぞんざいな男です。其上重大な罪人です。こんな男を見棄てずに、交際して下ずつて、又分相應な使ひ道もござつたなら、何でも致しませう。」

趙員外は殊の外喜んで、これから鄭屠打殺しの一件を尋ねる、世間話をする、鎗法の話も出て、半

夜飲み明して、めい〳〵眠に就いた。

翌日、夜が明けると、趙員外は、魯達に向つて、

「こゝは善うございますまい。私の邸で、ゆつくり御逗留なさい。」

と、云ふ。

魯「お宅はどちらです。」

趙「こゝから十里餘り、七寶村と云ふところなんです。」

魯「そりや結構です。」

員外は人を邸に走らせて、二頭の馬を牽き來るを命じたが、正午にならぬうちに到着したので、魯達を馬に乘せて、下男に荷物を擔がせる。魯達は金老人親子と別れて、員外と馬に乘つて、兩人馬首を竝べて、路々物語をしながら、七寶村に到り、程なく、趙邸の門前にて馬を下りた。員外は魯達を案内して座敷で酒宴のもてなしをする。翌日もまたさま〴〵の馳走をする。

魯「どうも斯うお世話になつちや、お禮のしやうがありません。」

趙「は、ア、旅は道連れ、世は情、何のお禮がいりませう。」

斯くて魯達は此處に留ること數日であつたが、或日、兩人書院で物語ゐるところへ、慌しく駈けつけたのは、金老人、傍に人なしと見て、

金「魯達の旦那樣、先日の騒ぎの時、急に人々が退散したので、何やら疑惑が起つた樣子でございま

す。昨日其筋のものが近所で噂を聞き糺してゐた樣子でございます。殊によつたら、あなた樣を捕縛するのかも知れません。さうなつたら飛んでもないことでございます。こりや私の取越苦勞ではございません。」

魯「さうすりや、俺が去てしまつたら、い、ぢやないか。」

趙「貴方をお留め申して、何か事件が出來して、貴方に怨まれちやいけないし、又貴方に御退去を願ふやうぢや、私の顏が立ちません。そこで私に一ツ名案があります。それなら大丈夫ですが、貴方が承知して下さるか、どうですかなア。」

魯「俺は御存知の通りの兇狀持、どこか落ちつくところがありや結構なんで、承知も不承知もありやしません。」

趙「さうだと結構です。實は此處から三十里餘り離れたところに、五臺山と云ふ山があります。その山上に文珠院と云ふ寺がありまして、もとは文珠菩薩の道場で、寺には五七百人の僧が居ります。その住職は智眞長老と云つて、私とは兄弟同樣の間柄、又私の先祖は寺へ寄進をしましたので、寺の大檀越です。私は一人の僧侶を剃度させて寺へ置く約束がしてあるんで、五箇の花押を捺した僧侶免許狀が買つてあるんですが、まだ適當の人がないので、本願を達しません。貴方が御承知なら、費用は一切私が辨じます。どうです頭を圓めて坊さんとなりますか。」

魯達は心の中で、「どこへ往かうたつて、往くところがない、こりや坊主になるより外はあるまい。」

と、思案し、
「お世話下さるなら、坊主となりませう。よろしく御取計ひ下さい。」
と、此處で相談は一決し、さま〳〵の禮物やら衣服やらを用意し、翌朝下男に擔がせて、兩人は五臺山にと向つた。
趙員外と魯達との乘つた轎は山上に到着すると、下男は先づ寺に此旨を報ずる。寺からは役僧達が迎へに出て、山門外の一亭に案内する。智眞長老は首座、侍者を引連れて此處まで出迎する。趙員外と魯達とは進んで禮をする。挨拶がすむと長老は、
「施主殿、遠方のところを善うこそおいでなされましたな。」
趙「ちとばかりの用向きで、參上致しました」
長「さア方丈で茶なとお上りなさい。」
云はるゝまゝに、趙員外を先に、魯達は其後について、方丈に案内せられた。長老は員外を上座に坐らせると、魯達は下座に往つて椅子の上にどつかと腰をおろす。それを見た員外は魯達を呼んで耳に口、
趙「貴方はこゝで出家をなされるのに、長老に對して腰をかけちや——いけません。」
魯「そいつア氣がつかなかつたです。」
と、員外の背後に起つてゐる。首座、維那、侍者、監寺、都寺、知客、書記は順に東西に分れて侍

立する。員外の下男は、轎を片附けて、土産物を入れた蓋物を捧げて、それを方丈に竝べ置く。
長「これやどうして頂戴致すのぢや。いつもいかうお世話になつてゐるのに。」
趙「ほんの名刺代り、御禮を仰しやつては恐縮です。」
坊さやん稚兒は其土産物を奥へと持ち運ぶ。員外はやをら身を起し、
「和尙さんにお願ひがございます。私はかね〴〵一人の僧を得度してお寺にお賴み申さうとの念願でございましたが、今日まで其本意を遂げませんでした。然るにこれなる弟分の魯と申すは、關西の軍人出身ですが、世間の艱難に逢ひまして、味氣なく、浮世を外に出家を致さうとのことでございます。どうか慈悲のお心で、私に面じて其志を遂げさすやう偏に願ひ上げます。費用は私が萬事辨じます。何卒お許し下さらば、有難い仕合せにございます。」
長「いやそれは本寺の光榮です。承知致してござる。さあ茶を進ぜませう。」
やがて稚兒は茶を捧げて來る。喫し畢りて茶碗を運び去ると、長老は首座、維那を招いて得度の相談があり、監寺、都寺に齋の支度をさせる。首座と大勢の僧侶とは別室で坊主頭を集めての會議。
「あの男は出家に似合しくない。第一、あの眼は甚だ善くないね。」
大勢は、
「知客殿、御坊は先づあのお客をゆつくり休息させたがよからう。長老樣と我々とで、篤と相談を致さう。」

知客は固より應接役であるから、趙員外と魯達とを客間へ案内して休息させる。一同は長老に打ち向ひ、

「あの出家しようとする人物でございますが、如何にも人相が善うございません。ありやお斷りなさいませ、お寺の禍根になりさうです。」

長「あの人は趙員外と親しい仲、員外殿の顔を潰すわけにはゆかぬ。そのやうに疑ふことは已めさつしやい。私が一つ運勢を見よう。」

と、線香を炷き、禪椅子の上に膝を曲げて坐りながら、口に呪文を唱へて、暫く入定の體。線香が燃えてしまふと、長老は一同を見廻し、

「あれは剃度させませう。あの人は天星に合つて性質が剛直である。目下は如何にも兇暴で、運勢もさま〳〵であるが、將來は清淨となり、よい佛果を得ること、お前達の及ぶ所でない。善う覺えてゐさつしやい。邪魔してはいけない。」

と、云ふに、首座は、

「長老樣は彼の缺點を辯護なさいますから、已むを得ません。知つて申し上げぬは善くないことですが、お聽き入れずとあらば其通り致しませう。」

やがて方丈で趙員外等に齋の接待ありて、いよ〳〵魯達得度の準備が始まつた。趙員外は金子を出して、それ〳〵の用意萬端殘る所なく、吉日良時を選んで、鐘を鳴らし、鼓を擊ちて、一同を本堂に

集めた。五六百人の僧侶はみな〳〵袈裟をつけ、兩列に侍立合掌して禮をする。趙員外はしるしの禮物を竝べて禮拜する。式辭の朗讀が濟むと、稚兒は魯達を法座の下へ案内する。維那は魯達に頭巾を脫がせ、髮を九つに分けてわがね、指の股に掬ふやうにする。剃刀持はぐる〳〵と之を剃つてしまふ。鬚も剃り取らうとすると、魯達は、

「おい、髭は殘しておくんなさい。」

一同はくす〳〵と笑ふ。長老は法座の上から、

「一同、傷を聽け。

寸草留めず、六根清淨なり、汝がために剃除し、爭競を免れ得せしむ。喝。

みんな剃つてしまへ。」

と、云ふ。剃刀持は一刀に殘る所なく剃り畢つた。首座は度牒（剃度の免許狀）を捧げて法座の前に到り、法名を賜はりたいと申す。長老は空紙の度牒を取りて、

「靈光一點、價千金に値す、佛光廣大なり、名を智深と賜ふ。」

と、一傷を喝して、其度牒を下へ渡すと、書記はそこに字を書いて、魯智深に渡す。長老は法衣と袈裟とを授けて、智深にそれを着けさせる。監寺は魯智深を法座の前へ引き連れると、長老は手で頭の上を撫で摩り、

「一には佛性に歸依する事、二には正法を歸奉する事、三には師友を歸敬する事、之を三歸と云ふの

ぢや。五戒とは、一に殺生せず、二に偷盗せず、三に邪淫せず、四に酒を飲まず、五に妄語せず。」
と、嚴かに云ふ。禪家では之に對して、出來ますとか、出來ません、とか云ふべきを、智深は固よりさうとは知らず、
「分りました。」
と、答へる。一同は又どつと笑ふ。
式が畢ると、趙員外は一同を僧堂に案内して、香を焚き、齋を設けて、それ〴〵に禮物を贈る。都寺は魯智深を引連れて、一同に挨拶させ、堂後にある座禪堂に案内した。翌日、趙員外は長老に別れを告げ、引留める袖を拂つて出立するので、長老は一同と山門まで見送りをする。
趙「智深は根が愚直な、ぞんざいな男でござれば、無禮の言行を致すやも計られませぬが、そこは私に面じて、萬事お許し下さいませ。」
長「御心配なさいますな。老僧がゆる〳〵教へて佛道に引入れませう。」
員外はそつと智深を松の下の人なき處へ呼んで、ひそ〳〵と、
「前とは違ひますから、十分注意して下さい。横柄にしちやいけません。大切にして下さい。衣物なんかは、使に持たせて參ります。」
魯「大哥に言はれないでも、俺はちやんとやつて往きますぞ。」
員外は去つてしまふ。魯智深は歸ると、座禪堂の床の上へひつくり返つて寢てしまふ、そこへ來た

のは、上席下席の兩人の禪坊主、
「これさ、いけないぢやないか。出家になつたら、なぜ座禪をやらつしやらぬ。」
「うるさいな、俺が勝手に寢てゐるのに、お前達がとやかく云ふわけはない。」
禪「大難儀だ。」
智深は腕をまくつて、
「俺。すつぽんは大好物だが、其大鰻とは何だえ。」
禪「こりや苦々しいこつちや。」
智「すつぽんは丸々と肥つて旨いのに、苦いとは、何のこつた。」
面倒くさいと思つて、兩人の禪坊主はその儘棄て置いたが、翌日は長老にこの事を訴へんとする。
首座は、
「あんなものには構はぬが善い。長老は彼奴が後來佛果を得て、我等の到底及ぶ所でないと、彼奴を庇護してござるから、云うても役には立たない。」
と、云ふので、禪坊主兩人もあきらめた。
斯うなつて來ると、魯智深はい、氣なもの、日暮になると、大の字なりで床の上で大鼾、目が覺めると、委細構はず、堂の後で糞も尿も所嫌はずたれ流し、憤慨した侍者は長老へ此事を直訴したが、長老は一喝して、

「くだらぬことを云ふな、檀越趙員外殿の顏にか、るぞよ。今に改まるであらう。」
と、てんで取りあげないので、もう誰も云ふものがなかつた。
魯智深は五臺山にありて、早くも四五ヶ月を有耶無耶の中に過したが、恰も時は初冬の好天氣、久しくくすぼり返つてゐて、脾肉の嘆があるので、黑布の直綴を着し、青い帶を締め、坊主草履を穿いて、大股で山門を出て、足にまかせて、山の中腹にある亭にのそりと入ると、安樂椅子にどつかと腰を下した。
魯「いま〳〵しいこつた。俺はいつも酒が好き、肉が好きで、毎日やらない事はないのに、坊主にさせられて、まるで干物になつてしまつた。趙員外も此頃は何も旨いものを送つてくれやしないので、口の中がへんにこびりついてしまつた。何とかして飲みたいものだがなア。あゝ酒が欲しい。」
ふと見ると、遠くの方から一人の男が二荷の桶を擔つて唄を謳ひながら山路を上つて來る。桶にはぴたりと蓋をして、男の手には金柄杓を握つてゐる。其謳ふ唄。
「修羅の巷の九里山よ、牛飼ふ童の拾ひ來る、刀や鎗に、思はしやんすか、昔の名殘り、そよと吹く、風に浪立つ烏江の水は、虞姫が項羽と別れた時に、何と善う似てござんせう。」
男は智深のゐる亭へ來ると、擔いだ桶を、どつこいしよと下した。
魯「おい、その桶には何が入つてゐるのか。」
男「上酒が入つて居りますのや。」

魯「何、酒だつて。其一桶はいくらだ。」
男「戲談云つちやいけましねえ。」
魯「何、戲談云ふもんか。」
男「此酒はお寺の人足や堂守、駕籠舁の衆に賣るのでござえます。長老樣からちやんとお達しがありましてな。和尙さん方に賣りましたら、どえらい目に逢ひますんや。資本は取上げられて、家からは叩き出されますのや。お寺から資本を出してもらうて、お寺の借家に住んでゐる私等、お前樣にや賣られません。」
魯「ほんとに賣らないのか。」
男「打ち殺されたつて、賣られませんのや。」
魯「お前を殺しやしないよ。唯お前の酒を買つて飲むのさ。」
こいつはよくないと見て取つた男は桶引擔ぐなり、驅け出した。亭から躍り出た智深は兩手で天秤棒をしつかと摑み、足を揚げてはつたと蹴る。あいたゝゝとばかり、男は、兩手で蹴られたところを抑へながら、其儘そこへ蹲まる。
智深は兩荷の桶を亭の中へ運ぶと、金柄杓を拾つて、桶の蓋を開ける。息をもつかず冷酒を飲むこと、長鯨の百川を啜るが如き勢で、見る〳〵うちに一桶を飲み盡した。
魯「おい、勘定は明日寺へ取りに來なさい。」

と、云つたが、此男どうして寺に勘定取りに往けやうぞ。長老に知れたら最後、飯の食ひ上げは必定と、蟲をこらへて、今一桶の酒を半分づつに兩桶に分け、金柄杓を取るなり、一散に飛ぶが如くに下山した。

魯智深は半日ばかりそこに坐つてゐたが、酒氣は沸々と五體の中に湧いて來たので、しばし松の根もとで休んでゐた。やをら起上つた彼は肌脱ぎとなり、兩方の袖を腰の邊へしつかと挾み、背中に彫つた倶利加羅紋の文身を現はし、雙の腕を打振り〳〵山に上つた。遙に之を見た山門の門番、三十棒を喫はす竹杖取つて、山門を入らうとする魯智深を押し止めた。

「これ其方は佛家の弟子ではないか。それに酒食つて、醉つぱらつて山に上つて來るとは、どうしたことだ。盲目ぢやあるまいから、庫裡にある掲示は見て知つてゐるだらう。和尙が戒を破つて酒を飲むものは四十棒をくらはして寺を逐ん出す、門番が醉つた僧侶を寺へ入れたら十棒をくらはすとあるわい。さあ、さつさと下山しろ。四十棒だけは許してやるぞ。」

魯智深は坊主になり立てゞはあり、本來の亂暴はまだ改まらないから、それを聞くとひとしく眼をくわつと見開いて、

「馬鹿野郎、擲ぐるとぬかしたな。よし來た俺がぶん擲つてやらう。」

此勢に恐れた一人の門番は急を監寺に報ずる。一人は竹杖押取つて、智深を押止める。えい面倒だとばかり、智深は竹杖押除け、掌で門番の横面をぴしやりと打つ。打たれて、ひよろ〳〵となつ

た門番は、やをら姿勢を立て直さんとするを、又一つぴしやりで、あつと云ひさま山門の下へひつくり返る。

「もう許してやるぞ。」

と、智深は足許はよろ〳〵と千鳥足で、寺の中へよろけ込む。急報を得たる監寺は人足、駕籠舁など數十人を呼び集め、各々木切れ棍棒をおつ取つて、西廊下から繰り出す出合頭に、はたと智深に出逢つた。

雷のやうに一聲吼えて、大股に闖入して來た智深を見ると、一同は慌てゝ藏の中へと逃込んで、格子をはたとしめる。智深は拳と脚とを一動かし動かすと見る間に、格子戸を押破り、一同は逃路なく、棒おつ取つて藏から打つていでようとする。監寺は形勢の唯ならぬに驚いて、長老に報告する。長老は數人の侍者を引連れ、廊下に出て、

「智深、無禮をすな。」

と、一喝した。生醉本性違はず、長老と見た智深は持つたる棒を打棄て、進寄つて挨拶し、

「智深はちとばかり酒を食ひましたが、別に何も惡戯はしませんのに、大勢が理不盡にも俺を打擲しようとするんです。」

と、訴へる。

長「まア善い。早く往つて寢みなさい。明日又話をして聞かさう。」

魯「長老さんにお日にかゝらなかつたら、づくにぶめらを打殺してやるんだつたに。」
長老は侍者に云ひつけて、智深を寢所へ送つてやると、其儘、そこに打倒れて、大鼾で寢てしまつたが、納まらないのは一山の僧侶達、長老のぐるりに集つて、口々に、
「此間あれほど長老樣に御注意申上げましたのに、今日あの樣はどうです。寺の規則はあの野良猫の爲にめちやくちやです。とても我慢は出來ません。」
と、わめくに、長老は騒がず、
「今此騒ぎがあつても、後には佛果が得られやう。趙員外殿の顏を立てゝ、彼を許しておやり。私が明日彼には善う云うて聞かせよう。」
一同は冷笑つて、
「分らずやの長老さんだ。」
と、いづれもそこを立去つた。
翌朝早く長老は侍者に魯智深を呼びにやつたが、まだ寢てゐて、容易に起きない。起すと、其儘直綴を着て、跣足で飛出したので、驚いたのは侍者、追ひかけると、本堂の裏でした、かの大便。笑ひをこらへて、侍者は手を洗ふのを待ち、
「長老樣からお話があります。」
と、智深を連れて方丈へと來る。長老はそれと見て、

「こりや智深、お前は軍人の出身ではあるが、趙員外殿からの賴みで剃度をしてやつて佛弟子となつたのぢや。五戒は敎へ置いたに、なぜ其戒を犯しなすつた。」
魯「以來は愼みます。」
長「趙員外殿の賴みでなくば、寺を逐出す筈ぢや。以後はきつと嗜むがよいぞ。」
智深は起上つて合掌し、
「決して致しません。決して致しません。」
長老は方丈で彼と朝飯を共にし、いろくと情けある言葉をかけ、衣物と草履とを與へた。
暫くは無事で、智深も三四ケ月は寺の門から外へ出なかつたが、時は二月の好時候で、急に暖氣を催して來た。魯智深は僧房を出て、足にまかせて山門の外に出て、五臺山を仰いでほめそやしてゐたが、風につれて、とつちん、かつちんの音が、山の麓から聞えて來た。智深は再び己が部屋に立戻り、金を懷にして、山を走せ下り「五臺福地」と額打つた樓門を出ると、そこには五六百軒の町があつた。肉を賣る店、野菜を賣る店、酒屋、麵類屋などが竝んでゐる。
「馬鹿め、こんなところがあると知つたら、なにも酒桶を奪取るにはあたらなかつた。自分でやつて來て買つて飲むんだつたに。近頃はとんと精進はかりでやり切れないんだが、なにかあるか買つて食はう。」
とつちん、かつちんの響は、鍛冶屋で、鐵を打つのであつた。其隣には宿屋がある。鍛冶屋では三

人の男が鐵を打つてゐる。

魯「おい親方、い、鋼鐵があるかい。」

振返つた鍛冶屋は、智深の腮に剃り立ての鬚が針のやうにもぢやくと生えてゐて、人相の善くないのを見ると、先づ五分の恐れをなした。手を止めて、

「和尚さん、まアおかけなさい。どう云ふものがお入用ですかい。」

魯「一本の禪杖と、一振の戒刀とが欲しいが、い、鐵があるかね。」

鍛「ござりますとも、どのくらの目方の杖と刀とを打ちませうな。お云ひつけ下さい。」

魯「さうだ。一本百斤の目方のあるやつを打つてくれ。」

鍛冶屋はから〳〵と打笑つて、

「そりや重過ぎまさア。こしらへたつて、貴方には使はれませんや。昔し關王の青龍刀も八十一斤だつたと云ひますぜ。」

焦燥つた魯智深は、

「關王に負けるもんかい。關王だつて、人間だ。」

鍛「まアお任せなさいまし。四五十斤ならば、隨分目方があります。」

魯「お前の云ふ通りにするから、關王と同じ八十一斤に打つてくれ。」

鍛「和尚さん、そりやおよしなさい。餘り大き過ぎちや見つともなくもありますし、又使ふにも不便

です。どうです、六十二斤の水磨の禪杖を打ちませう。と云つて、使へないとお云ひなすちや困りますぜ。戒刀のことは分つてますから、お云ひつけには及びません。とにかく、善い鐵でこしらへて上げませう。」

魯「二つでいくらだ。」

鍛「お高いことは申しません。五兩頂戴致したうございます。」

魯「よろしい。善く出來上つたら又褒美を遣らう。」

と、金を手渡しながら、

魯「まだいくらかあるから、どうだい、一杯飲まうぢやないか。」

鍛「御免なさい。忙しいもんですから、お伴は出來かねますから。」

智深はそこを出て、しばし行くと、酒屋の看板が簷に出てゐる。簾をさつと揚げ、中へ入つて、腰をかけながら食卓を叩いて、

「おい、酒だ〳〵。」

じろりと見た亭主は、

「和尚さん、相濟みませんが、此家もお寺のものです。資本もお寺から下りてゐます。和尚さん方に酒を賣りますと、逐ん出されますからなア。」

魯「そこはごまかして飲ませてくれ。俺はお前の家で飲んだなんて云やしないよ。」

亭「いけません、とても胡麻化しは通用しませんや。どこか外で召上つて下さい。」
是非なく立上つた智深は、
「よし、外で飲んで、お前の家だと云つてやらう。」
亭「いけません、酒を和尚さん方に賣るのは法度です。そんなこと云つて困らしてはいけませんな。」
智深は挺でも動かず、頻りに催促して見たが、到底承知はしない。あきらめて、そこを出かけて、四五軒尋ねて見たが、どこもかしこも賣らうとはしない。智深は遂に一策を案じ出し、斯うしなくつちや、とても酒にありつけないと、行くことやゝしばし、町外れの、杏花深い處に酒屋の印を見つけた。走り着くと、之は小さな居酒屋であつた。
飛込みざま窓側の腰かけに坐つて、
「おい亭主、旅の僧だ、一杯飲ましてくれ。」
亭主はそれを見て、
「和尚さんは、どこからおいでなすつた。」
魯「行脚の出家で、處々雲水して來たのだが、一杯飲みたいのだ。」
亭「五臺山の和尚さんなら駄目ですぜ。」
魯「いや、さうぢやないから、早く持つて來てくれ。」
亭主も、魯智深の樣子や言語が此邊の僧侶と同じからずと見て、

「どのくらゐ上げませう。」
魯「そんな野暮なこたア聞きたくない。大きな奴でどん〳〵持つて來い。」
忽ちのうちに十數杯ほどあふつて、
「おい何か肉はないか。一皿頼むぜ。」
亭「今朝は牛肉はあつたんですが、みんな賣つてしまつてありません。」
此時肉の香がさつと智深の鼻を掠めた。十間へ出て見ると、塀のそばにある土鍋の中で、一匹の狗がぐら〳〵と煮えてゐる。
「おい狗があるぢやないか。なぜ賣らないんだ。」
亭「お前樣は御出家ぢや、狗は食はつしやるまいと思つて云はなかつたんです。」
魯「おい錢はあるぜ。」
と、亭主に渡して、
「半分賣つてくれ。」
亭主は煮えた半匹の肉に蒜の藥味を添へて、智深の前に置く。いたく喜んだ智深は手で肉を割いて、藥味をつけて、かじりながら、又十餘の大杯を飲んだが、飲むわ〳〵、中々やめさうな氣色はないい。驚いたのは、亭主、
「和尚さん、いつまで飲まつしやるんです。」

智深は眼を剝いて、
「たゞぢや飲まないんだ。いらぬ世話なんか燒くない。」
亭「まだどのくらゐ上げます。」
魯「もう一桶持つて來い。」
持つて來た一桶の酒を、時を移さず飲み畢り、片股食ひ殘した狗肉を懷へねぢ込んで、門を出なから、
「錢の殘つた分は、又明日來て飲むぜ。」
亭主は呆れて、しばし其後影を見送つてゐた。
魯智深は半腹の亭に入つて、しばし坐つてゐたが、酒が廻ると、ともに飛上り、
「長いこと力藝をしないので、身體が倦怠い、幾手遣へるか、やつて見よう。」
と、亭を出ると、兩腕をまくつて、上下左右に振動かしたが、亭の柱を目蒐けて、うんと一押ぶつかる。みし〳〵〳〵と激しい音響とともに柱は折れて、亭は苦もなく半崩れ。
此異樣な物音に驚いた山門の門番が駈出して見ると、蹌踉として登つて來るは魯智深、
「やあ、こりや大變だ。又あいつが酒食つて來た。」と、門番兩人は山門をぴつたりと閉めて門をさし、門の隙間から覗いてゐる。山門閉ぢたりと見た智深は、拳骨固めて、連りに叩いたが、固より門番は明けようともしない。

智深は身を飜して、見ると、山門の左に仁王が儼然と立つてゐるのが目に入つた。
「やい、この大男の馬鹿野郎、俺の替りに門を敲きもしないで、拳骨で俺を嚇すのかい。おきやアがれ、手前なんかにアびくともしないぞ。」
ひらりと飛上つて、葱を拔くやうに柵を引つこ拔き、一本の柵の折れで仁王の太股を、はつたと打つ。ばら〳〵〳〵と胡粉、と繪具とが落ちる。見てゐた門番は、
「あゝ飛んでもない。」
と、長老の許へ駈けつける。
智深は身を返して、右の仁王を見るなり、大聲揚げて、
「貴樣は大口開いて、善くも俺を笑つてゐやアがるな。」
と、臺の上に跳り上つて、仁王の足をえいやと打つ。がら〳〵〳〵どしんと震動して、金剛力士の尊像は臺から下へと轉げ落ちる。智深は柵の折木を攫んで大笑ひに笑ふ。
兩人の門番から長老へ火急の報知をすると、長老は、
「相手になんなさるな。お前達が遠退いたが善い。」
と、一向に騷がない。
然し、首座、監寺、都守を初め一山の大衆は承知せず、一同方丈に集りて、
「野良猫が今日又大醉して、亭を毀し、金剛力士の尊像を壞きましたが、何となされます。」

長「昔から醉ひどれには天子もお避けなされたんだもの、老僧などは何ともしやうがないわい。金剛力士の尊像を壞したなら、施主の趙員外に新規に作り直させませう。亭を倒したなら、あの人に修繕してもらひませう。萬事施主に任せます。」

僧「金剛力士は山門の主でございますから、取換へることは出來ますまい。」

長「金剛力士のことは云ふまでもない、本堂の三世佛を壞されても どうしやうがあるまい。相手にならぬが善い。此間の亂暴を見たらうがな。」

一同は方丈を出て、異口同音に、

「あんまり物のわからな過ぎる長老さんだ。おい門番、開けちやアいけないぜ。中から樣子を見ておいで。」

門外では魯智深は大わめきにわめいてゐる。

「やい、糞坊主のづくにふめら、寺へ入れぬとなら火を放けて燒いてしまふぞ。」

これには一同も吃驚仰天、門番を呼んで開けろ〳〵、開けないと、ほんとに火を放けるかも知れないぜと云ふに、門番はをつかなびつくり門をそつと外すが否や部屋の中へ一散に桑原々々。一同は先を爭つて逃げ隱れる。

智深は雙の腕に力を籠めて、うんと押すと、門は開く、勢餘つて、地上にごろりと倒れる。起き直つて、頭を一振ひ、僧堂目蒐けて座禪堂へと闖入する。禪修行の人達は端然と坐つてゐるところへ

簾を刎ね揚げて、躍り入つたる魯智深姿のを一見すると、臍下丹田の修行もあつたものではない。一同ははつと頭を下げる。智深は床のほとりに近づくと、げろ〳〵と地上に向つて小間物店の開店。一同は鼻持ちならぬ臭氣に、

「こりやかなはない。」

と、口鼻を掩つて、途方に暮れる。

禪床に這ひ上つた智深は、帶を解き、直綴脫いで、ずた〳〵に裂くと、狗の股肉が、ぱつたり落ちる。

「こりや善い。腹が減つた。」

と、其儘掴んで囓る。一同は袖で顏を隱くす。上席下席兩人の禪坊主を見て、智深は、狗肉を引裂いて、上席の禪坊主を見て、

「これ喰へ。」

上席は兩袖でしつかと顏を掩ふ。

「どうだ、貴樣喰はないか。」

と、下席の禪坊主の口へ押込まうとする。逃げ損つて禪床から下りようとする其耳朶掴んで引ッ捉へ、肉を取つて、ぐいと押込む。向ひの床にゐた四五人の禪僧達は駈け寄つて、それを止めようとなだめると、智深は肉を投げ棄てゝ、拳骨固めて、てら〳〵頭をこつん〳〵とこづき廻る。講堂は上を

下への大騒ぎ。箱の中から衣や鉢を取出して逃げ出さうとする。首座も手の出しやうがない。智深は慕直に躍り出ると、禪僧は大半廊下に遁れ出た。

監寺、都寺は、長老に知らせずに、人夫、玄關番、駕籠舁等一二百人を呼び集め、手に〳〵棍棒、杖、刺股なんどの、獲物々々を持たせ、鉢卷して、一同は僧堂へと打つて入つた。斯くと見たる智深は大喝一聲したが、手には獲物がない。佛前にあつた供卓を引つくり返し兩脚引抜いて、打振り〳〵打つて出る。一同は棒を引いて廊下へ退いたが、智深を包み圍まんとする。狂ひに狂つた智深は東へ當り西を打ち、南に當り、北を打ち、群る中へわつて入り、法堂の下へと來た。

「智深、無禮すな。一同も手を動かしてはならん。」

と、凜然と響いたのは、長老の聲であつた。

衆僧は十數人何れも打たれたのと、今長老の姿を見たのとで退散する。智深も卓の脚を投げ棄て、

「長老さん、どうかして下さい。」

と、叫んだが、彼の酒氣はもう七八分醒めてゐた。

「どうもお前は度々私を困らせるなう。此前の時も、大騒ぎを仕出かしたので、趙員外殿へ知らせたところが、あの人から手紙をよこして、一同へ詫びを入れた。今度は又此やうに大醉して大亂暴を働いて寺法を亂したばかりか、亭を倒し、仁王を壞す。之は員外殿に任すとするも、大勢に對して此やうな亂暴狼藉をする、この罪業は輕うはない。此五臺山文殊菩薩の道場は千百年清淨の靈地であるの

に、此やうな穢はしいことを仕出かしては、容赦はならぬ。さあ私と一緒に方丈へござらつしやい。私はお前に行く處を作つて上げよう。」

と、長老は智深を連れて方丈へと入る。猶長老よりはそれ〴〵の役僧に命じ、雲水の禪僧を連れ戻させて座禪をさせる。傷を受けた僧には養生をさせる。

翌日、長老は首座と評議し、趙員外に此ことを知らせる。員外よりは破損の個處々々を修繕する費用を辨ずべき旨と智深は不届きにつき長老の御意のまゝにどこへなりおやり下さるべきやう返事があつた。長老は侍者に直綴と草履と十兩の白銀を用意させ、智深を呼んで、

「お前の罪は輕くないが、趙檀越の顏に面じ、手紙をつけて、よい處に去なさせよう。此にはもう置くことは出來ぬ。私は昨夜來考へた四句の偈があるから、それを贐にしよう。一生それを服用しなさい。」

聞く魯智深は、跪いて、

「師の御坊、安心立命させて下さるところは、どこですか。どうか其四句の偈をお示し下さい。」

と、耳を澄ませた。

五、桃花山の山賊

智眞長老が終身愛用の四句の偈た餞別にしようと云ふので、魯智深はそこに跪き、

「どうかお聽かせ下さい。」
と、云ふと、長老は、
「林に遇つて起り、山に遇つて富み、水に遇つて遷り、江に遇つて止る。」
と、說き示した。智深はそれを聽き畢ると、長老を九拜して、包を背負ひ、腰にも腹にもしつかと卷きつけて、長老からの紹介狀を懷にし、一山の人々に別を告げて、五臺山を離れ、鍛冶屋の隣の旅舍に投宿して、禪杖戒刀の出來上るのを待つた。
寺內の僧侶どもは厄介拂ひをしたので、一同歡ばぬものはなく、長老は人夫に云ひつけて、破壞された仁王や四阿を片づけさせる。四五日ならずして趙員外は登山して、修繕の費用を殘る所なく支拂つた。
魯智深は投宿してゐること數日、註文の品々が出來上るのを待ち、鞘を作らせて戒刀を收め、禪杖は漆で塗り、ちとばかりの錢を鍛冶屋へ褒美に取らせ、包は背に、腰には戒刀、手には禪杖を提げて、旅舍の主人や鍛冶屋に別れて、旅路へと上つた。宛然これ一個の荒くれ和尙である。
東京へ向つて半月も旅したが、途中では一切寺院に泊らず、旅舍に寢泊りして、晝は酒店で飲食するを常とした。或日山水の絕景に遇つて、ついうか〳〵と時の過ぐるを覺えず、もう日も夕暮となつたのに、泊るべき處もなく、道連となりさうな人にも逢はない。いづくを今宵の宿としようと、又二三十里を走り行くて、一筋の板橋を過ぎた。遙か彼方を望むと、一叢の紅の霞が棚引いて、鬱蒼たる森の中に一構の屋敷が現れた。邸の背後は山々が重なり合つてゐる。智深は、

「あすこへ往つて、宿を借りよう。」
と、獨語ちながら、急いで門前に到着すると、數十人の下男が忙しさうに、立働いてゐる。智深は禪杖によりかゝりながら、下男に聲をかける。
下「和尙さん、此夕暮に何しにござらしやつた。」
魯「宿屋がないから、今夜は此處で休ましてもらつて、明日の朝早く立たうと思ふのぢやがな。」
下「屋敷は今夜忙しいから、泊めることは出來ましねえ。」
魯「何とかして一晩休ませてくれ。明日は出立するからな。」
下「和尙さん、早く往かつしやい。こゝにゐて、わざ〳〵死なつしやるな。」
魯「こりや可笑しい。一晩泊めるぐらゐは、大したことでもないに、なぜ、わざ〳〵死ぬなんて云ふのか。」
下「胡蠅さいなア。往くならさつさと往つてくんろ。行かないと、ふんじばつて、此處へをつぽり置くぞ。」
聞く魯智深はぱつたと怒り、
魯「こやつ土百姓めら、理不盡なことを云ふない。俺が何も云はないのに、なぜ縛るのだ。」
下男達のうちでは罵るのもあれば、なだめるのもある。魯智深は禪杖取つて振り上げんとする時、

屋敷の中から駈け出た一人の老人、年は六十の上に出てゐるであらう。頭よりも丈高き杖を手にして、下男を叱りつける。

老「こりや何をするのか。」

下「この和尚が私達を打擲らうとするんです。」

魯「愚僧は五臺山から參つたもの、用事があつて東京の方に行かうと致す其途中で、今晩計らずも宿を取り損なつたので、お邸に御厄介にならうと存じましたのを、それなる男どもが無禮にも愚僧を縛らうとするのです。」

老「五臺山からお越の御坊ならば、さあ〳〵私と一所にござらつしやい。」

と、云はるゝまゝに、智深は老人のあとべについて座敷に通り、主客對座をする。

老「どうか御勘辨下さい。活佛のござらつしやる五臺山からおいでのことを、下男どもはとんと存ぜず、並一通りに取計ひましたのです。私は佛敎信者ですから、今夜どのやうなことがあつても、お泊め申します。」

智深は禪杖をついて立上り、

「有難うございます。して失禮ですが御尊名は。」

老「氏は劉で、村の名は桃花村と云ひますから、村人は私を桃花莊の劉太公と呼んでゐますぢやて。そこで御坊の御名は。」

魯「愚僧の師の坊は智眞長老、愚僧の姓は魯ですから、師の坊の一字をもらひまして、魯智深と申します。」

老「夕飯を上げませうが、腥いものはお嫌かな。」

魯「結構、戴きます。酒は濁醪でも、清酒でも何でも結構、牛肉狗肉何でもやります。」

老「ほゝう、腥をおやりかな。」

と、下男に云ひつけて酒肉を持つて來させる。程なく下男は卓子を出して、一皿の牛肉と三四品の野菜と一揃の箸を列べる。智深は腰に卷きつけたもの、腹に卷きつけたものを解いて、どつかと坐ると、下男は酒を酌んで盃に浪々と注ぐ。智深は見るなり、辭退もせず、一氣に一壺の酒を飲み終つて、一皿の肉をべろりと平げる。向側に見てゐた太公は呆氣に取られること半時ばかり、下男が持出す飯も食べ畢つて卓子は片附けられた。太公は、

「さあ表の部屋でゆつくりお眠みなさい。何か騷がしくつてもおのぞきなさるなよ。」

魯「何かお取込みのことでもおありなのですか。」

老「御出家の關係したことではござらぬわい。」

魯「御老人の樣子は何か御不快げだが、こりや愚僧がお騷がし申したせゐではござゐませぬか。明日宿賃をお拂ひしたらば善うござらう。」

老「まアお聞きなさい。私は平常から僧侶達に齋を進ぜたり、布施をしてゐますものです。御坊一人

お泊め申すことなんか何でもないことです。實は今夜娘に婿が參りますので、それで心配してゐるのです。」

魯「あはゝゝゝ、男子が成長すれば嫁を取る、女が一人前になりや嫁に行く。こりや當前のことでさア。それだになぜ心配なされる。」

老「そりや御坊がお知りやらぬからです。今度の結婚は承知してやるのではないのです。」

魯智深はからく〳〵と打笑ひ、

「御老人、お前さんも馬鹿ですな。いやなものを、どうして智にするんです。」

老「私に一人の娘がござるが、本年取つて十九になります。ところで此近邊に桃花山と云ふ山がござるが、近頃山上に二人の山賊の首頭が住つて、寨を作り、五六百人の手下を集めて、人家を劫かし、押込强盗を働くのです。青州の警察でもどうすることも出來ません。それが私の邸へ參つてな、强盗せぬ代りに代物を出せと申しました其折、娘垣間見まして、金子二十兩と一疋の赤地錦を結納だと云つて持つて來て、吉日を選んで、今夜押しかけ智に參らうとするんです。とても力づくでは敵ひませんので、是非なく彼にくれてやらねばならず、それで此やうに心配してゐますのぢや。決して御坊をお泊め申したからではござらぬ。」

魯「ふゝん、さやうか。よし愚僧が道理を諭して心を改めさせてやりませう。娘御を嫁に取ることなんか、ふッつりと思ひ止まらせませう。どうですな。」

老「そりや駄目です。人殺しなんか、平氣にやる惡魔です。どうして、御坊の云ふことなんか聞きませう。」

魯「愚僧は五臺山智眞長老のもとで道理を說くことを稽古しました。如何な鐵石人でも心を改めさせます。今夜娘御をどこかへお隱しなさい。愚僧が娘御の部屋にゐて、因緣を說いて、美事心を翻へさせませう。」

老「そりや辱けないが、却つて虎の鬚を拔くやうなことをなさいますな。」

魯「命なんか棄てゝかゝります。まア萬事愚僧にお任せなさい。」

老「有難い、活佛樣が御來降下すつて、仕合せなことです。」

下男どもも聞いて、ひたすら驚いてゐる。

老「御坊、御飯をもう一度如何です。」

魯「飯はいりませんが、酒がありやちよつぴりと。」

老「ありますとも、ありますとも。」

下男に命じて一羽の鶩鳥のよく煮えたのと、大腕の酒とを持つて來させる。智深は一氣に二三十腕の酒を流星の如くに飲み畢り、鶩鳥も瞬く間に食ひ畢つて、下男を呼んで荷物を部屋に片づけさせて禪杖おつ取り、戒刀を腰に佩き、

魯「娘御はもうお隱しなすつたか、それともまだかな。」

老「娘は隣の邸へ送つて置きました。」
魯「さあ愚僧を花嫁の部屋へ案内して下さい。」
太公は智深を部屋の前に引連れて、
老「この中がさうです。」
魯「お前さん方も隱れておくんなさい。」
太公と下男どもは表の方で宴席を設ける。智深は室内の卓や椅子を取片づけ、戒刀を床の上に置き、禪杖を床のほとりに立て、摺箔の帳を下し、素裸になつて床の上へと跳り上つた。

夜は次第に暗くなつたから、太公は下男どもに燈火をあか〳〵と點けさせる。麥打場に卓子を据ゑ、香花や燭臺を並べ、大皿に肉を盛り、大酒瓶に燗酒を滿たさせる。初更と覺しき頃、山のほとりで銅鑼が鳴り、太鼓が響いた。劉太公は内心びく〳〵もの、下男どもゝ兩手に汗を握つて、此先如何になり行くかと、一同門外に出て見ると、遠くの方から四五十把の松明が明晃々として晝を欺き、一群の人馬が邸をさして驅け來つた。
劉太公はそれと見るより、下男に命じて莊門さつと一文字に開かせ、進んで之を迎へた。前後に輝く武器旗鎗には紅綠の絹を結びつけ、手下のものどもの頭巾には野花を挿んでゐる。前面には四五對の紅紗の燈籠が美しく映えてゐる。首領の打扮は、頭に尖をつまんだ褪紅色の中折頭巾を戴き、鬢の

ほとりには一枝の薄絹にて作つた造花を挿み、上には一領の金の縫取した綠羅の袍を穿ち、腰には摺箔した紅色の腹帶を締め、一雙の縫合せをした雲形跟の牛皮の靴を着け、一匹の丈拔群の大白馬に乘つてゐた。
首領が門前にて馬を下りると、手下の小賊どもは、一齊に聲を合せて、
「帽子のぴか〳〵光るは花婿さまよ。
しやんと衣物の身に合ふ、品善い殿御。」
と、はやし立てる。劉太公は羞付の盞を取上げ、美酒を酌いで地上に跪く、下男どもゝ一同そこにかしこまる。
それと見た首領は手を執つて太公を扶け起し、
「貴方は俺の舅御だのに、どうしてそんなに丁寧になされるか。」
老「さう云はつしやいますな。私は大王の支配なされる人民でございますもの。」
首領は此時七八分醉つてゐたから、から〳〵と大笑して、
「私は此方の婿になつたのだから、決して惡くは致さない。又此方の娘御も私の婿にして仕合せだ。」
劉太公は歡迎の杯を取りて麥打場に來り、飾つてある香花燈燭を首領に見せた。
首「舅殿こんなに歡待して下さらんでも善うござつたに。」
と、此で三杯の杯を傾け、座敷近くへ來ると手下のものを呼んで、馬を柳の木に繫がせた。手下

のものどもは座敷の前で音樂を囃し立てる。座敷へ上りこんだ首領は、
「舅殿、私の奥方はどこにござらつしやる。」
老「羞かしがつて出て參りません。」
首領は笑ひながら、
「酒を持つて來い、舅殿に返杯致さう。」
と、一杯飲んで、
「奥方と逢つてから、又飲んでも遲うはござるまい。」
劉太公は心で、彼の五臺山の和尚が旨く說諭してくれゝば善いがと祈つてゐる。
「さあ此老人が御案内しませう。」
と、燭臺を持つて先に立ち、屏風の背から、新婦の室の前まで往つた。
「こゝに居ります。どうかお入り下さい。」
と、云ふ儘燭臺提げて、つとそこを離れた。知らず吉凶如何に、先づ逃路を作つて置くのが大切だ。
首領は部屋の戸を明けると、中は眞暗やみ。奥方は暗がりにお坐りとござ
「こりやどうだ。舅殿は經濟家だから、部屋の中には一つの燈もない。
るな。よし〳〵明日は手下のものに山寨から一桶の好い油を持せたて、燈をつけさせようて。」
聞いてゐた魯智深は、吹き出しさうなのを耐へてゐる。首領は手さぐりで、そろり〳〵と、進みな

がら、
「おい孃さん、なぜ此私を迎へなさらない。羞かしうはない。明日は貴方を山寨の奥方にしますぜ。」
と、聲をかけながら、手さぐり、足さぐり、やつと摺箔の帳を探り當てゝ、つと引揚げたまゝ、手
を差入れてあちこちと探り廻ると、思ひきや魯智深の肚の皮に觸つた。魯智深は山賊の頭巾の紐を摑
んだなり、ひらりと床をすべり下りる。山賊は身體をもがうとする、頭上に聲あり、
「糞泥坊め。」
智深の右手は榮螺のやうな拳となつて、耳から頸筋かけて、ぐわんと一打。
首「やあ、こりやどうして婿殿を擲るのか。」
魯「貴樣に女房を見せてやらう。」
と、大喝一聲、苦もなく山賊の首領を引倒して、打つ、踢る。踏んだり、擲つたり。
「人殺し、助けて。」
と、首領は聲を限りに呼ばはるので、驚いたのは、劉太公、定めし今頃は因緣を說いて聞かせてゐ
るのだらうと思ひの外、中では助けてくれとの叫聲。慌てゝ、手燭を手にし、手下の山賊どもを引連
れて、一同に駈けつける。燭の光で一眼見ると、こは如何に、素裸の大入道が山賊の首領に馬乘りと
なつて、床の前でめつた打ち。手下の重なものが、
「さあみんなで大王をお助け申せ。」

と、掛聲すると、小賊どもは一齊に鎗おつ取り、棒握つて智深目蒐けて打ちかゝらんとする。智深は首領を棄て置いて、床のほとりの禪杖取つて、一ゆりゆつて躍り出さうとする。其勢の凄じいのを見ると、小賊どもは、わつとばかりに雲を霞と逃げのく。太公は唯「こりや困つた、大變なことになつた。」と連呼してゐる。

此騒ぎのうちに首領は辛くも部屋を這ひ出し、門前に出ると、柳に繋いだ馬背にひらりと跨り、柳の枝を折つて、ぴしやり〳〵と打つたが、繋いだ馬のかけ出しやうもない。

「こりやいけない、こん畜生まで馬鹿にしやアがる。」

よく〳〵眸を定めて見ると、繋いだ繩を解いてゐない。慌てゝ引き切つて、一目散に馬を飛ばして逃げ出した。

「劉太公の老耄め、今にひどい目にあはせてやるぞ。」

と、呪ひの捨科白を殘して山上へとひた走りに走つた。

劉太公は魯智深にすがりついて、

老「和尚さん、飛んでもないことをしてくだすつたな。」

魯「無禮をお咎めなさるな。まア私の着物と直綴を持つて來ておくんなさい。着物を着てからお話しませう。」

と、云ふに、下男は、部屋からそれ〴〵持つて來る。魯智深はそれを身につける。

老「私は和尚さんが因縁を說き聞かせて改心させて下さるのぢやらうと思うてゐたので、打擲なさらうなんて、てんで思うて居りませんぢやつた。定めし山寨へ立戻つて、大勢の山賊を引連れて屠殺しにやつてくるでござりませう。」

魯「御老人お騒ぎなさるな。私が語つて進ぜよう。私は唯の坊主ではない。延安府老种經略相公の幕下の將校であつたが、人を打殺したので、出家したのだ。何の二人ばかりの山賊や、一二千の手下どもが來たつて、ちつとも恐かない。お前さん方、うそと思ふなら、私の禪杖を持ちあげて見なさるがいゝ。」

下男達は禪杖を持ち上げようとしたが、どうして中々手におへない。智深はそれを手に取つて輕々と持ち扱ふこと燈心をひねるがやうである。

老「和尚さん、どうかよそへ行つて下さるな。私の家中をお助け下さい。」

魯「そりや無論のこと。私は死んでも、よそへは行きはせぬ。」

老「酒を持つて來て和尚さんにあげてくれ。然し餘り召上つて醉ひなすつては困りますぞ。」

魯「私はな、一分の酒を飲めば、一分の手並があるし、十分の酒があれば、十分の氣力が出るのだ。」

老「そりや結構です。酒と肉となら澤山ありますから、どうか御存分に。」

桃花山の第一の首領は山寨にゐたが、下山して入婿とならうとする第二の首領の吉左右如何にと、

人をやつて様子を探らせてゐるところへ、慌しく馳せ歸つたのは、數人の手下ども、
「大變です〳〵。」
との注進に、第一の首領は、
「どうして、そんなに慌てゝ歸つて來たのか。」
手「お首領がひどい目に逢つたんです。」
第一の首領が事細かに尋ねてゐるところへ、第二の首領が歸つて來たとの知らせ。見ると第二の首領の紅色頭巾は見えず、綠色の袍はめちや〳〵に引裂かれて、馬から下りると、座敷の前へはつたと倒れ、
「大哥助けてくれ。」
「どうしたと云ふんだ。」
二「山から下りて、あの邸へ行くと、老耄めは娘を隱して、其代りに大入道が娘の身替り、それとは知らないので不覺な目に逢つた。」
と、委細を話した。
「どうか大哥仇討してくれ。」
「うん、そんなことだつたか。まア部屋で休んだがよい。俺がおぬしのために、其づくにふを引捉へて來よう。」

左右のものに向つて、
「早く馬を支度しろ、一同從いて來い。」
と、馬上に鎗を執つて、小賊一同と聲を揚げて山を下つた。
魯智深は酒杯を傾けてゐるうちに、山賊襲來の報が傳つた。
「慌てるな。俺が叩き倒すのを、片つぱしから引つく〳〵つて役所へ引渡して、褒美を貰へ。さあ俺の戒刀を持つて來い。」
と、智深は直綴を脱ぎ棄て、腰から下を引き捲つて、戒刀腰に、禪杖取つて、大股にづか〳〵と麥打場へ出た。
松明の眩ゆい中に第一の首領は馬を乘り廻し、馬上に鎗をひねつて、高聲に、
「づくにふはどこにゐる。早く來て勝負をしろや。」
と、呼ばはつた。智深は怒心頭に發して、
「くたばり損ひの穀潰しめ、さあ俺の腕前を見て置け。」
と、禪杖を水車の如くに廻して、打つてかゝつた。すると首領は鎗をしごくをとゞめ、
「和尚まア〳〵待つた。どうやら聲に聞き覺えがある。おぬしの姓名は何と言やる。」
魯「俺は別人ならず、老种經略相公幕下の前將校魯達、今は出家して魯智深と云ふものだ。」
これを聞くとひとしく、第一の頭はあはゝゝゝと笑ふが否や、轉ぶが如く鞍をすべり下り、鎗を投

げ棄て、身を醜へして恭々しく禮拜し、
「大哥お久し振ですな。其後は御別條もございませんか。兄弟分の手に負へないのも尤もでした。」
魯智深は此奴かうして油斷させるのだなと、引退つて、禪杖を突立て、睛を定めて、よく〳〵見ると、これなん、路上で鎗棒を使ひながら藥を賣る打虎將李忠であつた。
李「大哥はどうして出家姿となられました。」
魯「まアお前と中へ入つて話をしよう。」
和尚と山賊との舊知を知つた太公の驚きは一方でない。
「和尚も同じ穴の貉か。」
魯智深は内に入つて直綴を着し、李忠と座敷で、久濶を叙する。劉太公を喚びにやつたが、老人中中に側へ近寄らない。
魯「怖かないんです。此男は私の兄弟分だ。」
兄弟分だと聞いては、猶更に近寄ることが出來ない。
さて智深は正面に、李忠は次に、太公はその次に坐つた。智深はこれまでのことをかいつまんで物語り、
「日が暮れたので、此邸へ泊つたが、兄弟分に逢はうなんて思ひがけないことだつた。ところが私が擲つたあの男は、ありや何者だい。又お前はどうして此處にゐるんだ。」

李「大哥と渭州の茶屋で史進と三人が別れてから、翌日大哥が鄭屠を打殺したことを聞いたんで、そこで史進と相談しようと思つたが、どこにゐるのか皆目分らない。そのうちにこつちも捕縛するとのことで、慌てゝ逃げ出して、此山下へ來たんです。すると先程大哥に打たれた男ですが、ありや桃花山の山寨に立籠つてゐる小覇王周通と云ふもの、丁度山から下りて來て、私に打つてかゝつたから、苦もなく負かしたところが、私を山寨の主と奉つて、第一の座を讓つてくれたので、つい此處で山賊をしてゐる始末です。」
魯「兄弟分が此處にゐるのなら、もう劉太公の聟入話はやめて貰ひたい。太公にはたつた一人の娘で、これから太公も世話にならうとするのだに、連れられてしまつては、老人が可哀想だ。もうよしにしてくれ。」
太公は此話を聞いて大喜び、酒と肴とを並べて兩人をもてなす。手下の小賊どもには各々に饅頭二つ、肉二切と大杯の盞に一杯づゝ飲み食ひさせた。太公よりは結納を返却する。
魯「おい兄弟分、あの男に代つて受取つて置いてくれ。萬事お前が旨くやつてくれ。賴むぜ。」
李「其事は承知しました。どうです、大哥、山寨へ來て下さらないか。劉太公にも來て貰ひたいな。」
そこで太公は下男に轎を用意させる。魯智深は禪杖戒刀と荷物とを取つてそれに乘る。李忠は馬上に、太公も一挺の小轎に乘つて、夜明に一同山に登つた。
山寨に着くと、李忠は智深、太公を寨内の聚義廳に案内して、周通を呼びにやる。周通は和尚を見

るなり、
「大哥は仇も討つてくれないで、どうして彼奴を山寨に連れて來て、上座に坐らせるのかい。」
李「兄弟、和尚を知つてゐるかい。」
周「知つてゐりや擲られやしないさ。」
李忠は笑つた。
「いつもお前に話す、拳固三つで鎭關西を張り殺したと云ふ其人だよ。」
周通は頭を抱へて、
「ひやあ、それは。」
と、云つたまゝ、身を蹴へして禮をする。魯智深も挨拶して、
「まア勘辨しておくんなさい。」
三人は座して、太公は正面に立つてゐる。
魯「兄弟達まア聞いてくれ。劉太公のことはお前知るまいが、あの娘さんは一粒種だから、太公の身の上萬端を娘さんが世話して、先祖の祭を絶やさぬやうにしなけりやならないのだ。それをお前が貰ふと、此老人の居處が無くなるのだから、此婚禮は太公にしては望みでない。どうだ此事は俺に任せて、一切水に流してくれないか。善いのを外から貰つたらいゝぢやないか。結納の金子と反物も此處に返しに持つて來たが、どうだ。さうして貰へまいかな。」

周「へい、大哥の仰る通りに致しませう。もうあの家へは往きますまい。」
魯「男だ、またひつくり返つちやいけないぜ。」
周「決して間違ひはございません。」
太公は厚く禮を述べて、結納を還して、下山して邸へと立戻つた。
李忠と周通とは牛を殺し馬を料理して宴を張り、さま〳〵に魯智深をもてなす。一日、魯智深を案内して、そこゝの風景を一見せしめたが、まことに此桃花山は天險の地、四方は斷崖絶壁唯一筋の路で上り下りするのみで、まはりは一面に草茫々と生えてゐる。
「こりや善い處だ。」
と、智深は此處に數日間滯在したが、元來李忠、周通兩人は面白くない人物で、頗るけち、ん坊だから、此處を退却することに決した。兩人はさま〳〵と引留めたが、
魯「俺出家の身分だ、泥坊商賣は眞平だよ。」
と、中々承知しない。
兩人「是非とも御出立なら、明日私達が山を下りて、いくらか分捕りして路用を差上げませう。」
翌日、送別の宴を張りて、金銀の酒器を卓上に置いて、杯を擧げようとした途端に、手下のものが、山下に二臺の車を引いて十數人が通行する旨を報じて來た。兩人は多くの手下を引連れて唯兩人だけを魯智深の接待に留め置き、

「大哥、まアゆつくり飲んでゐて下さい。これから一仕事して、大哥の餞別を致しませうから。」
と、山を下つた。魯智深は、
「こいつ等兩人は全く吝い奴等だ。こんなに金銀のものがあるのに、俺にくれないで、他のを取つて來ようとしやアがる。人の褌で相撲を取らうとするのだ。よし來た。今に仰天させてやらうぜ。」
と、二人の手下を呼びつけて酒を注がせ、二杯傾けると、躍り上つて、兩方の拳で其小賊どもを擲り倒し、上帶解いて兩人一つにぐる〳〵卷にして、猿轡をはめる。自分の荷物を開いて、不要の品を投げ棄て、卓上にある金銀の酒器を踏み潰して荷物の中へ包み込み、胸にかけた出家の時の度牒を入れた袋の中に智眞長老からの紹介狀を藏ひ、戒刀を佩き、禪杖を提げ、山寨を出立して、裏山に來て見ると、一望險岨の地である。
「俺が表口から出て行くと、奴等に出喰すだらうから、此草の處からころがり下りよう。」
と、先づ戒刀を包に縛つて轉がり落し、つゞいて禪杖を投げ落し、自分もころ〳〵〳〵と轉がつて落ちたが、別條はなかつた。落ちると、起ち上つて包を探し出し、戒刀を佩き、禪杖を取り、大手を揮つてどん〳〵駈け出した。
話換つて、李忠、周通は山を下つて旅人の一隊を襲つたが、相手もおの〳〵得物を持つてゐる。李忠、周通は鎗をしごき、小賊どもはわつとわめいて進み出で、
「こりや旅人、ものが分つてゐるなら通行稅を出して行け。」

旅人の中にさるものあり、拔身をふりかざして李忠に打つてかゝる。李忠としばし戰つたが勝負がつかぬ。周通怒つて打つてかゝれば、小賊一同も加勢をするに、旅人どもは抵抗し得ないで逃げ出す。逃げ後れたものは總て突き殺された。
山賊どもは荷物、車を奪つて、勝鬨揚げて、ゆるり〳〵と、山寨に還つて見ると、これは如何に、二人の小賊は縛られて一つになつて柱のほとりにゐる。卓上の金銀酒器は一つも見えない。周通は小賊の縛を解いてやり、
「一體魯智深はどこへ往つた。」
小「私どもを張り倒して縛つた上、器物を分捕して往つてしまひました。」
周「あの、泥坊坊主はありや惡者だ。まんまとしてやられた。一體どこから逃げ失せたのか。」
と、跡を尋ねて裏山に行くと、草から滑り下りたる痕跡がある。周通はこれを見て、
周「あの糞坊主は、全く劫を經た大泥坊だ。此險岨のところから轉がり下りたのだ。」
李「追ひかけて彼奴を羞かしめてやらう。」
周「そりややめたが善い。もうあとの祭りだ。追ひついたつて取り返しも出來ず、勝負にしたら敵やしない。さうすりや後日に顏合せも出來ない。まアうつちやつて、いつか逢ふこともあらう。それよりか分捕物の山分をして、私とお前とが一分づゝ、殘りの一分は手下にやらう。」
李「あいつを山へ連れて來たんで、えらい損をかけさして濟まなかつたから、此一分は兄弟お前が取

つてくれ。」
周「兄弟の好みだ。そんなことを云はつしやるな。」
と、二人は相變らず桃花山で山賊稼ぎ。
魯智深は桃花山を離れ晝過までひた走りに走つて、腹が減つたが、食事をしたゝめる處がない。思案して、あちこち振向いて見ると、いづくよりか鈴鐸の響が微に聞えて來た。
「こりや好い。寺か何かがあるのだらう。そこを探し當てゝ晝飯にありつかう。」
と、聲をしるべに辿り行つた。

六、瓦官寺の惡魔

魯智深は幾つかの小高いところを通り過ぎると、大きな松林と一筋の山路とを見た。其山路を傳つて半里も行かぬうちに、頭を上げて見ると、荒れ果てた一座の寺があつて、風につれて鈴が鳴つて響く。山門を見上げると、年古りた一面の紅い額が懸つて、金色の四字は黑くなつてゐるが瓦官之寺と書いてある。四五十歩行くと、一條の石橋があつたので、それを渡つて、知客寮へと向つた。寮には大門もなく、あたりの壁は皆落ちてゐる。
「こりやどうして、このやうな大きな寺がこんなに荒れてゐるのだらう。」
と、思ひながら、智深は方丈前にはひつて見ると、滿地はこれ燕の糞だらけ、門は鎖で閉ぢてゐる

が、其鎖の上は一面に蜘蛛の巣が張つてゐる。智深は禪杖を地上に突き立て、
「通りすがりの僧が齋を振舞つて貰はうと參つたのぢや。」
と、頻りに呼ばはつたが、返事をするものがない。臺所口へ廻つて見ると、鍋もなければ、竈も壞れてゐる。智深は携へて來た包を解いて、荒神樣の前へ抛り出し、禪杖を提げて、あちこち探し歩くと、臺所の裏の小屋に幾人かの老僧の、いづれも土氣色した、瘦せこけたのがゐた。
「おい、お前方も分らずやだなア。私がいくら呼んでも返事をしないぢやないか。」
と、智深がわめくと、坊さん達は手を振つて、
「大きな聲を出して下さるな。」
と、云ふ。
魯「わしは旅の僧だ。一膳、飯をよばれたいのだ。何も別段のことぢやないんだ。」
老「私等も三日食べないのだから、どうして貴方にあげられませう。」
魯「私は五臺山から來た僧だ。粥でもいゝ、半杯でも振舞つて貰ひたいもんだ。」
老「活佛のおいでなさる處からおいでになつたお方だから、齋をあげたいんですが、寺中の僧も散つてしまつてゐませんし、一粒の飯もないんです。私等はほんとに三日も食べないんです。」
魯「いゝ加減なことを云ひなさんな。こんな大きな伽藍で飯がないなんてことがあるもんぢやない。」
老「此寺はもとはこんなひどいとこぢやなかつたんです。ところが、一人の雲水坊主が一人の道人を

連れて來て、此處に住ひましたので、此處のあるもの無いものはみんな打毀してしまひました。當寺の僧侶は盡く追ひ出されましたが、私等のやうな老人は行く處もないので、據なく此處にゐるんです。ですから、食べる飯もありません。」

魯「謔吐くない。一人の坊主や道人が何仕出かすもんか。役所へ訴へたらいゝぢやないか。」

老「そりや貴僧は御存知ないからです。役所は此處から遠うございますし、警察でも手のつけやうがないんです。其坊主も道人も手が利いてゐまして、いづれも人殺しや火つけを商賣にする惡人なんです。唯今は方丈の裏に住んでゐます。」

魯「その兩人は何と言ふ名字かね。」

老「坊主の方に崔道成、綽名を生鐵佛と云ひます。道人は丘小乙、飛天夜叉と綽名を云つてゐます。出家とは名ばかり、强盜追剝が出家の皮を被つてゐるんです。」

斯う問答してゐるうちに、一陣の香がぷんと魯智深の鼻を掠めた。禪杖を提げながら、智深は裏の方へ廻ると、土竈に藁の蓋した鍋がかゝつて、湯氣が立騰つてゐる。蓋を取つて見ると粥がぐら〳〵煮立つてゐる。

「三日も飯を食はないなんて、現在これ、こゝに粥を煮てゐるぢやアないか。出家の癖になぜ虛言をつく。」

老僧たちは智深に粥を見つけられたので、こいつアいけないと、碗だの皿だの、鉢も、柄杓も桶も

一切隱してしまふ。智深は餓くつてたまらない。粥を見つけて食べようとしても掬ふものも容れものもない。と見ると、竈の側に漆塗の破食卓があつて、灰や塵に塗みれてゐる。咄嗟の際に智慧が出て、智深は先づ禪杖を立てかけ、草をひきむしつて食卓の上を一拭ひ拭ひ、雙手に鍋を擧げて食卓の上へ粥をどんぶとばかりあける。老僧どもはあなやと駈寄つて粥を食はうとひしめくを、智深に突飛ばされて、引つくりかへるもあれば、逃げ出すもある。智深は手で粥を掬つて二口三口かき込むと、老僧達は、

「私等はほんとに三日食べませんのぢや。今日はやつと外へ往つて米を貰つて來ましたので、粥にして食べようとしたのを、貴方に食べられるとはこりや情ないことです。」

さう聞かされては、智深は食べる勇氣も出ない、其儘もう粥に手をつけないでゐると、不意に外の方で唄を歌ふ聲がする。手を洗つて、禪杖提げながら外の方へと歩き出す途端、壁の破目から一人の道人の姿を見た。頭には黑頭巾、身には布の衣、腰には雜色の帶を締め、脚には麻鞋を穿き、肩に擔いだ天秤棒の一方には、竹籃の中からはみ出してゐる魚の尾と蓮の葉に包んだ肉、一方には一瓶の酒に蓮の葉を蓋にしてゐる。其歌ふ唄、

「お前東に、わしや西に、お前夫なく、わしや嬶持たぬ、嬶ない私は辛抱すれど、お前一人ぢやさぞ淋しかろ。」

老僧たちににじり寄つて手を動かしながら、ひそ〳〵智深に指して、

「あの道人が飛天夜叉丘小乙なんです。」
さう教へられたから智深禪杖を手にして其あとを慕つて行つた。道人は固より智深に跡つけられたとは知らず、走りながら方丈の裏の牆の中へ入る。智深は猶も追ひかけて前面を見ると、槐樹の木の下に卓子を据ゑて、少しばかりの食物を並べ、三つの盞と三組の箸とを置き、そこに肥滿の和尚が坐つてゐる。眉は漆の如く黑く、顏は墨を塗つたやうで、大々した、黑い布袋腹は胸の下から露はれて、其側には若い婦人を引きつけてゐる。道人は竹籃を投げ出して、腰をかける。智深はつと其前に立ちはだかつた。驚いたのは和尚、躍り上つて、
「先生、これは善うこそ。さあお坐り下すつて、一杯召し上れ。」
智深は禪杖を提げながら、
「なぜお前達は此寺を荒したのかい。」
和「まアお坐り下さい。これにはお話がございます。」
智深は眼をむいて、
「さあ話せ、さあ話せ。」
和「此寺はいゝ寺で、田地も澤山で、坊さんも大へん多うございましたが、年老つた坊主どもが酒は飲み放題、錢を費つて、女狂ひ、長老も手がつけられないばかりか、あべこべに出されてしまつたんです。そのために寺は荒廢します。坊さん達はちり〳〵ばら〳〵になります、田地は賣拂つてしまひ

ます。私は此道人と近頃此處に住居まして、山内の整理やら、本堂庫裡の修繕やらを致さうとして居るんです。」
魯「其女は一體どう云ふ人で、なぜ又此處で酒を飲んでゐるんだ。」
和「どうか先生、お聽き下さい。このお孃さんは此前の村の王有金さんの娘御です。父御は此寺の檀越でしたが、財產を無くなされて、近頃はとんとみじめな有樣なのです。それに一家はみんな死絕えて、其上御亭主は御病氣、そこで此寺へ見えられて米を貸してくれとのお話、施主檀越のことですから、御酒を出しておもてなしを致して居りますので、別段のことではございません。先生どうかあの年寄りの畜生どもの申すことなんかは、お取上げ下さいますな。」
智深はかう說かれて、又如何にも恭しいのを見ると、
「怪しからぬことだ。あの年寄り坊主め、俺を馬鹿にしやアがつたな。」
と、又もや臺所へ來ると、老僧達は、少しばかりの粥を食べて、そこに蹲踞つてゐたが智深がかんかんに怒つて、一人の老僧を指して、
「やい、貴樣はよくも此寺を荒して置きながら、俺に虛言を吐いたな。」
と、云ふので、一同は、
「先生、あいつの云ふことを眞正になすつちやいけません。現に、一人の女子を圍つて居ます。貴方は戒刀禪杖をお持ちになつてゐますが、あいつらは得物がないので、貴方に手向はなかつたのです。

まア信用なさらなけりや、もう一度行つてどうするか御覽なさいまし。先生まアお考へなすつて下さい。彼奴達は酒を飲み肉を食ひますが、私等は粥でさへ啜られません。今も今とて貴方に食べられたので心配したほどなんです。」

智「ふん、聞いて見りや尤もだ。」

と、又禪杖を提げて、方丈の裏に行つて見ると、これはしたり門が閉つてゐる。智深ははつたと怒り、唯一蹴りに蹴り飛ばせば、門はがらりと開く。躍り入つて見ると、生鐵佛崔道成は一口の朴刀を取つて、槐樹の下に躍り出て、智深目がけて突いて來る。

智深は見るより、大喝一聲、手にせる禪杖を水車の如く廻はして崔道成に打つてかゝる。固より道成は智深の敵でない、受太刀となつて、しどろもどろ、當り兼ねて逃げんとする。斯くと見たる丘道人は、智深の背から一口の朴刀取つて、大股に忍び寄る。智深は背後に跫音ありと聞いたが振返つては見ない、人影の射すと見て、さては暗擊するものありと知つて、一聲えいと叫ぶと、崔道成はあわてふためき、禪杖に打たれては一大事と一散に飛退いた。智深は身を廻すと、三人は此に三巴の形、崔道成と丘道人とは左右から打つてかゝる。智深は空服の上に、朝來長途の旅、殊に新手を加へた敵勢に敵し兼ね、禪杖を引いて此處を逃出す。兩人は朴刀を揮ひ〳〵山門外まで追ひ駈ける。智深此處にても暫し戰つたが、又一目散に駈出す。兩人は石橋のほとりまで追ひすがつて、暫し欄杆に休んで、もう追はうとはしない。智深は遙か遠くまで落延びて、氣も靜まつたので一思案、

「已荷物を荒神樣の前へ置いて來たが、逃げ出して來たんで、取つて來なかつた。旅費はなし、腹は減る。こりやどうしたら善からう。立戻りや敵はない、二人に一人だからなア。うつかりすりや命は奉納と來らア。」

足に任せて前方へと歩いたが、一歩は一歩より重く、幾里か來るうちに、向うの方に一叢の深林がある。見ると赤松の林である。

「こいつアどえらい陰氣な森だ。」

魯智深は其赤松の林を見ると、木蔭からひよつくり出て來た一人の男、あちこち見廻してゐたが、ペッと唾を吐きかけて、又森の中へともぐり込む。

「こりやきつとあん畜生は追剝で、こゝでいゝ鴨を待つてゐるんだな。俺が出家なのを見て、まうからないと思つて、唾を吐いて失せやアがつたんだ。彼奴は運惡く俺に出喰したが、俺も腹の蟲が收まらない、彼奴の着物を剝いで、酒代にしてやらう。」

と、禪杖提げて松林のほとりへ躍り入つて、

「やい、森の中の追剝野郎、とつとと出て來い。」

と、呼ばはつた。彼の男は林の中でそれを聞くと、から〳〵〳〵と大笑ひ。

「こつちが悄氣てゐるのを向うから來ておびき出さうとしてくれるのかい。」

と、林の中から朴刀を取つて、ひらりと躍り出で、
「この葉坊主め、命を棄てに來たのか、俺の方では勘辨してゐたんだに。」
魯「俺樣を拜ませてやらう。」
禪杖を廻して、突いてかゝるを、彼も朴刀ひねつて切つてかゝつたが、進まんとして、肚の中で、
「此和尙の聲音はどうやら聞いたやうだ。」
そこで、
「おい和尙、お前の聲には聞き覺えがある、名を名乘らつしやい。」
魯「三百べんも戰つたら、其時は聞かせてやらう。」
彼男は腹を立てゝ、朴刀打振つて禪杖と鎬を削る。戰ふことやゝしばし、
「こいつアよつぽどいける和尙だわい。」
と、心の中でほめそやし、又四五合戰つたが、
「しばらく其禪杖を收めてくれ、話がある。」
と、兩人ともに遠退いた。
「おい眞正に名乘つてくれ。どうも聞いたやうな聲だ。」
と、云ふので、智深は姓名を名乘ると、彼は朴刀を棄てゝ挨拶する。
「史進が分りますか。」

魯「おや史太郎かい。」
兩人互に挨拶を取交し、森の中でそれ〴〵座に着く。
魯「史太郎、渭州で別れてから、どこにござつた。」
史「あの日、茶屋でお別れしてから、翌日大哥が鄭屠を打殺して、逃げ去つたと聞いたんです。ところで大哥も、私も金老人までも召捕るとのことを耳にしたので、渭州を出立し、師匠の王進殿を尋ねに延州へ行つたが、こゝでも廻り合はず、北京にしばらく滯在してゐるうちに、路用を費ひ果したので、一寸旅費を稼がうとしたが、大哥に逢はうとは、こりや思ひがけなかつた。時に大哥はどうして出家にはおなんなすつた。」
問はれて、魯智深は一部始終の物語をする。
史「大哥は空腹からう、乾肉と燒餅がありますから、お上んなさい。」
と、智深に食べさせる。
史「大哥の荷物が寺に殘してありや、一所に探しに行きませう。ぐづ〴〵吐かして返さなけりや、殺して片附けるまでゝす。」
腹も滿くなつたから、兩人は獲物を携へて瓦官寺へと取つて返すと、崔道成と丘小乙とはまだ橋の上に腰かけてゐる。智深は大喝して、
「野郎ども來い。命のやり取りしよう。」

と、云ふと、崔和尚は笑つて、
「負けた奴が又來て猪口才なことを申すな。」
智深は怒つて、禪杖を振廻して橋の上へと駈け上る。生鐵佛は朴刀で橋から迎へ戰ふ。智深には史進の助太刀はあり、滿腹の勢で、精神氣力はいよ〳〵熾である。八九合戰ふと、崔道成は怯んで逃げ出さうとするに、飛天夜叉は和尚危しと見て、朴刀ひらめかして加勢をする。斯くと見たる史進は木蔭から飛び出し、
「兩人逃げるな。」
と、大喝一聲、被つた笠を刎ねのけ、朴刀振りかざして、丘小乙に切つてかゝる。四人は二組となつて、追ひつ追はれつ、してゐるうちに、智深は隙ありと見て、
「えい。」
と、一聲、禪杖振つて、生鐵佛を橋より下へ打つて落す。丘小乙は和尚倒れたりと見て、勇氣は沮喪し、一散に逃げ出さうとするのを史進は、
「やい、野郎どこへ逃げる。」
と、踏み入つて、朴刀で一太刀浴びせる。道人ははつたとばかり轉倒するを、史進は其儘つけ入つて、ぐさと刺す。智深は橋を駈け下りて、崔道成をなぐり、流石の兩惡魔も一塊の肉と化する。智深と史進とは其屍を縛つて谷底へ突き落し、寺に踏み込んで見ると、憐むべし老和尚達は智深の敗北し

たのを見て惡魔どもに殺されるを恐れて一同首を縊つて死んでしまつてゐる。方丈裏の門内に入ると、かどはかされて來た女も井戸の中へ身を投げて死んでゐる始末。そここゝと尋ねて見たが、空寺人なく寂莫としてゐる。荷物は如何にと尋ねると、もとの儘で、誰も開けた樣子がない。智深はそれを背中に負ひ、猶も內部に尋ねて行くと、床の上に三四個の衣服の包がある。史進は開けて見ると、衣服ばかりで、唯少しばかりの金銀がある。入用のものだけ一包として背に負ひ、厨に行くと、酒も肉もあるので、兩人は飽くまで飲食し、竈の前の薪を二本縛つて、爐中をかき廻し、火を點けて、先づ裏の小屋に付火をする。つゞいて門前に出て、幾つかの松明作つて佛殿の裏簷へと放ける。折から風烈しく、陣一陣と吹いて見る〳〵うちに一團の火焰を噴き、炎は逆卷き渦卷きて、そここゝに一面の猛火。兩人ひとしく之を打見てゐると、あたりの團々の火は一流れとなつて、瞬く間に瓦官寺は火の海となつた。
「好い處だが、いつまでも足を止める場所ではない。さあ出かけよう。」
と、兩人は足に任せて行くこと一夜、夜はほの〴〵と明け初めて、行く手に一叢の人家が見える。兩人は村に入つて、丸木橋のほとりの居酒屋に飛び込むなり、先づ酒を飲み、肉を買はせ、米を炊かせて、したたかに飲み食ひし、いろ〳〵と前途の相談をする。
魯「これからどこへ行く積りだい。」
史「さあ少華山へ行つて、朱武等三人の仲間となつて、暫く時節を待たう。」

魯「うん、それもよからう。」

と、智深は包を明けて、史進に幾分の金銀を分けてやり、此家の勘定をすませて、村を外れて行くこと五六里、此に追分の辻があるので、

魯「兄弟暫く別れよう。和は東京へ行くが見送は無用だ。兄弟、お前は華州へ行くんだから、此路を行つたらよからう。いつか又逢はうぜ。いゝついでがあつたら便をしておくんなさい。」

史進は魯智深に別れを告げ、西と東とに手を分つた。

魯智深は行くこと八九日、早くも東京の城内へと到着した。如何にも市中は雑踏して賑やかである。注意深く、道行く人に、

魯「大相國寺へはどう行きますか。」

と、尋ねる。

「あの向うの橋を渡ると、そこです。」

との返事に、智深は禪杖を提げながら、寺に入り、東西廊下を見て、知客寮で案内を乞ふと、程なく知客僧が出て來たが、人相の悪いのが鐵禪杖を杖き、戒刀を横たへ、大包を背負つてゐるので、心中五分の怖を抱きながら、

「どちらからおいでなすつた。」

智深は包と禪杖とをそこに置いて、

魯「私は五臺山から來ました。師匠の眞長老の手紙を持つてゐますが、此處の清大師長老のお世話になつて役僧にさせて貰はうとするのです。」

「眞大師長老の御書面がござるなら、方丈へ御案内しませう。」

と、智深を方丈へ案内する。智深は包を解いて其中から手紙を取出す。

「御坊はどうも禮式を御存じないやうだ。長老がおいでだつたら、戒刀を取り去り、七條の座具と香とを取り出して、禮拜なさらなければいけませんぜ。」

智「そんならさうと早くから云つてくれゝばいゝのに。」

と、先づ戒刀を取り去り、包の中から一炷の香と七條の座具とを取り出したが、さてどうしていゝか分らない。知客は袈裟を被せ、座具を鋪かせてゐるうちに、長老智清禪師が出て來る。知客は進み出で、

「この僧は五臺山から參りましたので、眞禪師の御書面がこゝにございます。」

長老は智眞禪師と聞いて、

「禪師殿からは久しく便がなかつたわい。」

と、如何にもなつかしさう。知客は智深を呼んで、

「さあ早く長老殿を禮拜なさい。」

智深は香を取つたが、どこへどうしていゝか分らない。知客は可笑さを忍へて、香爐を指してやる。智深は長老を見て無闇にお辭儀をするから、知客はもういゝと推し止める。長老は書面を披いて見ると、事細に智深出家のいはれ、五臺山を下りて、お寺に身を投ずるわけを書いて、懇々との依頼狀。末には長い將來には佛果を得るであらうと書いてある。長老は讀み畢つて、

「遠來の御坊、僧堂へ行つて休んで、齋を食べさつしやい。」

智深は御禮を云つて、七條の座具を引張り、包を提げ、禪杖と戒刀とを持つて、稚兒の案内で引き下つた。

智清長老は役僧一同を方丈に會して、さて云ふやう、

長「さて各々、智眞禪師もまことに物が分らな過ぎるなう。今度此へ來た僧は、もと經略府の將校であつたが、人殺しをしたので、頭を丸めて出家となつたのださうだが、二度も寺内を騒がしたので、其儘には棄て置き難く、私のところへ何分頼むと寄來されたのぢや。斷るには斷れず、置いて置けば、寺内の法度を破る恐れがある。さあどうしようなう。」

知客は言下に、

「あの僧を見ますと、全く出家人ではございません。あのやうなものは當山内には置けません。」

と、反對すると、都寺は、

「私が考へまするは、酸棗門の外にある屋敷裏にある、あの菜園ですが、あすこは日傭取や門外にゐ

る破落戸に亂暴されて困つてゐます。年寄りの和尚が監督して居りますが、何の役にも立ちません。魯智深をあすこへおやりになつたら善うございませう。」

と、一案を提出した。

長「こりや妙案ぢや。彼の食事が濟んだら呼んで來て貰ひたい。」

暫くして侍者は、魯智深を連れて來る。

長「眞大師がお前を推薦して、此寺の役僧としてくれとのことぢや、就ては當山の大菜園が酸棗門外、嶽司の隣にあるから、あすこへ往つて監理してくれ。毎日十荷づつの野菜を小作人に持たせてくれゝば、其餘はお前の收得ぢや。」

魯「師匠眞長老は私を此お寺の役僧にして貰へとお寄越しなすつたのです。それに都寺とも、監寺ともしないで、菜園の管理人にしようとは、そりやどうしてです。」

首座「そりやお前さんが善く分らないからだ。新規に來て、まだ少しも功勞のないのに、どうして都寺となることが出來ませう。菜園の管理人も又役僧ですぜ。」

魯「菜園の管理は御免だ。都寺か監寺にしておくんなさい。」

知客「まア お聞き。寺の役僧にはそれ〴〵役目があります。私のやうな知客は往來の役人や僧侶の應接係。維那、侍者、書記、首座は清淨の職で、容易になれません。都寺、監寺、院主は寺の財產を管理する役です。お前さんは新米だから、其やうな上の職にはなれないんですよ。藏を管するものは藏

主、殿を管するものは殿主、閣を管するものは閣主、勸化をつとめるものは化主、浴堂を支配するものは浴主、いづれも中の職です。塔の管理が塔頭、食事の監督が飯頭、茶の管理が茶頭、厠の支配が淨頭、菜園の管理人が菜頭、皆末の職です。一年管理して功績があがれば、塔頭に上せ、又一年そこで成績があると浴主、一年經て功があると、監寺となるのです。」

斯う說き示されたので、

魯「さうなら、又出世の時節もあるから、まア明日はそこへ行きませう。」

淸長老は智深の承知したのを見て、方丈內で休ませ、役目の相談をし、揭示文を書いて、菜園の屋敷へ人を遣つて、それを掛けさせ、明日事務の引繼ぎをすることゝする。其夜はそれですんで、翌日は早く淸長老から菜園の管理證を智深に渡し、智深はそれを受取つて、長老に別を告げ、包を背に、戒刀を腰に、禪杖を手にして、兩人の見送り僧とともに酸棗門外の屋敷に到着した。

此菜園附近には二三十人の打つ、飲むと云ふ破落戶がゐて、平常菜園の野菜を盜んで、それで生活してゐる。今度屋敷の門前に揭示が出てゐるので、見ると、大相國寺から、魯智深と云ふものを此處の住持となし、明日から其管理をさせる、自今無用のものは入るべからずと書いてある。無賴の仲間は之を見るより、一同で相談を始めた。

「やい今度魯智深と云ふづくにふが大相國寺から來て、此菜園を取締るんだとよ。へん、ちやんちやら可笑いや。どうでい、一騷ぎおつ始めて、其づくにふを取つちめて、降參させようぢやないか。」

すると、

「待ちねえ〳〵、もつと旨い手段があらア。其づくにふは俺等を知らねえから、喧嘩をやつたつて始まらねえ。それよか、其奴の來た時、肥溜の處へ連れて往つて、お芽出たうございます。善く入らつしやいましたと祝を云ふ風をして、油斷させて、其奴の足を掬つて肥溜の中へ、どんぶりことやらかすのだ。どうだい名案だらう。」

と、さもしたり顏に云ふものがあつた。一同は、

「そいつあいゝや。」

と、此處で商議一決して、魯智深の來るのを待ち受ける。

さうとは知らず、魯智深は屋敷の中に入つて包や行李を下し、禪杖を立てかけ、戒刀を錠へ掛けた。幾人かの小作人は祝ひを云ひに來る。あるだけの錠を智深に引渡す。送つて來た兩人の和尙は、もとの住持の老和尙とともに別れを告げて寺へと戻る。

魯智深は菜園へ出て、あちこち見廻してゐると、二三十人の破落戶が果物や酒を携へながら、うれしさうにはしやぎながらやつて來た。

「和尙さま、おいでなさいまし、私等此御近所のものですが、和尙樣が此處の住持とおなりなすつたと聞いて、お祝ひに參りやした。」

魯智深は計とは神ならぬ身の知る由もなく、肥溜間近く歩み寄ると、一同進み出で、いきなり

一人は智深の左足を、一人は右足をしつかと捉へて、えいとばかり投げ出さうとかゝつた。

七、白虎堂の難

酸棗門外に住む潑皮、破落戸の仲間には、二人の親分があつた。一人を町の古鼠張三と云ひ、一人を青大將の李四と稱したが、此二人が一行の先に立つて智深の方へと近づいて來たが肥溜のそばまで來ると、ぴたりと足を止めて、

「和尚樣、お目出たうごぜえやす。」

と、一同揃つて祝を述べるので、智深も其方へと歩み寄つて、

「おい、お前達は近所の衆なら屋敷の中へ來たらいゝだらう。」

張三、李四は地べたにぴたりと坐つて、お辭儀をして、和尚が起してくれるのを待つてゐる。智深は樣子を見て早くも疑ひの心を生じた。

「こいつらは三人や四人ぢやない上に、俺の方にやつて來ないところを見ると、俺を倒さうとするのぢやあるまいか。こいつら虎の鬚を拔かうなんて、猪口才千萬。よしきた、俺の方から行つて、腕つこぶしを見せてやらう。」

と、大股で、一同の面前に近づいた。張三、李四、

「あつしども一同で旦那を拜みに參りやした。」

と、云ひながら、近よると、見るまに、一人は智深の左足を、一人は右の足を捉へようとする。智深は彼等の手を働かせるを待たず、右足は素早く、ぽんと蹴つて、李四は肥溜の中へどんぶりこ、張三は逃げようとするを、逃がしもやらず、左脚は早くも颺がつて、兩人ともに肥溜の中で大もがき。殘る破落戸一同は此體を見てあつとばかりに驚いて、右往左往に逃げ去らうとする。大喝一聲、雷の吼ゆるが如く、

「やい待て。一人逃げれば、一人を蹴込むぞ。二人逃げれば、二人とも蹴込むぞ。」

斯う吐鳴られては、もう一歩も動くことはならぬ。蹴込まれた張三、李四は、肥溜の中から頭を上げたが、この溜は底なしほどの深さで、兩人ともに滿身の黃金佛、頭髮には蚍蟲がうよ〳〵してゐる始末。

「和尚樣、お許し下さい。」

智深は聲を荒らゝげ、

「やい潑皮ども、早くあの間抜野郎を引上げてやれ。貴樣たちは許して遣はすぞ。」

兩人は池の水で身體の洗濯を始める。一同の中から衣物を脫いで着せる。

魯「さあみんな、屋敷の中へ來い。話して聞かせることがある。」

と、屋敷に入ると、中央にどつかと坐り、一同をぐつとねめ廻し、

「野郎ども、俺を騙さうなんて太い奴だ。一體手前達は、どこから此處へうせて、俺をてうさい坊と

しようとしたのだ。」
張三、李四を初めとして、一同は膝をつき、
「へい〳〵私どもはもとから此邊に居りまして、博奕で渡世して居りますやうなけちな奴でごぜえやす。こゝの菜園は私どもの米櫃でごぜえやすので、大相國寺では度々金を出して、私どもをどうかしようとなさいますが、どうとも出來ねえのでごぜえやす。旦那はどこからおいでなせえやしたか、このやうな腕利きの方は相國寺にはごぜえやせんや。今日から私らは、なんでも云ふことをお聞き申しやす。」
魯「俺は關西种安府老种經略相公幕下の將校ぢやが、餘り人殺しをしたので、出家をして、五臺山から此處へ來たのだ。俺の俗姓は魯法、名は智深と云ふんだ。手前達二三十人は片手にも足りないや。千軍萬馬の中でも俺は一人で飛込んで切りまくるんだぞ。」
一同は唯へい〳〵云つて、丁寧にお辭儀をして立去つた。翌日になると、ごろつき連は相談して、些ばかりの錢を驅集め、酒を十瓶と豚一匹を料理し、智深を招待するため、屋敷の中へ、それを並べて、智深を中央に据ゑ、一同座定まつて、宴會を開いた。
魯「どうしてこんなに手前達に金を費はせるのだい。」
一同「旦那が此處においで下すつたのは、私どもの仕合せです。どうか旦那私どもの親分になつてくんなせえまし。」

さう聞くと、智深は喜んで、杯も大分廻つて來た。歌ふものがあれば話をするものがある。手を拍つのもあれば、笑ふのもある。いやもう大騒ぎ。すると、鴉の啼く聲がカア〳〵とけたゝましく聞えた。一同はそれを聞くと、
「赤い口は空へ、白い舌は地の中へ。」
と叫んだ。
魯「そりや、何だい、その喧しく云ふのは。」
一同「鴉が啼くので、物爭ひがあるといけませんから。」
と、云ふ。
魯「どこでそんなことを云ふのかい。」
畑の作男が笑ひながら、
「垣根の角にある楊の上に、近頃鴉が巣を作つたので、朝から晩まで喧しく云ふのだよ。」
一同「そんなら梯子をかけて、その巣を取つたら善からう。」
すると、其中の幾人かゞ、
「私どもが行つて取つて來よう。」
智深も酒の上の機嫌で、おもてへ出る。如何にも楊の木の上に鴉の巣がある。
一同「梯子をかけて、上つて行つて取つてしまつたら、耳が靜かになるだらう。」

李四は、
「よし來た。俺が木登りしよう。梯子はいらねえや。」
と、登らうとする。智深は木の方を見てゐたが、根元につと立寄り、直綴を脱ぎ棄てると、右手を下に、身體を曲げて、左手で、しつかと木の上部を把らへ、腰をひねつて、うんと一息、見る〳〵楊の樹は根ごと、みり〳〵と拔ける。驚いたのは、潑皮連中、一同地の上に額いて、
「和尚樣はこりや唯人ぢやねえや。全く羅漢樣だ、五十人力、百人力がなくつちや拔けることぢやねえ。」
魯「こんなこた朝飯前さ。明日は俺の藝を見せてやらう。」
其日は潑皮連中も一同打連れ立つて歸つたが、翌日から二三十人の破落戸は、ひたすら智深に敬服して、日毎に酒や肉を持つて來て、智深の拳を使つて武を演ずるのを見物した。斯くて數日を過ぎたが、智深、心に思ふには、
「毎日彼奴等のものを大分飲食したから、今日は此方で返禮じてやらう。」
と、畑男に云ひつけて、城内から果物と、二三荷の酒と、一匹の豚と一頭の羊とを購はせた。時は三月の末つ方で、天氣は暑い。
魯「おう暑い日だ。」
と、畑男に槐樹の木蔭に蒲の蓆を布かせ、潑皮一同を招き、圓くなつて大酒盛を始めた。浪々と注

いだ大碗の酒と大切に切つた肉とで、鰐腹飲食する。それがすむと、又果物で酒を飲んで、一座は銘酊した。
一同「旦那、此間から力藝は拜見しやしたが、旦那の打物取つての藝當は、まだ見やせんぜ。一つそいつをお見せして貰えていもんです。」
魯「尤だ。よし來た。」
と、智深は部屋の中から取出した禪杖、長さは五尺、重さは六十二斤。一同は、それを見ると、魂消る。
「こいつは大變だ。兩腕に水牛ぐれえの力がなくつちや使ひ切れんや。」
智深はそれを取るなり、風を切つて、ぶん〳〵と振廻はす。滿身に一點の隙間がない。一同はやんややんやとほめそやす。智深は興に乘じて、前後左右縱横無盡に振つて〳〵振廻はして居ると、垣の外から之を覗いてゐた一人の武家が、
「旨い、善く使ふ。」
と、喝采した。それ聽いて、智深は手をとゞめて、そなたを見ると、垣根の破れたほとりに、一人の官人が立つてゐた。其打扮は、頭に青紗の、角を抓んだ頭巾を戴き、後頭には二筋の白玉の環をかけ、身には綠の羅に、團花の模樣をつけた陣羽織を着け、腰には一條の中高になつた龜甲の銀帶を締め、足には爪先が瓜を伏せたやうな儀式樣の黑靴を穿ち、手には西川名産の疊み扇を持ち、生れ得

て英雄の相貌、身の丈八尺ばかり、年の頃は三十四五にもならうか。
「やあこゝの和尚殿は實に美事の腕前で、打物取つては、如何にも上手であるわい。」
と、感嘆の聲を洩らした。それを聞いた潑皮一同は、
「あの先生があれほどに賞めてるんだ。ほんとにこいつア名人に違ひねえや。」
魯「あの武家は、ありや誰だ。」
一同「あの方ア、八十萬近衛隊の槍棒の師範で林武師さん、名を林冲と云ひなさるんです。」
魯「おい、こちらへお通し申せ、お目にかゝらう。」
と、云ふを待たず、林師範は垣を跳り越えて、入つて來た。兩人は槐樹の下でお互に初對面の挨拶をする。
林「和尚殿は、どちらの方で、何と仰せられます。」
魯「私は關西の魯達と云ふもんですが、澤山人殺しをしましたもので、出家をしたのです。まだ若年の折、都に參つて御尊父林提轄にお目にかゝつたことがあります。」
林冲は喜んで、此處で義を結び、智深を兄とした。
魯「師範は今日どうして、此處へおいでなすつた。」
林「恰度家内と一緒に御近所の嶽廟へ願かけの禮參りに來ましたが、此處で棒を使ふ音がしますので、つい見物が致したく、家内を小間使と一所に廟へ燒香に遣りました。ところが計らずも先生に逢つた

のは、仕合せでした。」
魯「私は此里へ參つたもの、一向知人がござらぬところへ、此處にゐる大哥連が毎日來てくれるし、又師範と兄弟の義を結んで、いやもう至極結構なことです。」
畑男を呼んで、新に酒を持つて來させて、三杯ほど飲んだところへ、慌しく顏を紅くして、垣のほとりから、叫んだのは、林冲の妻の小間使錦兒であつた。
「旦那さま、そこで御ゆつくりなすつちやいけません。奥樣が社の中で、云合ひをなすつていらつしやいます。」
それを聞いて、林冲は忙しく、
「どこにゐるのかえ。」
小「五嶽樓の下で不良少年が、奥樣をつかまへて放しません。」
林冲は慌しく、
「又參つてお目にかゝりませう。御免なさい。」
とばかり、智深に別れを告げ、又垣の破れから、跳り出て、小間使と嶽廟の中へ駈けつけ、五嶽樓に躍り入ると、そこに數人のものどもが、彈弓、吹矢筒、糯竿を持つて欄干のそばにゐる。階段の上には少年が獨り背向になつて、林冲の妻を捉へて、
「貴女、さあ二階へお上んなさい。お話したいことがあります。」

と、云ふ、林冲の妻は顏を眞紅にして、
「何ですつて、此太平の御世に、夫のあるものに、どうして、そんな戯談をなさいます。」
林冲はつか〳〵と其うしろへ近づき、若者の肩をひつつかみ、
「夫のある女にからかふなんて、太い野郎だ。」
と、拳を固めて、打倒さんとして、見ると、こは如何に、己れの長官たる、高太尉の養子高若殿である。かの成上りもの〻高太尉には實子がないので、弟高三郎の子を迎へて、養子とし、可愛がつた。然るに彼は都にゐて、勢力を頼み、專ら人の妻女を姦するを樂しみとしたが、彼の權勢を恐れて、誰一人云ひ爭ふものもなく、唯々彼を出齒高と呼んでゐた。林冲はそれを見ると、振上げた拳が自然にぐにやりとなつた。
高「林冲、お前の關係したことぢやないから、いらぬ世話を燒くない。」
若者は固より此女を林冲の妻とは知らぬ。知つてゐたら、まさかこんなことをすることもなからう。林冲が手を動かさないので、彼は林冲を叱りつけた。多勢の取卷連は、此いきさつを見て、一同に群り來て、
「まア師範、御勘辨なさい。若樣は御存知なかつたのですから、つい失禮をなすつたんです。」
と、林冲をなだめる。林冲はむしやくしやとして、若者をはつたと睨みつける。一同は林冲に詫言を云ひ、若者をすかして、廟の外から馬に騎つて出て行つた。林冲は妻女、小間使を引連れて廊下を

出ると、恰も智深が禪杖を提げ、二三十人の破落戸を率ゐて、大股に廟に入り來るに逢つた。
林「和尙殿、どこへおいでなさる。」
魯「君の助太刀にやつて來たのだ。」
林「高太尉の倅が、家内と知らずに、一寸無禮をしたのです。拙者も彼奴を擲りつけようと思つたんですが、それでは高太尉に對して善くない。昔から官は怖くないが、上役が怖いと云つてる通りで、林冲も太尉の世話を受けてゐるのですから、まア今度は許して大目に見て置いてやりました。」
魯「君は上官だから太尉を怖れるが、私はあんな馬鹿野郎は怖かアない。若し其馬鹿野郎に出喰したなら、この禪杖で三百もどやしつけてやらう。」
林冲は智深が醉つてゐるのを見て、
「貴方の云ふ通りです。拙者もみんながなだめるので、一時許してやつたんです。」
「何か事が出來たら、いつでも私を呼びに來てくれ、君のためなら何でもしよう。」
潑皮連も、智深の醉つてゐるのを見て、介抱しながら、
「旦那、俺達はもう行きませう。また明日逢はうぢやごぜえませんか。」
智深は禪杖を取つて、
「姉さん、御免なさい。笑つちやあいけませんぜ。大哥又明日逢ひませうぜ。」
と、潑皮連と行つてしまふ。林冲は妻女と小間使とを引連れて家路へと就いた。が、歸つて後も不

愉快で堪らなかつた。

高太尉の倅は取巻連を連れて歸つたものゝ、林冲の妻を見たが、林冲に妨げられたので、心中煩悶して、邸に歸つた後も、鬱いで二三日を過した。取巻が伺候に出ても、若殿のいら〳〵してゐるのを見て、いづれも手持無沙汰で歸つてしまふ。其仲間の中に一人の幇間があつて、其名を拔作の富安と呼ばれてゐる。彼奴、此若殿の心中を承知して、唯一人邸へ見舞に參上した。若殿が書齋で、ぼんやり坐つてゐるのを見て、近寄つて、

「若殿、此頃はめつきりお顏の色が惡くつて、何ぢややら面白うなささうな。こりやてつきり、それその、御機嫌の惡いことがございますのでせう。」

高「お前に分るもんかい。」

富「そんなら私めが當てゝ見ませうか。」

高「どうして私が面白くないか、當てゝ見な。」

富「若殿、木が二つでちよんでげせう、如何、お手の筋でございい。」

高は莞爾、

「はゝゝゝ、旨く當てよつた。ぢやが手に入れる方法がないわい。」

富「何でもないことです。一體若殿が林冲をえらいものと怖つておいでになるから、手が出ないんでげせう。ところがそんな御心配は御無用。あの男は幕下の下役で、何でも御用をはい〳〵聽いてゐる仁でげせう。太尉樣に憎まれたら最後、輕くて入墨の上、流罪、重くて死刑。私めによい計略がございます。細工はりう〳〵仕上げを御覽じませ。」

高「私は隨分美しい女を見たが、どうしてあの女が可愛いのか知らん。心が迷つて、ちつとも面白うない。お前が旨くあの女を手に入れてくれるなら褒美はうんと遣はすぞ。」

富「御門下の腹心、陸虞候、陸謙は、林冲と仲善しです。明日、若殿にはそつと陸虞候の奥二階へお成りなさいませ。それで少しばかりの酒肴を用意させて、陸謙に林冲を招待させ、酒を飲ませると、すぐさま樊樓（茶屋の名）へ案内させたがよろしうございます。拙は林冲の家へ參りまして、細君に斯う申しませう、師範殿は、陸謙さんと酒を飲んで居られましたが、急に中氣が起つて昏倒なさいました。早く看病に陸謙さんの家へおいでなさいと。斯う言つて、首尾よく賺して奥二階へ連れて參りませう。女は水性、浮氣者でげす。若殿のあでやかなのを見せて、旨く調子を合せて、持ちかけなさつたら、そこはお腕です。どうにかならないことはございますまい。如何でげす、何と善い工夫ではございませんか。」

聞く高若殿は、

「旨い〳〵、今夜使を遣つて、陸虞候を呼びにやつて、云ひつけよう。」

と、ほめそやした。

陸虞候の家は高太尉の隣の町にある。翌日、陸謙に此話をすると、元來小人の彼、長いものに卷れろ、若殿の御機嫌大事と、友情を棄てゝ顧みなかつた。

林冲は煩悶に日を送つて、町さへも出歩かない。すると、午前十時頃であつたか、門前に人の氣配がして、

「師範は家ですかい。」

と、呼ぶものがある。林冲は出て見ると、これは陸虞候であつた。

林「これは陸さん、どうしておいででした。」

陸「今日はわざ〳〵君に逢ひに來ましたのさ。どうして近頃はとんと町へ來ないんです。」

林「どうも面白くないことがあるんで。」

陸「どうです、一所に出かけて、一杯やつて、其不愉快と言ふやつを一掃しようぢやありませんか。」

林「まア上つて、一つお茶をお上んなさいな。」

と、兩人は茶を飲んでから起上つた。

陸「奥さん、これから御主人と一所に家へ往つて、一杯飲まうと云ふんです。」

林冲の妻は追ひかけて、暖簾のとこまで來て、

「ねえあなた、あんまり召上らないで、早くお歸んなさいまし。」

と、聲をかけた。

林冲は陸謙とは、門を出て、町を散歩したが、

陸「家へ行くことは、やめて、樊樓で飲らうぢやないか。」

と、兩人は樊樓に登つて、とある座敷へ打通り、給仕を呼んで、二瓶の色美い上酒と、珍らしい、果物を取寄せて、杯を傾け、世間話をした。すると林冲はあゝと嘆息をしたので、

陸「君はどうして溜息するのです。」

林「君は知らないが、男子が武藝のあるのに、明君に逢はずに、下らない奴の下にゐるなんて、實に不愉快で溜らない。」

陸「近衞の軍隊には、幾人か師範はあるが、君の手竝に及ぶものはない。太尉も善くそれを承知し居られるから、別に不愉快のこともありますまい。」

そこで、林冲は前日高太尉の養子の一件を話すと、

陸「そりや若殿が君の細君を知らなかつたからでせう。もうそんなことは氣にかけないがいゝです。さあ飲んだらいゝでせう。」

林冲は八九杯を傾けたが、小用がしたくなつたので、起上り、

「手洗に往つて來ます。」

と、樓を下りて、茶屋の表へ出て、東小路に赴き、手洗を濟まして、小路の口を出て來ると、小間使の錦兒にはたと出逢つた。

錦「旦那様、大へんお探し申して居りましたが、此處にいらつしやいましたか。」
林「どうしたのだ。」
錦「旦那様が陸虞候とお出かけになりましてから半時も經たないうちに、一人の男が大急ぎで家に參りまして、奥様に、私は陸謙候の隣家のものですが、お宅の先生と陸謙さんとでお酒を飲んでいらつしやいますと、俄に先生が卒倒なさいましたから、すぐ入らつしやつて下さいましと、斯う申すんです。それで奥様が急にお隣の王のお婆さんに留守をお頼みなさいまして、私と、御一所に其男のあとにつゞいて參りますと、太尉様のお役所の御門前の路次の中の一軒の二階へ案内しますんです。上つて見ますと、卓子の上に少しばかり御酒とお料理とが出てゐますばかりで、旦那様はいらつしやいません。二階を下りようと致しますと、此間、嶽廳で奥様に失禮申上げたあの若者が出て參りまして、奥様まアお坐んなさい。あなたの旦那が來ましたと云ふんです。そこで私は慌て、二階を下りますと、奥様が二階で人殺しと仰しやるのを聞きました。旦那様をお尋ね申しましたが、分りません、恰度藥賣の張さんに出逢ひますと、樊樓の前を通つた時、師範ともう一人とが中で酒を飲んでゐたとの話で、此處へ參りました。さあ旦那様早く往つて上げて下さい。」
林冲は吃驚し、錦兒を棄て置いて、飛ぶが如くに、陸虞候の家に入り、其儘二階へ駈上ると、二階の入口がしつかりと閉つてゐる。中では妻が、
「太平の御世に、どうして、良人あるものを此處へ閉込むんです。」

と、叫ぶと、高が、
「貴女、可憐さうと思つて助けて下さい。如何に氣が強いつたつて、斯う申したら、思ひ直して下さいませう。」
と、云ふのが聞えた。林冲は階段の上に立つて、
「おい、妻や、此處をお開け。」
と、叫んだ。夫の聲と聞き知つた妻女は、一生懸命に戸を開ける。高は驚いて窓をこぢ明け、垣を越えて、いづくともなく逃げ失せる。林冲は二階を探したが、高の姿は見えない。
林「彼奴に汚されはしまいね。」
妻「大丈夫です。」
林冲は手あたり次第に陸虞候の家を打毀して妻を連れて表へ出ると、近所は皆門を閉めてゐる。此處へ尋ねて來た錦兒と一所に三人は家へと歸つた。すぐに林冲は切味のよい短刀を提げ、すぐさま樊樓の前に往つて、陸虞候を尋ねたが、皆目見えない。又、家の門前に來て、一晩待ちあぐんだが、遂に歸つて來なかつたので、すご〳〵と歸宅した。妻女はなだめて、
「私は別段いたづらをされやしませんから、貴郎、無暗なことをなさいますな。」
林「陸謙の畜生め、けしからぬ奴だ。兄弟のやうにしてゐたのに、人を騙かしやアがつた。高の若殿には出喰さなかつたから、彼奴の面を見損なつた。」

妻女はしきりになだめて、一歩なりとも夫を外へ出さないやうにする。陸虞候は太尉の役所に隱れて家には歸らぬ。林冲は三日も待つたが、其顏を見ることが出來なかつた。役所の前の人達は林冲の顏色のよくないのを見たが、誰もそれを問ふものがなかつた。四日目の飯時分に尋ねて來たのは、魯智深、

「師範、近頃は一向に逢ひませんなう。」

林「此頃は一寸暇がなかつたので、御無沙汰してゐましたのに、却つて、茅屋へおいで下すつて恐縮です。何はなくとも一杯差上げる筈ですが、宅には其用意がありませんから、御一所にぶら〳〵町へ出かけて、どこかで一杯やらうぢやありませんか。」

魯「それは結構。」

と、兩人は町へ出かけて、一杯飲んで、又明日の會合を約し、これより林冲は、魯智深と日々酒を酌んで、もうあのことは其儘にうつちやつて置いた。

高若殿はあの日、陸虞候の家の二階で一驚を喫し、墻を飛越えて逃げたものゝ、養父の高太尉には其話をしないで、屋敷の中で、どつと病の床についた。陸虞候と富安は見舞に來たが、若殿の顏色惡しく、快々としてゐるのを見て、

陸「若樣、どうしてさう御不快ですか。」

高「實を云ふとね、林家のあの人を二度とも手に入れることが出來ないばかりか、林冲のためにひど

い目に逢つたので、病氣が重くなつたんだよ。もう半年、いやさ三月も命は持つまい。」

陸富「まアそんなにくよ〳〵なさいますな。私どもが何とか致しませう。林冲めは自分で首を縊つてしまへば、それでいゝんです。わけなく片付きますよ。」

そこへ屋敷の年老つた家令が病氣見舞にやつて來た。兩人は相談して、家令の歸るのを待受けて閑かなところへ連出し、

「若殿の御病氣本腹のためには、一切のことを太尉樣に申上げて、林冲を亡いものにし、細君を引張つて來て、若殿と一所にしたなら、すぐに直りますよ。さうなさらなければ、若殿の命は危うございますぜ。」

家「そりやわけないこつちや。私から今晩太尉樣に申上げよう。」

陸富「私達に善い計略がありますが、貴方の御返事を待ちませう。」

其晩、家令は太尉に向ひ、

「若殿の御病氣は外ではございません。はい、林冲の妻を御戀慕なすつてでございます。はい。」

太「いつ林冲の妻を見たと申すか。」

家「先月の二十八日、嶽廟で御覽遊ばされたさうで、もう一月餘りになります。はい。」

と、陸虞候の計略の一條をも子細に物語つた。

高「林冲の妻のために、あれを見殺しには出來ん。私が考へるに、林冲一人を惜しむと、倅の命は無

くしてしまふ。さうはならんで。」
家「陸虞候と富安とに善い計略がございますさうです。」
高「さうか。二人を呼んで相談しよう。」
家令は早速に陸謙と富安とを呼び入れる。兩人は恭しく挨拶をする。
高「若のことについて、お前達兩人に、善い分別があるか、首尾善う倅を助けたなら、進級させてやるぞ。」
と、云はれて、陸虞候は前に進み出で、
「お惠み深い貴方樣のこと、斯うなすつちや如何でございます。」
と、胸中の祕計を述べると、高俅はほめそやし、
「そりや善からう。明日それを實行致せ。」

林冲は日々魯智深と飲み歩いて、もう其事は忘れてゐた。或日、閻武坊と云ふ町へ來ると、一人の大男の、頭には角を抓んだ頭巾を被り、古い陣羽織を着たのが、手に一口の寶劍を握り、粗末な看板樣の目標を立てゝ、町の眞中で、
「目明きがゐないから、此寶劍も可惜ものだ。」
と、吐鳴つてゐるが、林冲は固より耳にも入れず、魯智深と話しながら行く。すると其男は又あと

について來て、後から、
「こんな好い寶劍も殘念だが、目明きに逢はないわい。」
林冲は氣にも留めず、魯智深との話いよ〳〵佳興に入つてゐた。すると、其男は又々、
「こんな大きな都に武器を見分けるものが一人としてない。」
林冲は、ふとそれを聞くと、うしろを振返つた。その男は其途端にさつと引拔くと、明晃々たる一口の名劍、林冲は何とも知らず、ふと、
「それをお見せ。」
其男は寶劍を差出す。林冲は手に取つて、魯智深と一見し、吃驚して、思はず、
「いゝ刀だ。こりや幾何だ。」
刀賣「三千貫に賣りたいんだが、二千貫にまけませう。」
林「如何にも二千貫のものはあるが、それだけの買手はない。一千貫でよけりや買はう。」
刀「私も金が入用ですから、お前さんが買つておくんなさるなら、五百貫まけませう、一千五百貫で買つておくんなさい。」
林「一千貫なら買はう。」
刀賣はあゝ〳〵と溜息をつき、
「まるでこりや金を鐵にして賣るやうなもんだ。それつきりですぜ。もう負しちやいけませんぜ。」

林「俺について家へ來てくれ、金を拂はう。」
と、云ひながら、振向いて、魯智深に、
「どこかそこいらの茶店で一寸待つてゐて下さいな。すぐ來ますから。」
魯「私は歸つて、又明日お目にかゝらう。」
林冲は智深と別れて、刀賣を連れて家に歸り、代金を支拂つた。
林「この刀はどこから持つて來たのだ。」
刀「先祖傳來のものですが、貧乏したので、仕樣がなく賣つたのです。」
林「お前の先祖とは誰だね。」
刀「話すと恥辱ですから、已めにして置きませう。」
林冲は此上問ひもせず、刀賣は其儘に歸つた。
林冲は刀をひねくり廻しながら、
「實に美事な出來だ。高太尉の屋敷に一口の寶劍があるが、無暗と人には見せない。私も度々見たいと賴んだが、見せてくれない。私も此名劍を手に入れたから、其中に高太尉のと較べて見よう。」
一晩中、手から放さず、夜は壁にかけ、夜の明けるのを待ち兼ねて、又々これを見てゐた。
翌日の晝前十時頃、門前に兩人の雜用人が來て、
「林師範、太尉殿の仰せでございます。貴方が、一古の名刀をお買ひなすつたとのことで、較べたい

から持つて來いとの御命でございます。役所でお待ちになつて居ります。」
林「どこのお喋舌がもう知らせたのかな。」
雜用人は、林冲を促して衣物を着換へさせる。
林冲は刀を手にして兩人に隨つて出て行つた。
林「私は役所でお前達を知らないがなア。」
雜「私どもは近頃參つたものです。」
はやくも役所に到着して、林冲は正廳の前で足をとめる。
雜「太尉殿は裏の室においでゝございます。」
そこで、屏障を通り越して、裏の室へと行つたが、こゝにも太尉はゐない。林冲は又そこで足をとめる。
雜「太尉殿は此奥でお待ちになつておいでゝす。」
二三の門を潛つて一つの處へ來ると、あたりは綠の欄干である。雜用人は其處の前につれて來て、
「師範、此處で少々お待ち下さい。私どもは太尉殿に申上げて參りませう。」
林冲は刀を提げて軒の前に居る。兩人は中へ入つてしまつたが、一向出て來る樣子がない。不思議に思つて、簾を潛つて見ると、上に額が懸つて、青い字で白虎節堂と四字書いてある。
「おや此節堂は軍事の祕密會議をする處だ。こんなところへうつかり入ることは出來ない。」

と、すぐに足を轉じて、もと來し路へ歸らうとする。途端に靴の響き、人の跫音が聞えて、外から入つて來たものがある。誰かと見ると、高太尉である。林冲は刀を持つて進み寄り、挨拶をする。太尉は一喝。

「林冲、呼びもしないのに、どうして、此白虎節堂へは入つて來たか。お前は法度を知つてゐるか。何だ、手に刀を持つてゐるのは、本官を殺さうとするのではないか。此兩三日、お前は刀を持つて邸前をうろ〳〵致すとの報告があつたが、きつと逆心を抱いてゐるのであらう。」

林冲は腰をかゞめ、

「閣下、先程兩人の雜用人をお遣しになつて、林冲に刀を較べよう、持參致せとの御命令でございました。」

高「どこに其雜用人がゐる。」

林「中へ入りました。」

高「い、かげんのことを云ふな。どこの雜用人が奥へはひらう。さあ者ども、此奴をふんじばつてしまへ。」

と、云ひも終らず、そこ〻から二十人餘のものが走り出て、遮二無二寄つてたかつて、林冲を捕へようと、ひしめく。高太尉は怒の聲烈しく、

「お前は近衛の師範で、法度を知らぬ筈はなからう。どうして刀を提げて此節堂へは闖入した。本官

を殺しに參つたのだらう。」

と、あはれ林冲は、たうとう縛めの身となつてしまつた。

八、滄州路の危難

大尉は左右に列んでゐる將校どもに林冲を斬れと命令する。

林冲は頻りに寃罪を叫んだ。

太「其方は何の用があつて節堂に參つたか。現に手には刀を持つてゐるではないか。本官を暗殺するつもりであらうがな。」

林「太尉殿がお呼びにならなけりや參りません。二人の下役は堂の奥へ姿を隱しまして、私だけを此へ置いてきぼりに致したのです。」

太「此役所にはそんな下役は居らぬ。此奴云ふことを聽かぬな。」

と、左右のものに、開封府に引渡し、滕知事に云ひつけ、尋問して、斷罪すべきことを命じ、寶刀をもともゝ〳〵引渡した。左右の役人は旨を奉じて、林冲を引連れて開封府に來ると、知事はまだ府廳にゐたので、役人は林冲を階下に坐らせ、太尉の告訴を報告し、證據の刀をも其前に提出した。

知「林冲、其方は近衛の師範ではないか。規則を無視して、刀を持つて、ことさら節堂には、どうして闖入したのか。死刑に該當する罪科であるぞ。」

林「閣下、御明察下さい。斯く申す林冲は冤罪であります。私は武骨の軍人でありますが、聊か規則は存じて居ります。どうして勝手に節堂に入りませう。先月二十八日ことですが、私は妻を同伴して嶽廟に參詣し、願明を致しました。然るに高太尉の令息が愚妻に無禮を致しますので、私はそれを叱責致しました。其後、陸虞候に私を連れ出させて、酒を飲ませてゐる其間に、富安は愚妻を欺して、陸虞候の家に連れて參り、太尉の令息はまた此處にて無禮を致しましたのを、私は追拂はれましたし、私は陸虞候の家を破壞致しました。二度とも暴行するには至りませんでしたが、之には證人があります。翌日私は一口の刀を買ひますと、今日太尉より兩人の下役を寄來しまして、私に其刀を携へて役所に參れ較べようとのことで、私は其兩人と節堂に參りますと、兩人は堂内へ入ります、思ひがけなく太尉が外から來て、私を計略に陷ようとするのです。閣下、何卒此冤罪をお雪ぎ下さい。」

知事は聽き畢つて、高太尉への返事を認め、首枷手枷をはめて、林冲を獄へ投じた。林冲の留守宅からは食事を差入れる。錢を使ふ。舅の張教頭は、上役に賂し、下役に賴んで、黄白を散らした。此事件擔當の判事は孫定と云ふものであつたが、剛直で、善事を好み、人を助けることを旨としてゐたから、世間では佛樣の孫と諢號してゐたくらゐである。彼は此一件の巨細を察し、いろ〳〵事こまかに役所の中で、其内容を說明した。

「こりや林冲は冤罪です。彼をお助けなさい。」

知「彼はあのやうな事件を惹起し、高太尉がしかと其罪を定め『刀を携へて故なく節堂に闖入し、自分を殺すものだ』と斷案してゐるから、助けることはむづかしい。」

孫「そんなら此開封府は一體朝廷のものではなく、高太尉の所屬なんですか。」

知「何を、馬鹿な。」

孫「高太尉は豪勢な權力家です、其役所では、どんなことでも勝手にします。少しでも氣に入らぬものがあると、開封府に送つて來て、殺さうとすれば殺させ、斬らうとすれば斬らせます。それぢや此役所はまるで高太尉の附屬同樣です。」

知「君の說だと、林冲をどう處分して善いのかね。」

孫「林冲の甲すところを聞きますと、全く無罪ですが、二人の下役を捕縛することが出來ません。ですから刀を携へて節堂に入つたと云ふ點で、背を二十笞つて、入墨した上に、遠方へ配流したらいゝでせう。」

滕知事も林冲の無罪は知つてゐるから、高太尉に對面して、林冲の調書を說明した。高俅も自分の方に道理がない上に、知事に妨げられたので、是非なくそれを承認した。知事は歸廳して林冲を呼出し、枷を脫がせて、二十棒、背を笞ち、顏に入墨して、滄州の牢に配流することに決した。七斤半の首枷をはめて、それに封印をつけ、一通の公文書を帶びた二人の押丁は護送の命を受けた。此兩人の押丁は董超、薛覇と云ひて、公文書を受取ると林冲を引連れて開封府を出た。近所の人々や、林冲

の舅張敎頭は役所の前に待受けてゐて、林冲と兩人の押丁とを橋の袂の酒亭へと案内した。

林「どうも、孫判事のお蔭で、ひどく叩かれずに、歩くことも出來ます。」

張敎頭は給仕に酒や果物を竝べて、兩人の押丁を歡待し、數杯の酒を重ねると、金を出して兩人に與へた。

林「どうも飛んだ目に逢ひまして、無實の裁判を受けました。さてそこで御舅殿にお話がありますから聞いて下さい。御愛顧を受けて、令孃をお貰ひ申しましてから、三年になりますが、夫婦の間には些とも風波はありません。一人の子供もありませんが、今まで少しでも顏を赧くして、云ひ爭つたことはありません。今度は斯う云ふ災難で、滄州へ配流されますが、生死のほどは分りません。妻は私が居なくなつては、定めし心配しませうし、高太尉の小倅からは結婚を迫つて來ませう。まだ年若ですから、私のために前途を誤つてはいけません。之は私の意見で、誰からも云はれたのではありませんが、丁度御近所の方々が此處にお見えになつてゐますから、其御面前で、證書を認めまして、他へ緣づくことは隨意で、文句のないやうに致しませう。さうすれば、私が不在なつても、心配はなし、又高太尉の小倅から辛い目に逢はされることもありますまい。」

張「智殿、そりや一體どう云ふ話なんかね。お前さんは年廻りが善くなくつて、とんだ災難にお逢ひなんです。決して自分で作つた罪ではありません。今は暫く滄州に往つて、災難を避けても、やがては天も憐みなすつて、目出たく歸つて來られるであらう。其時には又もとの夫婦です。此老人は些と

やそつと財產もありますから、娘は小間使の錦兒と家へ連れて歸り、決して外へはやりませんで、三年五年は養ひませう。隱して置きますから、高太尉の子息には指でも觸らせません。決して心配して下さるな。此老人は總て引受けます。滄州へは手紙や衣服を度々送りますから安心してゐて下さい。」

林「どうもいろ〳〵有難うございますが、それは却つて雙方を誤りますから、どうか私の意見通りになすつて下さいませ。」

と、言を盡くしたが、張敎頭は無論承知をしない。近所のものも贊成しない。

林「私の申すところを、お聽きにならなけりやア、どうかして歸つて參つても、斷然夫婦とはなりません。」

張「さう云ふことなりや、まア〳〵お前さんの云ひ狀を立てようから、離緣狀をお書きなさい。私が娘をよそへ嫁にやらなけりやそれでいゝからねえ。」

給仕に云ひつけて、代書人を呼び寄せ、林冲の口授を認めさせた。

東京八十萬近衞師範林冲儀、重罪を犯して滄州へ配流され、今後生死不明に御座候。就ては妻張氏はまだ年若に有之候間、此離緣狀相渡し候に於ては、他への再婚は勝手たるべく、何等の故障申す間敷候。右は拙者の希望より出でたるものにて、他より强請せられたものにては無之候。爲後日仍而如件。年月日。

代書人が書き畢ると、林冲はその筆で年月日の下に花押を署し、手形を捺して、舅に渡さうとする

時、おい〳〵泣きながら飛ぶが如くに入つて來のは、其妻であつた。小間使の錦兒は一包の衣服を抱いてもろともに此酒亭に尋ね來たのである。それと見て、林冲は身を起して、そばに立寄り、

「張さん、私の意見は、もう舅御に申して置いたんです。私も今度はとんだ災難に遭つて滄州へ行くんですが、生死は分りません。それではまだ若い張さんの前途を誤るかと思ひますから、此處へ證書を書いて置きました。どうか私を待たずに、いゝ所があつたら、片付いて下さい。林冲のために張さんの身を誤らせては、いけないんです。」

さう聞くと、妻は泣いて、

「あなた、私は少しも惡いことは致しませんのに、どうして離緣をしようとなさるんです。」

林「いえ、之は私の好意なんです。後日雙方のためにさうするのが、あなたを誤らせないで、いゝと思ふからです。」

張「これ娘、安心しなさい。婿殿はあんなに云はつしやるが、私は決してお前を他所へはやらぬ。これは婿殿を安心させるために承知したのだ。私もお前の一生涯の費用を用意して置いて、婿殿が歸つて來なくても、お前の操を全くさせるから、いゝぢやないかえ。」

聽いてゐた妻女は、其離緣狀を見ると、わつとばかりにそこに泣き倒れて、氣絕したが、林冲は舅とともに介抱して、やつと蘇生させた。林冲は去り狀を舅に渡す。近所の女連も來て林冲の妻を慰めて、此場を立去らせる。

張「林冲さん、無事に歸つておいでの節には又もとの鞘に收まつて下さい。明日は娘を家へ連れて行つて、お前さんのお歸りを待ちませうから、安心しておいでなさい。心配は無用です。好い便があつたら、度々書面をよこして下さい。」

林冲は起上つて、禮を云ひ、舅や近所の人達に別れを告げ、包を背負ひ、押丁とともに出發した。張教頭は近所の人達と己が家へと戻つた。

兩人の押丁は林冲を連れて役人の詰所に預け置き、めい〳〵己が家に歸つて支度をする。其一人の董超が家の中で包をこしらへてゐると、町の酒亭の若い者が來て、

「董の旦那、どこかの方が宅にお見えになりまして、お目にかゝりたいと云つておいでです。」

董「そりや誰だい。」

酒「一向存じません方ですが、旦那に是非おいで下さいと云ふのです。」

董超は若い者と酒亭の座敷へ往つて見ると、頭には萬字の頭巾を戴き、身には黑紗の上着をつけ、足には黑靴と新しい靴下とを穿いてゐる立派な男がゐた。董超を見ると、慌しく辭儀をして、

「さあお坐り下さい。」

董「今までにお目にかゝつたこともございませんが、どう云ふ御用で。」

男「まア〳〵お坐んなさい、其うちに分ります。」

董超は向う側へ坐ると、若いものは酒杯や料理を運んで來て、卓子の上に竝べた。

男「薛さんのお住居はどちらです。」

董「此すぐ近所の町です。」

すると、若い者を呼んで、善く其處を尋ね、

「此處へ御案内申せ。」

と、云ひつける。若い者が、出て行くと、間もなく薛覇を連れて來た。

董「此旦那が私に話があると云ふのだ。」

薛「お名前は伺はないのか。」

男「今に分りますから、まア一杯おやんなさい。」

盞を數杯傾けると、其男は懷から金子十兩を取出して、卓子の上に置き、

「お二人で五兩づつお分け下さい。ちよいとお頼みしたいことがあるんです。」

兩「御存知も申さぬ方が、どうして金子を下さるのです。」

男「お二人はこれから滄州へお出かけになるのでせう。」

董「如何にも役所の用で、林冲を護送して、そこへ參るのです。」

男「さうならば、お二人に御依頼することがあるんです。私は高太尉の腹心のもの陸虞候です。」

云はれて、兩人は恐れ入つて、

「貴方のやうなお方と對座する身分ぢやございません。」

陸「高太尉と林冲とが敵同士なことは承知してゐるでせう。今太尉からの命令で、此十兩をお二人に上げるんですから、收めて下さい。遠方には及ばない、近所の淋しい處で、林冲を一思ひに片付けて滄州から、途中で病死したと言ふ返事を取つて來ればいゝのです。開封府で文句を言やア高太尉が言ひ分けをするから、一向差支はない。」

董「そいつはむづかしいでせう。開封府では生きた林冲を護送せよと云ひつかつた。殺せとは云ひつかりません。又本人もまだ老人ではないんですから、途中で病死と言ふわけにも往きますまい。若し齟齬があつちやいけません。」

薛「おい董さん、聞きなさい。高太尉殿は我々どもの命を取るとなされても仕樣がないんだ。それに此旦那からわざ〳〵お金を我々に下さるんだ。文句はないぜ、頂戴して置けよ。またいゝことがあらア。後日になつたら、お前は私を有難がるだらうぜ。行先の大松林は恐しく深いから、構ふこたアない。あそこで片付けてしまはう。」

と、金子を懷に入れ、

薛「旦那御安心なさい。多くて五日、少くて二日の中には何とか眼鼻をつけます。」

陸謙は大喜び、

「薛君は話が早い。やつつゝけたら、林冲の頰の入墨を證據に持つてお歸り。其時には、又十兩駄賃

に進ぜよう。よい首尾を待つてゐます。失敗しちやいけませんぞ。」

三人は猶酒を酌みかはし、陸虞候は勘定を支拂ひ、酒亭を出て、左右に別れた。董超、薛霸は金子を分けて家に歸り、行李を携へ、棍棒を手にして、役人詰所にゐる林冲を引き連れて、旅路へと上つた。

城を離れて三十里ほど往つて、一泊し、翌朝早く又滄州路を指した。時は六月で、暑氣がきびしい。林冲は棒で打たれた時には、大した痛もなかつたが、二三日過ぎてから、炎暑のために棒の瘡が痛み出して、新しく打たれたやうに、一歩行つては休んで、路が中々はかどらない。」

薛「こりやいけない。此處から滄州までは二千餘里あるのに、こんなこつちや、いつ到着するか分らないぜ。」

林「どうも棒で打たれた瘡が、今になつて出て來た上に、斯う暑いのですから、どうかゆつくり歩いて戴きたい。」

董「ぐづ〳〵云はないで、さつさと歩いたがいゝ。」

薛霸は歩きながら、頻りに不平を竝べて、

「飛んでもないことになつてしまつた。お前のやうな魔に取りつかれたから、片無しだ。」

日も暮方になつて來たので、三人は村の宿屋に投宿した。部屋に入ると、押丁どもは棍棒を立てかけて、包を解いた。林冲も包を解いたが、兩人の口を開くを待たず、包の中から些の金子を取り出し

て、宿屋のものに賴んで、酒肉を買はせたり、米を購はせたりして押丁どもに馳走した。兩人も別に酒を註文して林冲にすゝめたので、林冲は醉つて、其儘そこに横になつた。

薛霸は一つの鍋に熱湯を沸して、洗足盥に汲み入れ、

「林師範、足を洗つておやすみ。」

林冲は起きようとしたが、枷に支へられて、急に起きられない。

薛「洗つて上げよう。」

林「それには及びません。」

薛「そんなこたア構はない。」

林冲は計とは知らず、足を伸すと、薛霸はぐいと捉へて一息に熱湯の中へと突き込む。林冲はあつと叫んで、足を縮めて起き上ると、足は一面に紅く腫れ上つてゐる。

「もうようございます。」

薛「罪人が役人の用をつとめるのは當り前だが、役人が罪人の世話をするなんかありやしない。好意で洗つてやると、何とかかとか云つて嫌がる。恩を仇と言ふもんだ。」

と、繰り返し〳〵罵つてゐたが、林冲はそれに對して何とも云はず、一方に倒れてゐた。兩人は湯を棄て、新しいのと取替へ、外の方で足を洗つて寢てしまつた。

まだ旅宿の誰も起きないうちに、薛霸は起き上つて、顏を洗ひ、火を起して、飯を作つて食べる。

林冲は起きたが、目まひがして、食事は咽喉に通らぬ。歩かうとしても歩かれない。薛霸は棍棒押取りて、無理やりに動かせる。董超は腰から一組の新しい草鞋を解いて林冲に穿かせたが、乳も紐も癒で作つてある。林冲の脚は一面に水ぶくれとなつてゐたので、穿き慣れた草鞋を探して見たが、見當らない。是非なく新しいのを穿いて、旅宿を出ると、夜はほの〴〵と明け初めた。

「二三里も行かぬうちに、脚の水ぶくれは、新しい草鞋で破れて、一面に紅い血汐で染まつた。もう歩くこともどうすることも出來ず、唯ひたすらに悲鳴を揚げてゐる。

薛「やい早く歩かんか。歩かないと、ぶんなぐるぞ。」

林「勘辨しておくんなさい。何も、わざとぐづ〴〵するんではないんです。脚が痛くて、歩けないんです。」

董「そんなら私の肩へおつかまり。」

と、林冲を肩へかけて又四五里歩いたが、もうこれよりは一歩も歩けない。早くも前面に烟霧立ちこむる深林を認めた。其名を野猪林と呼びて、東京より滄州への街道第一の難所である。宋時代には恨を抱くものが、ちとばかりの錢を役人につかつて、好漢をこの森で殺害することが往々あつたのである。

董「夜明けから十里も歩けないやうぢや、いつ滄州へ行き着くか知れやしない。」

薛「此方ももう歩けないから、森の中でどりや一休息やらかさうかい。」

と、三人は森の中へ入つて、行李と包とを解いて木の根元に置いた。林冲は一聲「あゝ」と云つて一株の大本の下へ打倒れる。

董、薛「一足歩いては一足待つ。これぢや疲勞れてしまつたから、一眠して往かう。」

と、棍棒を打棄てゝ、木の所へよりかゝつて、眼をつぶるやうであつたが、何やら聲を出しては起き上る。

林「お二人は、どうしたんです。」

両人「眠らうと思ふんだが、此處には締がないから、お前に逃げられては大變だからなア。安心しちやア寢られないのさ。」

林「私は天下の好漢です。役所の裁判でも服從したのですから、どこへも隱れやしません。」

薛「うつかり、欺されやしないぜ。私達に安心させるつもりなら、縛られなさい。」

林「縛りたきやお縛りなさい。ぐづ〴〵云やしませんから。」

薛霸は腰から、繩を解いて、林冲の手足と枷とを一つにしつかりと縛つて、木に結はへつける。つけるや否や、董超と両人で躍り上つて、棍棒摑んで、林冲の側近くへ歩み寄り、

「何も私達がお前を殺さうとするのではない。此間、出立の時に、陸虞候と云ふ男が、高太尉の命令で來て、お前を此處でばらしてしまひ、顏の入墨を剝いで歸つて來いとの云ひつけだ。これから幾日歩いたところが、どうせお前の命は助からないのだから、死ぬなら早く此處でやつた方が手つ取り早

くてい。だが私達を怨んぢやいけないぜ。上官の命令で、私達の考へから、出たんぢやないから、あきらめてくれ。來年の今日はお前の一週年だから回向ぐらゐはしようぜ。さあ日限が極つてゐて早く此由を復命せにやならない。」

聞く林冲は、はら〳〵と涙を流し、

「お前さん方と私とは何にも遺恨はないのです。助けて下さりや一生忘れません。」

董「何をぐづ〳〵吐かす。助けるこたアならない。」

薛霸は棍棒を振りかざして、林冲の頭を目がけて、あはや打ち下ろさうとした。

九、野猪林

薛霸の棍棒が空に閃く時、忽然として松樹の後に雷の鳴る如き大喝一聲、つゞいて一條の鐵禪杖はうなつて、棍棒を一なぐり、虚空遥かに飛ばすと、一人の肥大和尚が現はれた。

「委細は森の中で、とつくと聞いてゐた。」

押丁兩人は、驚いて其和尚を見ると、黑布の直綴を着け、一振の戒刀を腰に佩き、禪杖を振り廻して、二人の押丁を唯一打に微塵となさんとする。林冲は眼を定めて見ると、これなん魯智深其人であつた。

「兄分、まア待つて下さい、話があります。」

と、林冲は慌しくとゞめるので、智深は禪杖ををさめた。押丁兩人は呆氣に取られて、動きもやらぬ。

林「此二人は、別に關係はないのです。みんな高太尉と陸虞候との計らひで、兩人に言ひつけて、私を殺させようとするのです。兩人は彼等に從はねばならないのですから、兩人を打殺すのは、可哀さうです。」

魯智深は、戒刀で繩を切り放ちて、林冲を扶け起し、

「兄弟、俺は君が刀を買つた時に別れてから、心配してゐたんだ。裁判を受けたと聞いたが助けやうがない。其中に滄州に流されるとの評判で、開封府の役所の前で待つてゐたが、たうとう逢へない。役人詰所に監禁されてゐるとの話、そこへ酒亭の若い者が押丁二人を一人の役人が招待して、何やら話してゐることを見た、と云つたから、こいつ容易ならんことだ。こりや、てつきり途中で君を殺すのだらうとそれから跡をつけて來ると、こやつら二人の呆助が、君を連れて宿屋へ入つたから、俺もそこへ泊ると、其晩這奴等がこつそりと熱湯で君の脚をひどいことしやアがつた。其時に飛出して、呆助どもを片付けてくれようと思つたが、宿屋では人目が多くつていけない。俺は這奴等の太い了簡のあるのを見たから、こりや油斷がならないと、夜明に君が出立する前に起きて出て此森へ驅け込んで、呆助どもを殺してくれようと待つてゐると、這奴等は兄弟を殺さうとするのだ。よし來た、這奴等を片付けてくれよう。」

林「兄分のお蔭で私は助かつたが、どうか二人は助けてやつて下さい。」
魯智深は二人を睨みつけ、
「呆助ども、手前達二人は肉雑炊にしてくれる筈だつたが、兄弟の顔に面じて許してくれる、命冥加の奴だ。」
と、一喝して、戒刀を鞘に收め、
「呆助ども、兄弟を扶けて、俺のあとからついて來い。」
と、禪杖を提げて、先に立つ。二人は唯々諾々。
「林師範お助け下さい。」
と、云ひながら、包を背に、棍棒を手に、林冲を助けて、其包をも背負ひて、森を出て行くこと三四里、村の入口に酒店があるので、一同は先づそこに憩んだ。酒と肉と餅とを註文すると、若い者が來て、酒を注いだ。
押丁「和尚様はどちらのお寺の御住持でございます。」
魯智深は笑つて、
「呆助ども、俺の住居を聞いてどうする氣だ。定めし高俅の野郎にさう云ふつもりだらう。外の奴なら、野郎を怕がるだらうが、俺なんか彼奴に出逢つたら、三百の禪杖を食はしてやるぞ。」
押丁二人は一言半句も出ない。飲食をすまし、行李を取收め、勘定を拂つて、又そこを出立した。

林「兄分はこれからどこへおいでなされる。」
魯「人を殺しや、血を見るし、人を助けりや徹底的に助けるのさ。俺りや君を離れない。これから兄弟を送つて滄州へ行くのさ。」
聞いた押丁兩人は互に顏見合せ、
「こりや大變だ。こちとらの仕事はめちやくだ。これぢや何と云つて復命しよう。」
と、つぶやきながら、一所について行く。
これから先は魯智深の命令通り、歩かうとすれば歩き、休まうとすれば休む。機嫌のよい時には吐鳴る。惡いと、ぶんなぐられる。二人は大きな聲も出せない。唯々和尚の氣に逆はないやうにつとめる。二日ばかり行くと、一臺の車を求め、林冲は車上で休息する、三人は其あとからぞろ〳〵ついて行く。二人の押丁は唯々恐れをなして、命あつての物種と、云ふなり次第に從つてゐる。魯智深は途中で酒や肉を買つて林冲を犒ひ、二人の押丁にも飲食させ、宿屋には早く着いて、晩く出立し、火を起させ飯をこしらへさせるのは、總て押丁兩人の役人の役目であつたが、無論異議を申立てるわけにはゆかぬ。二人はひそ〳〵額をあつめての相談。
「おいこちとらは此和尚に見張りされて、手も足も出やしない。歸つて往つたら、高太尉にどんなひどい目に逢ふかも知れやしない。」
薛「私が聞いてゐるには、大相國寺の野菜園に新しく魯智深と云ふ坊主が來たと云ふことだが、あの

和尙はきつとそれに違ひない。歸つたら、ほんとの話をしようぢやないか。野猪林で林冲を殺さうとしたら、和尙に飛び出され、一所に滄州までついて行かれたので、手が出ませんでした。さう云つて仕方がない、十兩を還すさ。それで陸謙に此和尙を探さしたら、私とお前とは無事だらうぜ。」

董「そりや尤もだ。」

斯くて十七八日を過ぎて、滄州近くへ到着した。これから滄州までは七十里ほど、途中は人家つゞきで、もう淋しい處はない。魯智深はいろ〳〵聞合せて見ると、如何にも其通りだ。そこで松林の中で休息して、

魯「兄弟、此から滄州まではもう遠くなく、行手はすべて人家で、淋しい處はない。調べて見たら其通りだ。就いては此處でお別れして、又、後日逢はうぜ。」

林「兄分、歸つたら、どうか、舅のところへ知らせて下さい。助けて下すつた御恩はかならず忘れません。」

魯智深は一二十兩の金を林冲に贈り、又二三兩を押丁二人にやつて、

「おい、こりや呆助二人、一體なら途中で手前達の頭を叩き毀すところだつたが、兄弟の顏に面じて助けてやつた。もうこれからは遠くもないから、よくない心を起すと、承知しないぞ。」

兩人「へい〳〵どう致しまして、こりやみんな太尉の指圖でございます。」

と、金を懷に入れて別れようとする。魯智深は兩人をはつたと見つめて、

「やい呆助、手前達の頭は、此松の木とどつちが堅い。」

兩人「へい御戲談を。手前どもの頭は親讓りの皮と肉とで、骨を張つたものでございます。」

智深は禪杖を振廻して、松の木に向つて、えいと打ち下す。みり〳〵〳〵と唯一打に松は二つに折れる。

「呆助ども、惡心を出すと手前達の頭は此松の木と同樣だぞ。」

禪杖を手許にたぐつて、

「兄弟無事に暮らせよ。」

と、唯一聲、すた〳〵ともと來し路へ取つてかへす。押丁兩人は、ぽかんと舌を吐いたぎり、暫しは口が塞がらない。

林「さあ御兩人、出かけませう。」

兩人「どうも强い和尙だ。一打で松の木がぽつきり折れた。」

林「こんなことぐらゐは、朝飯前の仕事です。相國寺の大柳を根から拔いたんですもの。」

兩人は頭を左右に搖かして、

「そりや全くほんとのことだ。これで見ても分る。」

三人は松林を過ぎて、晝頃には街道に一つの酒亭を見つけてそこに休んだ。

林冲は兩人の押丁を上座に据ゑたが、兩人は此半日は初めて自由の身體になつたのだ。此酒亭には

いくつかの座席があつて、それ〴〵客が坐つてゐる。三四人の給仕は其間を忙しさうに立ち働いてゐる。林冲達は半時も待つてゐたが、給仕は少しも用を聞きに來ない。待ち兼ねて、林冲は卓子を叩きながら、

「おい、どうしたんだ。罪人だと思つて馬鹿にしちやいけない。何も無錢で飲食しようとするんぢやないぜ。」

と、叫ぶと、主人は、

「そりやお前さんは人の好意を知らんと云ふものだ。」

林「何も持つて來ないのに、何の好意があるものかい。」

主「お前さんは知らないのか。この村には柴進と仰しやる、大金持の旦那があるんだ。旦那と云や誰知らぬものはない。世間では小旋風と申上げてるんだ。辱けなくも周の柴世宗皇帝の御子孫だ。陳橋にて御位を太祖武德皇帝にお讓り申してから、當代では勅して誓書鐵券を賜つて、現に其家にあると云ふ大したお家柄さ。往來の好漢を招待して、三四十人は家に養つておいでなさる。常々のお云ひつけに、若し私の店に配流の犯人が來たら、邸へよこせ、援助してやらうとの仰せだ。今お前さんに酒や食物をあげて、顏の色でも眞紅にして往つて御覽。こりや旅費が澤山あるとお思ひなすつて、構つては下さらないぜ、どうだ、賣らないのは私の好意だらう。」

林冲はそれを聞くと、兩人の押丁に打向ひ、

「私が都にゐて、軍隊を教練してゐた折、軍隊の中で折々柴旦那と云ふことを云つてゐるのを聞いたが、さては此處の人と見える。尋ねて行かうと思ふがどうだ。」

兩人は思案して、

「別段に損もあるまいから、往くなら往きませう。」

と、林冲は主人に其邸の在處を尋ねると、

主「之から向うへ二三里行くと大きな石橋がある。そこから曲つて行くと、大構への邸が見えるが、それがさうなんだ。」

との返事。林冲等は厚く主人に禮を述べて門を出て行くと、如何にも大きな石橋がある。それを渡ると平坦な大道があつて、早くも柳の蔭に一座の大邸宅が見えた。あたりは一筋の大河で、兩岸は一面に枝垂楊。其木蔭に白い塀が隱見する。廻り廻つて門前へ出ると、廣い板橋の上に四五人の下男が涼んでゐる。三人は禮をして、

林「どうか旦那へ、都から流されて來た林冲と言ふものがお目にかゝりたいと取次ぎして下さい。」

下男は一同に、

「こいつア運が惡かつた。旦那が家にいらつしやりや、お前さんに飲食させ、錢もくれさつしやるが、今日は朝早くから獵へ出かけなすつて、お留守だよ。」

林「いつ頃御歸りになるでせう。」

下「そいツア分らねえなア。東の屋敷へお立寄りなさることもあるからな。」
林「全く運が悪いんですな。そんならお暇しませう。」
と、下男に別を告げて、またもとの路を辿つたが、何となく物足らない氣がする。半里ばかり行くと、遠くの森のあなたから一群の人馬が邸の方を指して來るのを望見した。

其一群の人馬の中央には白馬に跨つた一人の武家がゐた。眉は龍の如く、目は鳳に似て、齒は白く、脣は朱く、口のほとりには髭鬚が美しい。年の頃は三十四五、頭には黑き紗の絞りあげた頭巾を戴き、身には胸に紫の花を縫した袍を着け、腰には寶玉を嵌めた環帶をしめ、足には靑黑い色へ金線をつけた禮式の靴を穿き、一張の弓と、一壺の箭とをつけて、伴人引連れ邸の方へと向つた。林冲は見て「こりや柴進であらう」と思つたものゝ、躊躇つて、問ひもしない。すると馬上の武家は馬を林冲の近くへ進め、
「其首枷をした人はどこのお人です。」
林冲は忙しく身をかゞめ、
「私は、東京近衞の師範林冲と申す者ですが、高太尉に惡まれ、開封府の裁判を受けまして、此滄州へ流されたのでございます。先程あれなる酒亭にて、此處には賢士を招かれる豪傑柴先生と云ふ方がおいでになると置きましたので、其お邸へ參りましたが、緣がなくてお目に懸れませんでした。」

と、云ふを待たず、馬上の武家は馬より飛んで下り、
「これは柴進がお出迎ひもしませんで相濟みませんでした。」
と、恭しく禮したので、林冲も慌しく答禮した。彼の武家は林冲の手を取りて、邸へと同伴する。下男どもはそれと見て門を開いた。柴進は林冲を座敷へ案内し、禮畢つて後、
「先生の御高名は久しく承はつて居りましたが、圖らずも此邊鄙な地へおいで下さいまして、平生渴仰の念がかなひました。」
林「林冲は兼々御尊名の高く誰人も知らないものはないのに敬意を表して居りましたが、今日は思ひがけなく罪を得て此處に參つて尊顏を拜しまして、仕合せに存じます。」
と、云へば、柴進は謙遜し、林冲を席にするゑる。兩人の押丁もつゞいて坐つた。柴進の下男に酒を持つて來いと命ずると、數人の下男は、いつもの流人通りに、肉一皿、餅一盆、一壺の酒と一つの臺に一斗の白米と、其上錢に十貫文を載せたのを運んで來た。
柴「田舍ものは人格の高下を知らないで困る。師範がおいでになつたのに、こんな粗末なものを持つて來てどうする。早くあちらへ持つていつて、先づ果と酒を持つて來い。それから、羊を料理して來い。」
と、云ひつける。林冲は身を起して、
「閣下、そんなにお手厚くおもてなし下さいますな。これで結構です。」